
IS ~ 星空の剣 ~

志波 周

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

IS ～星空の剣～

【Nコード】

N7104V

【作者名】

志波 周

【あらすじ】

女性しか使えない兵器インフィニット・ストラトス。その製作者である篠ノ之束に弟子がいた。彼女の名前は有峰優。篠ノ乃束をして「天才」と言わせる彼女が、世界で唯一ISが使える男、織斑一夏と出会い何を成していくのか。皆さんに感化され書き始めました。処女作で拙い部分も多いと思いますがよろしく願います。更新も遅くなると思うのであまり期待しないでください。

第一話（前書き）

始めまして志波 周と申します。こういうものは初めてなので拙い部分も多いと思いますがよろしくお願いします。

第一話

ここは誰も来ない場所にある誰も知らない秘密のラボ。

「うーん、やっぱりこの回路だと余剰エネルギーが出てしまいますか。出力は4%ほど上がりますが熱がこもるので劣化が激しくなりますね。やはり駄目ですかね。」

見るものが見れば既存のものよりはるかに優れたものだと思えるものを”駄目”の一言で切り捨てるのは高校生くらいの少女。

「ならここの数値を上げてこつちを下げたら…。<優亜>、シュミレートお願い。」

この部屋には彼女一人しか居ない。だが彼女の声に答えが返ってくる。

『はい、マスター。……その場合こうなります』

その姿なき声とともに彼女の前のディスプレイの一つにシュミレート結果が映し出される。

「…出力約2%上昇、エネルギーの供給速度も1%上昇。こんなところですかね。ありがとう<優亜>。」

『マスターのためなら当たり前です。』

その答えにいくら高度な学習機能を積んであるとはいえ面白い具合に進化しているな、と思いつつ、何か飲もうかと立ち上がったとき、

「ゆーちゃん。ちょっときて〜。」

と、隣の部屋から呼ばれた。

（いったいなんでしょう。なにか面白いものでも作ったのでしょうか？それともくだらない研究をしているくだらない研究所を潰せとも言うのでしょうか。そうだとしたらISの稼動データは取れるので悪くはありませんが正直面倒くさいですね。）

などと少々物騒なことを考えつつ隣の部屋へと向かった。

「何ですか束さん。何か面白いものでも出来ましたか？」

「ちつつち。違うんだな。束さんはゆーちゃんに頼みたいことがあるのだ。」

「束さんが頼み事なんて珍しいですね。いったい何ですか？」

「ゆーちゃん、明日からIS学園に行ってきたね。」

「……はい？」

あまりに予想外のことには彼女——有峰優は呆然とした。

「ん？聞こえなかったのかな？じゃあもう一度言うけど、ゆーちゃんには明日からIS学園に行ってもらおうかなーって。」

「いえ聞こえていますから大丈夫です。それにしても、いきなり突拍子もないことを言う人だとは知ってましたけど……。なぜIS学

園に？　いったい何をしろと？」

ISのことなら優の目の前の人物——篠ノ之束の下にいる以上、他の所に行く必要なんてないので彼女の疑問はもっともだ。

「うん。ゆーちゃんにはいつくんと篤ちゃんを守って欲しいんだよ。」

その声は普段のふざけたような声色ではなく真面目なものだった。いつもの調子で話すと思っていたので優は少し驚きながらも真剣に話を聞いた。

「いつくんと篤ちゃんって言うと、織斑一夏と篠ノ之篤でしたよね？　いつもはなしていた。またどうしてですか？」

「いつくんはISを起動させちゃったし、篤ちゃんも私の大事な妹だからね。間違いなくたくさん狙われちゃうよね。だからだよ。」

その言葉から束の大切な人を守りたいという気持ちが伝わってきた。

「…分かりました。他ならぬ束さんの頼みですし出来る限りのことはしましょう。…出来ればもっと早く言って欲しかったものですが。」

愚痴をこぼしながらもその思いを感じ、束の頼みを受け入れる優。

「うんうん。ありがとねゆうちゃん。ゆーちゃんなら大丈夫だよ。なんてったってこの束さんが認めた天才さんだもん。」

「褒めてくれるのはうれしいですが…。そっいえばIS学園のほう

には連絡してありますよね？」

「もちろんだよ。この束さんが手抜きがなく完璧にやっておいたよ。」

胸を張ってそう言う束。それに優は

「つまりは始めから行かせる気だったってことじゃないですか。だったらそういうことをする前に頼んで欲しかったですね。」

「え？ ゆーちゃんだったらはいつて答えてくれるって信じてたもん。なら必要ないでしょ？」

そんな発言に対し優はため息をつきながら、

「はあ。それでも聞いてくれたほうがこっちも楽なんですけどね。まあいいです。それじゃあ明日早くなりそうですね、もう寝ますね。おやすみなさい。」

「うん。お休みゆーちゃん。」

その束の声を背中に聞きながら優は部屋を出た。

「明日からずいぶんと色々ありそうですね。これからどうなるんでしょうね。」

独り言のようにつぶやいた台詞に＜優亜＞が答える。

『何があるかとマスターなら大丈夫でしょう。私はそう信じております。』

「生み出した私が言うのもなんだけどあなたがAIだとはとても思えませんか。ずいぶん成長したものです。」

<優亜>のとても機械だとは思えぬ発言に、少し驚きながら返事をする。

「私もあなたの期待を裏切らないように頑張りましょうか。」

『私も出来うる限りマスターのサポートをさせていただきます』

「信頼していますよ<優亜>。」

そう言い彼女はちょうどついた寝室に入りベッドの上に横になった。

（まさか私が学校に行くことになるとは思いませんでしたね…。行ったことがないので少し楽しみです…。）

こんなことを考えながら優は眠りについた。

第一話（後書き）

感想・意見・誤字脱字等がありましたらよろしくお願いします。

主人公と一夏を最終的にどうするか悩んでいます。

友達のままか恋人になるか。

こういうのってどうしたらいいんでしょうかね？

設定（前書き）

拙作を読んでくださってありがとうございます。
少しづつやっていくので、過度な期待はしないでください。

設定

主人公

名前 ありみね
有峰 ゆう
優

性別 女性

年齢 15歳

身長 167・7cm

体重 秘密

好きなもの IS、コーヒー、夜空、篠ノ乃 東、友人

嫌いなもの ISを悪用するもの、コーヒーにミルクを入れるもの

容姿

黒い髪を腰まで無造作に伸ばしている。あまり手入れはされていない。
い。

切れ長の目を持ち色はヴァイオレット。

美人で、かわいいというより綺麗という表現が似合うタイプ。

スタイルはかなりいい。全体的にかなり引き締まっているが出るところは出ている。

備考

常に敬語で喋る。

表情の変化が乏しい。

自分に関してかなり無頓着。

容姿にも自分に向けられる感情にも特に興味を示さない。

男に裸を見られても羞恥心を感じないレベル。好きではない人物や赤の他人だったら蹴り飛ばしはするが。

周りの状況を楽しみ、さらに引つ掻き回したりする。ただし止める事も多い。

意外と常識を知らなかったりする。

わずかに研究狂いの気がある。

基本的に束を反面教師としているが影響を受けている部分も少なくない。

千冬に一夏達のストッパー役だと認識されている。

『黒き魔女』という二つ名がある（本人はあまり好んでいない）。

家事はそれなりに出来る。束と暮らしていた頃は家事担当でもあったため。

操縦技術は千冬とほぼ同等。わずかに劣る程度のレベル。

IS

名称 星空の剣

製作者 有峰 優（技術提供等 篠ノ乃 束）

世代 第四世代

待機状態 全体に小さな宝石がちりばめられた黒い指輪（左手の中指にある）

有峰優の製作した第四世代の高機動広域殲滅型IS。展開装甲ではフォーム・チェンジなく、戦闘中に瞬間的にパッケージ換装に近いことをする形態変化

によって即時万能対応機を実現した。また、コアも特別製で、ISの適正でA以上でないと乗ることすら出来ない、兵器としてはさらに使いづらいものになっているが、その代わりエネルギーを半永久的に生み出す、非常に強力なものとなっている。ちなみにこのエネルギー生成は止められないため、どうにかして消費し続けられないといけない面倒なものとなっている。そのぶん、ほぼ無限のエネルギーによるすさまじい機動力と攻撃力を誇る。この機体には高度な学習機能を搭載している超高度AI<優亜>が搭載されている。<優亜>は戦闘、計算その他あらゆることで優をサポートするために生み出された人工知能。一般生活のサポートもする。ISを単体で動かすことも出来、優が動かさなくても<優亜>のみで代表候補生と戦闘が行えるほど。ちなみに<優亜>との会話は頭の中で行われるため傍から見ても変な人だと思われる。機体はISとは思えないほど小さく、翼の非固定浮遊部位以外は生身より一回り大きい程度。（非固定浮遊部位である翼は普通のISのものより少し大きい。）機体の色は黒で間接部分が金。部分部分でスラスタが突き出て翼の形状も含めて鋭角的なデザインとなっている。

武装

星影：ビームライフル。ハンドガンサイズのもの。貫通力を高めているため大きさの割に威力が高い。

昂：ビームサーベル。近接用武器。二本あり両足にある。展開しなくても最初からあるので、咄嗟に使いやすい。

織女：ビームダガー。狭い所での戦闘を考慮して搭載してある。

煌星：ビームマシンガン。無限のエネルギーを利用すすさまじい数のビームを乱射する。弾幕を張るのに便利。

星崩し：両肩に搭載された光学系の主砲。非常に威力が高くリミッターを掛けていないと絶対防御すら当たり前のように抜く危険なもの。リミッターを掛けてても当たりが悪いと絶対防御を抜きかねない。とどめに使われる。

星の欠片：スラスターである翼に搭載しているビット兵器。二十四基あり、＜優亜＞のサポートによって、すべて操りながら戦闘が可能。星の欠片同士で連結し、威力を上げたり、エネルギーシールドの形成や、エネルギーによる網や鎖を作ったり出来る。使わないときや、エネルギーをチャージするときはスラスター代わりにもなる。一番便利で、一番操作が難しいもの。

流星群：ミサイルポッド。普段は展開されないが非固定浮遊武装の一つ。ミサイルをばら撒く。弾幕を張るのに便利。手持ちではないので他の武装と併用できるのが強み。弾薬費がもったいないのであまり使われない。

天狼：実弾のバズーカ。豊富なエネルギーを使って打ち出すので普通よりかなり早い。威力もかなり高い。弾の種類を変えられるので便利。

掃星：スナイパーライフル。超長距離戦用の兵器。邪魔が入らなければ10km先でもほぼ確実に命中させる事が可能。

星空の剣：非常に高い切れ味を誇る片刃の実体剣。剣身に高密度のエネルギーを纏わせ、切れ味と強度を上げる事が可能。近接武器で威力が最も高い。エネルギーを纏わせている時はビームをはじき返せる。

柄杓星：かなり大きいハルバート。これもエネルギーを纏わせる事が可能。

フォーム・チェンジ 形態変化

この機体の最大の特徴。簡単に言うと戦闘中にパッケージを変えるようなことをするシステム。普通の武器と同レベルの速さで展開できるためあらゆる局面に対応可能。

近接特化 シリウス ：瞬間的な加速と、パワーが最も高い形態。この形態時のみ刀身が16mの大剣『大角』が使える。射撃武器は『星影』のみ。

射撃特化 カウス・アウストラリス ：近接武器を使えなくなつたが、両腕に荷電粒子砲『星の紛れ』を搭載し、射撃武器へのエネルギー供給率を大きく上げた形態。ほぼすべての射撃武器の威力、連射速度が大きく上昇。

防御特化 ハダル ：普段あまり高くない防御を上げるため、シールドピットを搭載し、両腕にシールドをつけ、エネルギーシールドも大きく強度を上げた。この形態は全身の大部分を装甲で覆うことになる。

速度特化 アークツルス ：大型のスラスターを四つ加え、全身にさらに小型のスラスターを搭載することで、素で瞬間加速並の速さで動けるようになった。初速だけはシリウスに若干劣るが、それ以外はダントツで早く、方向転換も優れている。長距離移動も可能。

電子戦特化 レグルス ：戦闘能力は低く、武装も『織女』と『星影』しかないが、電子戦、電子機器の操作において右に出るもの

はおらず、この状態なら篠ノ乃 束すら上回る性能を誇る。クラッ
キングにおいて使われる形態。

設定（後書き）

感想・意見・誤字脱字等がありましたらよろしく願います。

武装の名前は星の名前やそれらしきものから取りました。

第二話（前書き）

お待たせしました。

第二話

教室の中は異様な雰囲気に包まれていた。

「全員揃ってますねー。それじゃあSHR始めますよー。」

黒板の前で微笑むのは山田麻耶。ここIS学園一年一組の副担任である。

サイズの合わない服、若干ずれている黒縁眼鏡、何より本人の雰囲気 of the せいで妙に実年齢より幼く（若く、というよりも）見える。生徒たちと同じ年だと言われても違和感がないほどに。が、これでも立派な先生である。

「それでは皆さん、一年間よろしくお願いしますね。」

「……………」

しかし現在の教室の妙な緊張感のせいで誰も反応しない。

「じゃ、じゃあ自己紹介お願いします。えっと、出席番号順で。」

（…ちよつとうるたえていますね、あの先生。返事をしたほうがよかったでしょうか？しかしこの教室の雰囲気では返事はし辛いですね。）

優は一人平静を保っていたが現在の教室の様子にやりにくさを感じていた。

「…………じゃあ有峰さん、次お願いします。」

「はい。」

（出席番号が二番なので早いですね。…それにしても最初は出席番号順に席が決まると聞いていたんですが、なぜならばらなんでしょう？）

「有峰優です。コーヒーのブレンドの研究とISの開発です。一年間よろしくお願いします。」

前の人の自己紹介を参考に優は無難に自己紹介を終えた。しかしほかの人たちは優の自己紹介をほとんど聞いていなかった。それは優の隣に座る人物に注目していたからである。

「は、はい!？」

今裏返った声で返事をした人物、織斑一夏。世界で唯一ISを操縦できる男で優が束に守って欲しいと頼まれた人物である。この人物に皆興味津々、ずっと視線を向けている。それがこの教室の異様な雰囲気の原因である。

「あつ、あの、お、大声出しちゃってごめんなさい。お、怒ってる？怒っているかな？ゴメンね、ゴメンね！でもね、あのね、自己紹介、『あ』から始まって今『お』の織斑くんなんだよね。だからね、ご、ゴメンね？自己紹介してくれるかな？だ、ダメかな？」

（教師つてもつと毅然としているものだと思っていたのですが…。これが普通なんでしょうか？）

などと山田先生の腰の低さに優は少々ずれたことを考えていた。

そんな考え事をしているうちに、一夏が立ち上がって後ろを向いた。
（全員の視線を一気に向けられてたじろいできますね…。あんなふうになるのは出来れば遠慮したいものですね。）

「えー……えつと、織斑一夏です。よろしく願いします。」

そういつて一夏は頭を下げた。だがクラスのほぼ全員が『もっと色々しゃべってよ』『これで終わりじゃないよね？』という視線をぶつけている。それにだらと背中冷や汗を流し、もつとしゃべって欲しいという期待の視線を受けながら一夏は言った。

「以上です。」

がたたつ。思わず何人かの女子がずっこけた。優も、

（さすがに、この空気では無いと思うんですが。ある意味大物ですね。）

と呆れていた。そんな漫才じみたことをしている時、パアンツ！と一夏の頭が思いつきり叩かれた。
一夏は恐る恐る振り向き、

「げえつ、関羽！？」

などと馬鹿なことを言い、再び叩かれた。思いつきり叩かれたため出た大きな音に、女子が何人が引いていた。

「誰が三国志の英雄か、馬鹿者。」

そこにいたのは織斑千冬。第1回IS世界大会の総合優勝者『ブリュンヒルデ』。世界最強のIS操縦者その人がそこにいた。

（あの人が織斑千冬。束さんが言うには強くてかつこよくてかわいくて綺麗で美人で頼りになって優しくも厳しくてカリスマがあつてクールで強い意志を持つてて重度のブラコンッツ！）

優がそこまで考えた瞬間、千冬が思いつきり優を睨み付けた。

（な、何でも言っていないのにこちらの考えていることが分かったんですか！？顔に出てたわけでもないはずなのにっ！？）

と、優は周りが千冬の登場で騒がしい中一人戦慄していた。ようやく優が立ち直るころにチャイムが鳴った。

「さあSHRの時間は終わりだ。諸君らにはこれからISの基礎知識を半月で覚えてもらう。その後実習だが、基本動作は半月で体に染みこませる。いいか、いいなら返事をしろ。よくなくても返事をしろ、私の言葉には返事をしろ。」

（あんな台詞を普通に言えるってすごいですね。…こういう時ってなんていいましたっけ？分かりますく優亜>？）

『そこにシビれる！あこがれるウ！だと思われます、マスター。』

（……………それだけは絶対無いとだけ言わせてもらいます。まったくまた変な情報を仕入れて…。）

そんな会話をプライベート・チャネル個人間秘密通信と同じ技術によってしつつ、一時間目の授業の準備を始めた。

一時間目も終わり、今は二時間目の途中。優は授業に集中できないでいた。

現在授業でやっているレベルは当たり前のこと過ぎてモチベーションが上がらないというのもあるが、それ以上に理由があった。

（……さっきからちらちらこっちを見たりあっちを向いたり小さく頭を抱えたり、いったい何なのでしょう？）

『マスター、織斑一夏の行動パターンや生体情報、現在の状況等から推測するに、授業内容が分からないのだと思われます。』

（成る程。男だったらISについて勉強したりすることは少ないでしょうし、ありえそうですね。確かめてみましょうか。）

無駄に高度な方法で簡単な理由を推測するく優亜。そしてそのアドバイスに従って優は隣の一夏に小声で話しかけた。

「…織斑さん。さっきから玉にこっちを見ていますが、授業が分からないなら教えましょうか？」

「…ホントか！？助かる！ほとんど全部分からなくてさ、困ってたんだよ。」

「…さすがにそれは……。参考書が何か読まなかったんですか？」

優自身は入学自体束が強引に、急にIS学園側に許可させたので教科書を朝早くにもらっただけで入学前に必読のはずの参考書をもらっていない。なので参考書をもらえたことを知らない。だが、入学することになったなら何かしら読んだりするのではないか？と思って聞いている。が、一夏は

「…ああ、あの分厚いやつか。古い電話帳と間違えて捨てちゃったよ。」

と、突拍子もない行動に対して（束のせいで）慣れているはずの優でさえ数秒停止してしまうようなことを言った。優は（さすがにそれは…）と思いつつもスルーすることに決めた。

「……まあいいです。それで、一体何が分からないんですか？」

「…えっと、まずはここなんだが……。」

「…基礎の基礎からですね。ここは……。」

授業の迷惑にならぬよう、小声で、一夏が授業についていけるように優は解説していった。

二時間目の授業が終わり、ただいま休み時間。
授業が終わり、優は何か飲み物でも買おうと立とうとした時、一夏に話しかけられた。

「さっきの授業はありがとう。えっと……。」

「有峰です。有峰優。呼び方はお任せします。好きに呼んでください。これからよろしく願います。」

そういつて優は少しだけ微笑んだ。

「お、おう、よろしくな、優。俺は織斑一夏。一夏って呼んでくれ。あと敬語じゃなくていいぞ。」

「分かりました、一夏。ですがずっと敬語で喋ってきたのでこちらの方が楽なんです。ですので気にしないでください。」

別に初対面だから敬語だというわけではないんです。と付け加える優。

「そうか、ならいいか。さっきの授業は本当にありがとう。おかげで助かった。意味不明の単語の羅列にしか見えなくてさ。」

「こういうときはお互い様です。気にしないで下さい。…それより、良ければISについて教えましょうか？一夏は本当に何も分からないみたいですし、ちゃんとISについて勉強しないと大変な事になりますから。」

「…いいのか？」

願ってもない提案に、これ以上は迷惑なんじゃないかとためらう一夏。

「勿論です。乗りかかった船ですし。」

一夏のためらいにそんなのは今さらだとしても言つかのように優は即答した。

「なら頼「ちよつと、よろしくて?」「…へ?」「

ならばと一夏が優に教えてもらえるよう頼もうとしたとき声が割り込んできた。

第二話（後書き）

感想・意見・誤字脱字等がありましたらよろしくお願いします。

三人称って難しいですね…。

次の話は一人称（優視点）でやってみたいと思います。

第三話（前書き）

お待たせしました。
前話の後書き通り、一人称で書いてみました。

第三話

私が一夏にISについて教えようかと提案している途中、いきなり誰かが話に割り込んできました。

「聞いてます？ お返事は？」

そこに居たのは、ロールのかかった長い金髪に、ブルーの瞳をした少女でした。貴族のような振る舞いをしていて、雰囲気、態度などが『いかにも』今時の女子でした。…『女子しかISを使えない。だから女子は偉い』と勘違いしている人種ですか、あまりこういう人は好きではないんですね。

「ああ、聞いてるけど……どういう用件だ？」

もつとも、私に話しかけてるているわけでもないですし、邪魔しても悪いですから”星空の剣”の調整でもしていきましょう。

「まあ！ なんですよ、そのお返事。わたくしに話しかけられるだけでも光栄なので、それ相応の態度というものがあるんじゃないかしら？」

…『星の欠片』が他と比べてやはり扱いにくいんですね。ビット兵器は集中力も要りますし、咄嗟のときに使えないのは厳しいですね。普通に使う分には効果が高くていいのですが、もっと反応速度を高くしないと、相手の微妙な動きについていけないときがあるかもしれないんですね。さて、どうしましょうか？

「悪いな。俺、君が誰か知らないし」

…あ、無意識下で動かせるようにハイパーセンサーとリンクさせてしまえばいいんじゃないですか。思考制御だからこそ、集中するぶん遅くなるんですし、手足と同じレベルで動かせばずいぶん楽になりますよね。

「わたくしを知らない？ このセシリア・オルコットを？ イギリスの代表候補生にして、入試主席のこのわたくしを！？」

操作性に関してはやはり錬度を上げるしかありませんが、これなら確実に反応速度も上がりますね。そうと決まれば今日の授業が終わったら早速作業に入りましょう。三日もあれば十分でしょう。

「なあ、優、ちょっと質問いいか？」

「はい、いいですよ。」

おや、一体なんでしょう。話をちゃんと聞いてないので答えられるといいですが。

「代表候補生って、何？」

周りの話を聞こうとしていた女子が何人かひっくり返りました。

…ずいぶんとノリがいいですね。ですが、はしたないですよ。

まあ、気持ちは分からなくもないですが。

「あ、あ、あ……。」

「『あ』？」

「あなたっ、本気でおっしゃってますの!？」

……本気でしよう、この顔は。こんな冗談言っても意味ないですし。

「一夏、代表候補生というのは、国家IS操縦者の、その候補生として選出された人のことです。まあ一言で言うならエリートってところですね。」

「そう！エリートなのですわ！」

おや、さっきまで頭痛がするかのようにつめかみを押さえていたのに、もう復活したのですか。

「本来ならわたくしのような選ばれた人間とは、クラスを同じくすることだけでも奇跡……幸運なのよ。その現実をもう少し理解していただける？」

ずいぶんと言い過ぎな気がしますが……。四組にだって代表候補生はいるらしいですし、あくまで候補生にしか過ぎないのですから。

「そうか、それはラッキーだ。」

「……馬鹿にしていますの？」

これを真面目に言えるのが織斑一夏という人間みたいですよ。

「大体、あなたISについて何も知らないくせに、よくこの学園に入れましたわね。唯一男でISを操縦できると聞いていましたから、少しくらい知的さを感じさせるかと思っていましたけど、期待はズレですわね。」

もともと『織斑千冬の弟』という以外普通の男子学生にすぎなかったのだから仕方ないのでは？ 男がISについて学ぶなんて少ないですし。

「俺に何かを期待されても困るんだが。」

「ふん。まあでも？ わたくしは優秀ですから、あなたのような人間にも優しくしてあげますわよ。」

今までの態度に優しさがあつたとは思えませんが？

「ISのことわからないことがあれば、まあ……泣いて頼まれたら教えて差し上げててもよくってよ。何せわたくし、入試で唯一教官を倒したエリート中のエリートですから。」

私の場合束さんが無理矢理ねじ込んだので入試を受けてないんですよ…。そのせいで明後日、わざわざデータを取るために戦わないとならないのは、少し束さんを恨みたくなりますね。

「入試って、あれか？ISを動かして戦うってやつ？」

「それ以外に入試などありませんわ。」

筆記は無いんですかと、そう聞きたくなりますね、その台詞を聞く。

「あれ？俺も倒したぞ、教官。」

「は……？」

「すごいですね、一夏。初めてで教官を倒したんですか。教官の強さは知りませんけどすごいと思いますよ。」

教官ならばそれなりの熟練者でしょうしね。

「お、おう、ありがとう。」

？ 微妙な顔していますね、どうしてでしょう？

「わ、わたくしだけと聞きましたが……？」

「女子ではってオチじゃないのか？」

あ、ピシッて音が聞こえた気がしました。オルコットさんがすごい顔していますね。

「一夏、むしろあなただけ試験の日がずれたからなんじゃないでしょうか。どうせISを動かした当日には試験をしていないでしょう？ オルコットさんが聞いたときには一夏は戦っていないとしたらオルコットさんが知らなくても仕方がないと思いますよ。」

「おう、言われてみれば、確かにそうかも。動かしてからは色々あったからなあ。」

でしょうね。すべての男にとって希望になるかもしれませんがね。男がISを動かせるようになるのは、大多数の男にとって夢でしょうから。

「つ、つまり、わたくしだけではないと……？」

「いや、知らないけど。」

「あなた！ あなたも教官を倒したって言うの！？」

「うん、まあ、たぶん。」

たぶん？ 『はい』か『いいえ』しかないとと思いますが。

「たぶん！？ たぶんってどういう意味かしら！？」

オルコットさんの疑問ももつともですね。私にとっても意味不明です。

「えーと、落ち着けよ。な？」

「こ、これが落ち着いていられ——」

キンコーンカーンコーン。

「チャイムが鳴りましたよ。いったん戻ったらどうですか、オルコットさん？」

「っ……！ また後で来ますわ！ 逃げないことね！ よくって！？」

その台詞に一夏は微妙な表情をしつつ、頷きました。余計なことを言って面倒事を呼び込む必要はありませんからね。

「それではこの時間は実践で使用する各種装備の特性について説明

する。」

三時間目の授業はどうやら織斑先生がやるみたいです。それだけ大事なことなのでしょう。ちなみに一、二時間目に授業をしていた山田先生はノートを手にとってメモを取る体勢になっています。

「ああ、その前に再来週行われるクラス対抗戦に出る代表者を決めないといけないな。」

またずいぶんと面倒くさそうなものですね…。

「クラス代表者とはそのままの意味だ。対抗戦だけでなく、生徒会の開く会議や委員会への出席……まあクラス長だな。ちなみにクラス対抗戦は、入学時点での各クラスの実力推移を測るものだ。今の時点でたいした差はないが、競争は向上心を産む。一度決まると一年間変更はないからそのつもりで。」

絶対にやりたくないですね。まあよっぽどのが無い限り――

「はいっ、それなら私は織斑君を推薦しますっ!」

「あたしもそれが良いと思いますーす。」

――一夏になるでしょうから問題ないですが。おや、一夏が関係ないって顔してますね。呼ばれているのに何ででしょう？

「では候補者は織斑 一夏……他にはいないか？ 自薦他薦は問わないぞ。」

「お、俺!？」

何をいまさら驚いているんでしょうか？ さつきから呼ばれているのに。

「織斑。席に着け、邪魔だ。さて、他にはいないのか？ いらないなら無投票当選だぞ。」

「ちょ、ちょっと待った！ 俺はそんなのやらな——」

「自薦他薦は問わないと言った。他薦された者に拒否権など無い。選ばれた以上は覚悟をしろ。」

ご愁傷様です、一夏。まあ、気が向いたら手伝ってあげますよ。

「待つてください！ 納得がいきませんわ！」

おや、一夏で決まると思ったら、オルコットさんが何か言い出しました。…すぐ終わるんだからいいと思うのですが。

「そのような選出は認められません！ 大体、男がクラス代表だなんていい恥さらしですわ！ わたくしに、このセシリア・オルコットにそのような屈辱を一年間味わえとおっしゃるのですか！？」

正直どこが恥さらしなのかさっぱり分かりません。というかあれって織斑先生に言っているんですよね？ よくあんなふうに言えますね。

「実力から行けばわたくしがクラス代表になるのは必然。それを、物珍しいからという理由で極東の猿にされては困ります！ わたくしはこのような島国までIS技術を修練しに来ているのであって、

サーカスをする気は毛頭ございませんわ!」

日本人を猿扱いですか、クラスの半分は日本人ですよ? 敵に回すつもりですか? それにイギリスだって島国でしょうに。

「いいですか!? クラス代表は実力トップがなるべき、そしてそれはわたくしですわ!」

暑苦しいですね。いい加減うるさいと思うのは私だけなのでしょうか?

「大体、文化としても後進的な国で暮らさなくてはいけないこと自体、わたくしにとっては耐え難い苦痛で——」

「イギリスだって大してお国自慢ないだろ。世界一まずい料理で何年覇者だよ。」

「カビの生えた歴史と、くだらないプライドしかない国の出身がうるさいですよ。」

…あ、一夏と同時に言いましたね。タイミングがいいのやら……。

『マスター、どうしたのですか? 普段のあなたが言う言葉ではないと思うのですが。』

(確かにそうかもしれませんね。でも恩人の故郷ですからね日本はさすがに少しむかついたんですよ。)

「あ、あなたたち、わたくしの祖国を侮辱するのですか!」

「事実を言っただけですが？　そもそもあなたが威張っていられる理由であるISは、あなたの言うところの文化的に後進的な国で生まれた人間が生み出したんですよ？　日本が後進的ならそんなところが生み出したISのコアをまったく解析できないあなたたちの国はもはや化石レベルだと思いますよ。」

……ふう、思いっきり言っただけのは楽しいですね。おお、オルコットさんがゆでダコみたいですね。そう見ると、なんだか髪が足りたに思えてきました。

「あなた達！　決闘ですわ！」

「おう。いいぜ。四の五の言うより分かりやすい。」

「かまいません。」

たかが代表候補生に、負けるわけありませんからね。無傷で勝利でも目指しましょうかね。

「言っておきますけど、わざと負けたりしたらわたくしの小間使い——いいえ、奴隷にしますわよ」

「侮るなよ。真剣勝負で手を抜くほど腐っちゃいない。」

同感ですね。

「そんなくだらないことはしないので、ご安心を。」

「さて、話はまとまったようだな。それでは勝負は一週間後の月曜放課後、第三アリーナで行う。織斑とオルコット、有峰はそれぞれ

用意をしておくように。」

私までクラス代表の候補になってしまっている様な気がします…。それよりも。

「ちょっと待ってください、織斑先生。」

「何だ、有峰。」

「明後日に私の戦闘データを集めますよね？」

入試を受けてないのでやるそうです。

「ああ、そうだな。」

「だったら、その相手をオルコットさんにしてしまえば、そのぶん早いと思います。どうでしょうか？」

面倒事は一つにまとめた方が楽ですから。

「ふむ、確かにそのほうが楽だな…。よし、有峰とオルコットの試合は明後日に変更だ。それでは授業を始める。」

ふう、これで面倒なことが減りますね。それにオルコットさんのデータを先に取っておけば、一夏が戦う時に楽になりますしね。では、明後日はがんばりますか。

第三話（後書き）

感想・意見・誤字脱字等がありましたらよろしく願います。

やっぱりこの方が書きやすいですね…。もう少しこのままやってみようと思います。

第四話（前書き）

お待たせしました。

感想をもらえるって、すごいうれしいものですね。少しずつがんばっていきます。

第四話

放課後、私の隣で一夏がぐったりとうなだれています。

「うつ……、い、意味が分からん……。何でこんなにややこしいんだ……？ 辞書でもなきゃやっていけねえよ……。」

辞書……ですか。束さんはもちろんですし、私もそんなの考えもしませんでしたね……。

「辞書はありませんが、出来るだけ教えていきますのでがんばってください。」

そういつて私は一夏の肩に手を置きます。あまりにうなだれていて見ていられなかったのだ。そしたら周りで小声で話している女子がこつちを睨んでいます。……睨まれても困るのですが。

そういえば今もですが昼休みはすごかったですね。一夏に誘われて一緒に食べたのですが、食堂に行く途中は大変でした。後ろからたくさんの人が着いて来たり、通ろうとすると大きく道を開けたりすごかったです。まさに珍獣扱い。付け加えると、普通に一夏と話していただけなはずなのに、色々私について『抜け駆け！？』とか色々噂になったみたいです。

「ああ、織斑君に、有峰さん。まだ教室にいたんですね。よかったです。」

「はい？」

「何でしょうか？」

私が振り向き、一夏が顔を上げると、そこには山田先生が書類を片手に立っていました。

「えつとですね、お二人の寮の部屋が決まりました。」

そういつて私と一夏に、部屋番号の書かれた紙と鍵を渡してくれました。

「ありがとうございます。」

「あれ、俺の部屋って、決まってるじゃないじゃなかったですか？ 前に聞いた話だと、一週間は自宅から通学してもらって話でしたけど。」

「そうなんですけど、有峰さんの部屋を用意するのに部屋割りの調整はすぐにする必要がありましたし、事情が事情なので一時的な措置として部屋割りを無理矢理変更したらしいです。……織斑君、そのあたりのことって政府から聞いてますか？」

うつ、私のせいですか。たしかに急にこの学園に入ることになりましたからね。

「すみません、ご迷惑をおかけして。」

「あつ、いえ、別に有峰さんを責めた訳じゃありませんよ。だ、だから謝らないでください。」

そう言つて貰えるとうれしいですが…、やはり、少々心苦しいですね。

「と、とにかく、そういうわけで政府特命もあつて、織斑君を寮に入れるのを最優先したみたいです。一ヶ月もすれば織斑君の方も個室の方が用意できますから、しばらくは相部屋で我慢してください。」

まあ、『世界で唯一ISを使える男』ですからね、監視と保護は必要でしょう。

「あれ、『織斑君も』ってことは優は個室なんですか？ 男の俺が相部屋で？ 何ですか？」

うーん、束さんのことは一夏も知っているはずですが、言ってもいいのでしょうか。

「え、あ、あの、それは、えっと、あ、有峰さんの保護者の強い要望というか――」

「束のせいだ。」

おや、織斑先生。私は良いですが、言ってもよかったのでしょうか？

「へ、千冬姉、なんでそこで束さんの名前がつ！」

また『千冬姉』と呼んで一夏が叩かれました。…あれってすごい痛そうなんですよね。あれだけは、絶対に食らいたくないですね。

「織斑先生だ。…有峰、こいつに説明してやれ。」

やっぱり、こつも堂々と出来るのはすごいですね。

「分かりました。一夏、私は束さんの弟子みたいなものなのです。それで、私が個室なのは束さんがIS学園を脅迫か何かしたからだと思います。」

「あの束さんの！？」

知っている人だとやっぱりそういう反応なんですね。その気持ちはよく分かります。知らない誰かと仲良くするなんて考えられませんものね。

「そういうわけだ。あと織斑、お前の荷物はすでに手配しておいた。まあ、生活必需品だけだな。着替えと、携帯電話の充電器があれば良いだろう。」

もう少し何かあっても良いんじゃないでしょうか。一夏も、『それは…』って顔をしていますよ？

「じゃあ、時間を見て部屋に行ってくださいね。夕食は六時から七時、寮の一年生用食堂で取ってください。ちなみに各部屋にはシャワーがありますけど、大浴場もあります。学年ごとに使える時間が違いますけど…えっと、その、織斑君は今のところ使えません。あ、有峰さんは大丈夫ですよ。」

大浴場ですか。ですが、シャワーの方が楽ですし、シャワーで済ませることの方が多そうですね。

「え、なんでですか？」

はあ、まったく一夏は…。

「一夏、あなた女子と風呂に一緒に入る気ですか？」

「あー……。」

それくらい分かりなさい。考える癖を付けたほうがいいんじゃないんですか？

「おつ、織斑君っ、女子とお風呂に入りたいんですか！？ だっ、ダメですよ！」

「い、いや、入りたくないです。」

いや、その言い方は女子に興味が無いと勘違いされますよ。

「ええっ？ 女の子に興味がないんですか！？ そ、それはそれで問題のような……。」

ほら、やっぱり勘違いされました。それにしても山田先生、声が大きいですよ。そんな大きな声を出すと、周りも勘違いしますよ。

「織斑君、男にしか興味ないのかしら……？」

「それはそれで……いいわね。」

「中学時代の交友関係を洗って！ すぐにね！ 明後日までには裏付けとつて！」

…いったい何が『いい』んですか？ それに、中学時代の交友関係が一体何の関係があるんですか？

「えっと、それじゃあ私達は会議があるので、これで。二人とも、ちゃんと寮に帰るんですよ。道草くっちゃ駄目ですよ。」

わずか五十メートルのうちに道草をくうのは難しいと思いますが。

「ふー……。じゃあ、優。寮に行こうぜ。ここにいても仕方が無い。」

「そうですね。では、行きましょう。」

「なあ、優。お前の部屋って何号室なんだ？」

と、寮へ行く間に、一夏が聞いてきました。そういえば、部屋番号を確認していませんでしたね。

「えっと、1024号室ですね。一夏は、何号室なんですか？」

「俺は…、1025号室だ。へえ、隣だな。」

「そうですね。っと、ここですか。それでは、また明日。ISの勉強は明日からにしましょう。」

今日は色々あって大変でしたし、ゆっくり休むべきでしょう。

「ああ、分かった。また明日な。」

そう言つて私は1024号室に、一夏は1025号室へと入っていききました。

本来、二人部屋のところを一人で使うので、やっぱり広いですね。さて、特にしなければならぬこともありませんし、『星の欠片』の改良をしましょう。

ズドンッ！

？ 何でしょう？ お隣ですね。一夏が同室の人ともめているんでしょうか。近所迷惑にならないようにしてもらいたいですね。

まあいいです。とりあえず、『星の欠片』の改良を始めましょうか。

（＜優亜＞、ソフトの起動をしておいてください。）

『はい、マスター。』

さて、とりあえず命令系統を一新してしまいませんか。

あの後、夜中まで作業をし、一区切りついた所で私は寝ました。そして次の朝、なのですが……。

「なあ……。」「

「……………」。

「なあつて、いつまで怒っているんだよ。」

「……怒ってなどいない。」

「顔が不機嫌そうじゃん。」

「生まれつきだ。」

なんでこんなことになっているんでしょう？

『マスター、おそらくこの二人は昨夜、痴話喧嘩でもしたのではないかと思います。』

（痴話喧嘩……ですか。なるほど、よく分かりませんが間違つてなさそうですね。）

恋愛のことはよく分かりませんが、箒（先ほど自己紹介をしたとき、箒でいいと言われました。）が一夏のことが好きだということくらいは分かります。なのできっとそれで正しいでしょう。

「痴話喧嘩をするのは結構ですが……、私もいるのであまりその空気を持ち込まないでもらえるとありがたいのですが。」

この微妙な空気はつらいのです。第三者だけになおさら。

「ななななな、な、何を言っているんだお前は！わわわ、私たちは別に、ち、痴話喧嘩なぞ……。」

「そつだぞ優、痴話喧嘩って恋人同士とかがするものだろ？ 何で俺と箒でそんなことになるんだよ。ただの幼馴染だぞ。」

そんなことを一夏が言った瞬間、箒がものすごい勢いで一夏を睨みつけました。…今のはひどいと思いますよ。と、そんなふうに一夏に呆れていると、

「お、織斑くん！ 隣いいかなっ？」

「へ？」

見ると朝食のトレイを持った三人の女子が、一夏の反応を待ちわびるかのように立っていました。別にどこに座ってもいいのですが、やはりいいかどうか聞くのは礼儀ですよ。こういうことをちゃんとするのはいいことです。ちなみに、私は一夏の向かいに座っています。…後ろでざわめいていますが無視しましょう。

「うわ、織斑くんって朝すっごい食べるんだー。」

「お、男の子だねっ。」

そうでしょうか？ 私としては飲み物一杯、パン一枚、おかず一皿ですむ方が不思議なのですが。

「そうか？ 確かに俺は朝多めに取るけど、優は俺より食べてたぞ？」

思ったより一食が少なくて物足りなかったんですね。

「え、でも普通だよ？ 特に多くは見えないけど。」

「ご飯や味噌汁を三杯おかわりしただけですからね。そんなに多く

はありませよ。」

どちらもあと三杯は余裕です。ですが、そんなに食べても意味がありませんからね。ちなみに、朝はパンよりご飯が好きです。やる気の出方が違います。

「そ、そんなに食べててそのスタイルのよさ……。」

「羨ましい……。」

「ふ、太らないの？」

何か言っています、気にしても仕方がない気がします。無視して食べてしましましょう。

「……一夏、私は先に行くぞ。」

「ん？ ああ。また後でな。」

おや、筈が先に行ってしまったね。私も食べ終わりましたし、行きましょうか。

「ご馳走様でした。では一夏、私もこれで。」

待ったほうが良いかもしれませんが、教室には余裕を持って着きたいですからね。

「ああ、また後で。」

挨拶を交わして、私は織斑先生のよく通る声を聞きながら、食堂を

出て行きました。：さすがに五十キロは時間的に走りたくないですね。

ただいまは休み時間です。前の休み時間の時、一夏に専用機が届くと言われたり（確か”白式”と言う名前でしたね）、篤が束さんの妹であることが発覚したり（篤は束さんが嫌いなんでしょうか？）と、色々ありました。で、今、早速オルコットさんに絡まれます。

「安心しましたわ。まさか訓練機で対戦しようとは思っていなかったでしょうけど。」

まあ、私なら訓練機でも彼女相手なら十分勝てると思いますけどね。

「まあ？ 一応勝負は見えてますけど？ さすがにフェアではありませんものね。」

専用機の方が訓練機よりは性能がいいですからね。

「？ なんでだ、優？」

「一夏、オルコットさんは代表候補生、つまり専用機を持っているってことです。」

「へー。」

一夏、人に質問しておいてその態度はどうかと思いますよ。

「その通りですわ！ さっきの授業でも言っていたでしょう。世界でISは467機。つまり、その中でも専用機を持つ者は全人類六十億超の中でもエリート中のエリートなのですわ。」

467個と言いますが、私のISのコアは含まれませんし、束さんが何個か作っていたので、結構曖昧な気がするんですね。

「ふーん。あ、そうだ。優は専用機を持っているのか？」

「ええ。ほら、これです。」

そういつて私は左手の中指にある指輪を見せます。私のISの待機状態は指輪なのです。黒い指輪で、全体に宝石が散りばめられたものです。

「へえー。綺麗だな。あれ、優ってどこかの企業が国家に属しているのか？ 専用機って国家が企業に属してないと与えられないんだろ？」

む、意外と鋭いですね。この鋭さを他の場面で役立てられればいいのに。

「いいえ、私はどこにも属していませんよ。」

どこかに属する気はありません。面倒ですし。第一、私はどの国で生まれたのかもよく分かっていませんから。

「じゃあ、何で専用機を持っているんだ？」

本当のことを言ってもいいですが、そうすると面倒なことになりそうですね。

「…入学祝として、東さんに頂いたんですよ。」

嘘です。この”星空の剣”の前の機体は、コアは東さんに頂きましたし、作るときに手伝ってもらいましたが、”星空の剣”は、＜優亜＞について多少相談した部分があるだけで、あとはコアを含めて全部自分で作りました。…本当のことを言うと、大騒ぎになりそうですね。

「東さんって、まさか篠ノ乃博士！？ あ、あなた！ 篠ノ乃博士とどつという関係なのです！？」

「知り合いだけです。ですから、今の居場所を聞かれても分かりませんよ。」

本当は知り合いよりもっと上ですが…。本当のことを言う必要はありませんからね。ちなみに、居場所を知らないのは本当です。いつも色々なところを転々としていますからね、あの人は。

「そ、そうですか……。ま、まあ。どちらにしてもこのクラスで代表にふさわしいのはわたくし、セシリア・オルコットであるということをお忘れなく。」

そういつてオルコットさんは立ち去っていきました。正直その辺りはどうでもいいんですけどね。

「ふう、なんだったんだ一体…。まあいいや。優、箒、飯食いに行

「うづぜ。」

「いいですよ。」

「……………」

「おや、箒はどうしたんでしょう。先ほどの一件がまだ尾を引いているんでしょうか？」

「箒、飯食いに行こうぜ。」

「……………私は、いい。」

素直に喜んで『行く』と言えがいいと思っただけですけど……………。

「まあそう言うな。ほら、立て立て。行くぞ。」

「お、おいつ。私は行かないと——う、腕を組むなっ！」

「一夏、相手が箒だからいいですが、そうじゃなきゃセクハラですよ？ あんまり不用意に女性に触れて、訴えられても知りませんからね？」

「なんだよ歩きたくないのか？ おんぶしてやるつか？」

「幼馴染だとは言え、さすがにそれは……………」

「なっ……………！」

「ほら、顔を真っ赤にしていますよ。」

「は、離せ！」

「学食に着いたらな。」

「い、今離せ！ ええいつ——」

とうとう我慢できなくなったのか、箒が一夏を投げ飛ばそうとします。あのままだと痛そうなので助けることにしましょう。箒が一夏を地面に叩きつける直前、手を払って一夏を空中に。落ちる前に一夏を手で支えます。

「大丈夫ですか、一夏？」

「へ？ ……お、おう。ありがとな。」

「いえ、一夏が無事ならそれでいいです。」

と言って、一夏にこれくらいは問題ないと笑いかけます。……？
何でしょう？ 一夏の顔が赤い気がします。…ああ、いきなり投げられてびっくりしたんですね。

「箒、照れ隠しはいいですが、やりすぎると嫌われますよ？」

「う……。」

やりすぎだと指摘すると、自分でも少し思っていたのか、怯んだ様な声を出しました。まあ、反省しているみたいですし、十分でしょう。

「では、食堂に行きましようか。」

そろそろお腹がすきました。

「そうだな、行くぞ筈。」

「お、おい、私は別に――」

「いいから黙ってついて来い。」

さすがにその言い方はどうかと思いますよ？　まあ、それくらい強引なほうがいいのかもしれないが。

「む……。」

おとなしくなりましたね。頑固なくせに強引なのに弱いんですか。心に余裕が無いからでしょうか。余裕を持つということは大事ですよ？

第四話（後書き）

感想・意見・誤字脱字等がありましたらよろしく願います。

皆様が少しでも楽しめるように、がんばっていききたいと思います。

第五話（前書き）

お待たせしました。

戦闘シーンって本当に難しいんですね…。

第五話

放課後、現在私は剣道場にいます。あの後、食堂で話していたらなぜか、一夏と箒が剣道をやることになっていました。まあ、確か”白式”は近接ブレード一本でしたし、これで良いかもしれませんね。

「どうしてここまで弱くなっている!？」

どうやら決着が着いたみたいです。箒は全国大会で優勝したほどの猛者らしく、思いつきで一夏を叩きのめしていました。一夏も、動きを見るに、出来ないわけではないみたいでしたが、やられてしまいました。

「——なおす。」

「はい？」

「鍛え直す！ IS以前の問題だ！これから毎日、放課後三時間、私が稽古を付けてやる！」

どうしたんでしょう箒は？ 何で怒っているんですか？

「え、それはちょっと長いような——ていうかISのことをだな」

「だからそれ以前の問題だ」ちよつと待ってください。「……なんだ。」

あ、一夏が『助かった』って顔していますね。それと、箒は睨まな

いでください。普通の人なら怖がりますよ？

「とりあえずですね、最低限の知識を教える必要があるので、やり過ぎないようにしてください。」

一夏の顔が『えっ！？』ってなっていますね。…面白いです。

「それと、早朝に一時間、私が鍛えますので次の日にあまり残さないようにお願いします。」

「分かったが……、一体何をするんだ？」

「ルール無用で剣の打ち合いを。」

ISには剣道のルールは関係ありませんからね。一週間で出来ることは限られていますか、”危険”を感じ取れるようにはしたいですね。

「成る程、ISにはルールが無いから戦いに慣れると、そういうわけだな。」

「ええ、そうです。」

剣道の形とかが崩れるかもしれないので嫌がられるかと思いましたか…、そんなことはありませんでしたね。

「ちょ、ちよつと待ってくれよ！普通に鍛えるだけで、訓練機を動かしたりしないでいいのか！？というかちよつとは俺の意思を聞いてくれよ！」

「訓練機は必要ありません。動かす方は乗れば分かります。それにISに対してのイメージを固まらせたくありません。ISはイメージが重要ですからね。あと銃の扱い方を教えてもいいですが、一週間じゃたいしたことは出来ません。それなら昔やっていた剣道を鍛えなおしたほうが効果があります。」

「そういうことだ。一夏、お前は死に物狂いでやればいい。……と
ころで優。」

「はい？」

このタイミングで、一体なんでしょうか？

「さっき剣で打ち合うと言ったな。なら剣道が出来るのか？」

ああ、成る程。そういうことですか。

「いいえ、剣道はやったことがありませんね。ですが、剣を扱うことは出来ます。私のISにもありますしね。」

「そうか……。優は強そうだから試合してみたかったが、剣道をしたことが無いなら仕方が無い。」

「ええ。残念ですが、やめておいたほうがいいかと。多分ルール違反をしますから。」

咄嗟に急所を狙いかねません。防具も付ける気になりませんしね。

「……………俺の意見は無視か。」

一夏がなにやら落ち込んでいますが無視します。試合に勝ちたいのなら諦めて下さい。

次の日、今日は私の試合の日です。

「が、がんばれよ、優。優なら勝てるさ。」

「あ、ああ、そうだな。きっと勝てるさ。」

ピットには一夏と箒の二人がいます。ちなみに、私は既に私のIS”星空の剣”を展開しています。

「応援してくれるのはうれしいですが……、なぜこちらを見ないんですか？」

そうなんです。二人とも、なぜか私を最初に見てから顔を真っ赤にして、こちらを一切見ないんです。何かしたわけでもないはずですし、どうしてでしょう？

「いや、その……、なんというか。」

「お前の……、格好が、な。」

？ 格好、ですか？

「ISスーツのことですか？ 確かにこれは特別製ですが……。変

ですか？ 似合っていないませんか？」

私のISスーツは、耐久性は市販と大して変わりませんが、反応性などは格段に上です。その上、特殊素材や編み方、形状等を考慮したことで、ちよつとしたパワードスーツになっています。慣性等は考慮されていないため、限度はありますが、限定条件下ではISと戦える身体能力を発揮できます。そこまでやると体が大変なことになるのでやりませんが。

「いや、変と言うか……。」

「似合つてはいるんだが……。」

？ 何が言いたいのでしょうか？ 私には分かりませんね。と、私が首をひねっていると、箒が意を決したように言いました。

「お、お前の格好はだな、その、は、破廉恥過ぎるのだ！」

……特にそういうつもりはないのですが。ちなみに、私のISスーツの見た目は、一言で言うとな身に茨が絡みついたような感じです。指の先まで絡みついています。ですので、ISの展開時に同時に展開する事になっています。この形は、必要な部分を削っていったらこうなりました。勿論、大事な部分はしっかり隠れています。それに、全体的に見れば、露出度は普通の物より低いはずですが。

「箒の言う通りだ。ゆ、優の、えっと、その姿はちよつと刺激が強すぎる。」

……一夏にまで言われてしまいました。少しショックです。

「一応、これには意味があるのですけれどね。」

この絡み合った形のおかげで、強い力が出す事が出来るようになってるんです。

「まあ、とりあえず勝ってきます。」

「お、おう!」

「あ、ああ、勝ってこい!」

微妙な空気を振り払うように、私はアリーナへ向かいました。

「ようやく来ましたわね…って、あ、あなた! な、なんて格好をしているのですか!」

お、オルコットさんにまで言われてしまいました。なんだか泣きたい気分です。そんなに破廉恥な格好なのでしょうか? 水着より肌が隠れているのに。普通のISスーツだって十分恥ずかしい格好でしょうに。

「私がどんな格好をしようとも、私の自由だと思いますが。」

相手に弱みを見せてしまうのは下策です。ですので、強気で行きます。

「では、そろそろ始めましょう。」

「そうですね。」

『マスター、敵IS”ブルー・ティアーズ”にロックされました。』

（今回は『星影』と『星空の剣』だけを使います。他は展開できないようにしておいてください。それと、今回の試合を録画しておいて下さい。）

この戦いは一夏がオルコットさんと戦うときの参考になるようにするつもりです。一夏のものになるはずの”白式”は近接ブレード一本ですから、それに合わせれば参考になるでしょう。

『分かりました。』

「さあ、踊りなさい。わたくし、セシリア・オルコットとブルー・ティアーズの奏でる円舞曲^{ワルツ}で！」

試合開始を告げるブザーが鳴ると同時に、オルコットさんはそう言つて『スターライトmk?』を撃つてきました。

「踊りは好きではありませんので、あなたが一人で踊っていてください。」

憎まれ口を叩きながら、『星影』と『星空の剣』を同時に展開します。

「ふん。このわたくしに、そんな小さな射撃武器と近距離格闘装備で挑もうなんて、片腹痛いですわ！」

「それはどうでしょうね。」

私がそう呟くと同時に、オルコットさんはビット——名前は機体と同じ『ブルー・ティアーズ』らしいです——を飛ばしてきました。四方に散ったビットは、私目掛けてビームを連発します。勿論、全部避けませんが。

「まあ、やりますか。」

とりあえず、射撃の癖と、距離のとり方から見させてもらいますか。

ここは、アリーナにあるピット。二人の試合を見ていた山田先生が優の機動を見て驚く。

「有峰さん、代表候補生であるオルコットさんの攻撃を上手く避けますね。試合は押されているみたいですけど、すごいですねえ。」

「いや、違う。」

それを聞いた千冬は思わず呟いた。

「え？ どういうことですか？」

「有峰が攻めていないだけだ。あいつはわざとオルコットに攻撃させて、パターンを見抜こうとしているだけだ。」

「え！　じゃあ、有峰さんは本気でやっていないと言ったことですか！？」

そのことに驚く山田先生。代表候補生を相手にしても本気にならない、どころか観察する余裕があるということは、とてつもない力量だと言ったことだ。

「ああ、そういうことになるな。」

「……有峰さんって、本当に何者なんでしょう？」

束に自分に負けないほどの『天才』と言わしめ、操縦の腕も代表候補生を軽くあしらう腕前。山田先生の疑問はもつともである。

「…さてな。」

だが、千冬もその質問に対する答えは持っていなかった。

「くっ、ちょこまかと！　いい加減当たりなさい！」

「馬鹿言わないで下さい。」

試合開始から約三十分（＜優亜＞に聞いたら二十八分四十二秒だそうです。）と、とりあえず色々な行動をして、どういう反応をするか、情報を引き出していました。こちらからはほとんど攻撃しませんで

したし、全部避けましたので、ビームを連発する向こうの方がエネルギー消費は激しいと思います。シールドエネルギー以外は無限にしていますし。一応、手を抜いていると思われるように『星影』を撃って、掠る程度に当ててみましたが、そろそろ限界だと思います。

（＜優亜＞、そろそろ決めます。データは十分集まっていますね？）

『はい、マスター。大丈夫です。』

その言葉を聞き、私はビームをかわしながら近づいていきます。オルコットさんが『スターライトmk?』を撃ってきますが、狙いが分かりやすいので、少し身を屈める様な動きで避け、直進します。

「『ブルー・ティアーズ』っ！」

今までと距離の詰める意味が違うことに気づいたのか、ビットの攻撃が今までより激しくなります。……本気で勝負を決めるなら最大威力で肩の『星崩し』を打ち込めば、今のオルコットさんはビットの操作に集中して動きを止めているので、簡単に倒せます。ですが、現在は使用を制限していますので使えません。それに、威力が高すぎて絶対防御があってもオルコットさんを殺してしまう可能性があります。なので、あえて死角を作り、ビットを誘導して射線を予測し、回避します。射撃と射撃の間の一瞬の空白に、『星影』で動きを制限し、一気に距離を詰めます。

「まだですわ！ 『ブルー・ティアーズ』は六機ありましてよ！」

私の剣が届く範囲まで接近すると、オルコットさんはそう叫んで、腰にあるスカート状のアーマーから、『弾道型^{ミサイル}』の『ブルー・ティ

アース』を撃ってきました。しかし…、

「並みの相手なら通ったかもしれませんが……………」

「な！」

まだまだ甘いです。弾が発射された瞬間、右の弾を『星空の剣』で斬り裂き、左の弾を『星影』で打ち抜きました。…………これが織斑先生だったら剣一本でどちらも切り裂くんでしょうね。そこまではまだ無理だと思います。

至近距離で弾が爆発したので体制を崩すオルコットさん。その隙を逃さず、『星空の剣』にエネルギーを纏わせ威力を上げ、オルコットさんを斬ります。

「きゃああ！ つく！『インターセプター』！」

流石に一撃では落とせないので、斬りつけた後にオルコットさんに近接用武器の展開を許してしまいました。…………まあ、近接武装があるなら展開してもらえれば、その分、データが集まるので、ちょうどよかったのですが。

「初心者用の方法で展開ですか…………。苦手な近接装備で勝てると思わないで下さい。」

どうやらオルコットさんは格闘戦は苦手みたいです。武器を展開したはいいいですが、私の攻撃をほとんど防げていません。私はISの特性を生かし、縦横無尽に移動しつつ、連続で斬りかかり、”ブルー・ティアーズ”のシールドエネルギーを大きく削ります。避けようとする動きを、『星影』で牽制し、『星空の剣』の間合いから逃しません。

「この私が！ 負けるわけにはつ、いきませんわ！」

一瞬距離を開けた隙に、私の後ろに散っていた『ブルー・ティアーズ』を撃つてきました。…この射線だと自分にも当たりかねませんよ？ それなのによく撃ちますね。まあ、当たってあげるわけにもいきませんから、斜め上に飛び、オルコットさんの真上を取るコースで避けます。そして真上から、『星空の剣』を振り下ろします。

「これで終わりです。」

今の一撃でオルコットさんのシールドエネルギーが無くなり、試合終了のブザーが鳴りました。

『試合終了。勝者——有峰 優。』

「そんな……、この、わたくしが……。」

ふう、目標通り、無傷での勝利が出来ましたね。……ですが、予想していたよりずっと大変でしたね。実力を見誤っていたのでしょうか？ 結構正確な射撃でしたね。BT兵器もかなり使いこなしていましたし。この分だと、一夏はずいぶん苦戦するでしょう。できるだけ対策を練らなければいけませんね。そんな事を考えながら、私は無言でオルコットさんに一礼し、ピットへと向かいます。さて、今の試合が一夏の参考になるといいですが。もし参考に出てなかったら頭と体の両方に教え込みましょう。

第五話（後書き）

感想・意見・誤字脱字等がありましたらよろしくお願いします。

戦闘シーンにあまり中身が無いのは気にしないでください。

第六話（前書き）

お待たせしました。

第六話

あの後、ピットに戻った私を一夏と篤が迎えてくれました。二人とも褒めてくれたのは嬉しかったのですが、興奮しすぎでしたね。その後、セシリア（試合終了後にお互いに謝罪し、そのときそう呼んで欲しいと言われたので、セシリアと呼んでいます。）の戦闘データを確認し、対策を一夏に教えました。試合の日まで、データを確認し、最低限のISの知識を教え、篤と一夏を鍛えました。出来ることは全部やれたと思います。そして試合当日。

「……………来ねえ。」

「……………来ないな。」

「……………来ませんね。」

『確かに、予定より大幅に遅れています。』

そうなんです。まだ一夏のISが来ていないんです。……束さんは一体何をしているんでしょう？

「お、織斑くん織斑くん織斑くんっ！」

そんなことを考えていると、山田先生が走ってきました。どうでもいいですけど、焦り過ぎて転んだりしないか心配になります。

「山田先生、落ち着いてください。はい、深呼吸。」

「は、はいっ。す〜は〜、す〜は〜。」

「はい、そこで止めて。」

「うっ。」

「……………」

「……ぶはあっ！ ま、まだですかあ？」

……何をしているんでしょう、一夏は。山田先生も山田先生です。何故そんなに素直に言うことを聞くんですか。

「目上の人間には敬意を払え、馬鹿者。」

パアアンツ！ 弾けるような打撃音がピット内に炸裂します。これは一夏の自業自得ですね。

「あ、あのですねっ！ 来ました！ 織斑くんの専用IS！」

ようやく来ましたか。

「織斑、すぐに準備をしろ。アリーナの使用できる時間は限られているからな。ぶつつけ本番でものにしろ。」

「この程度の障害、男子たるもの軽く乗り越えて見せろ。一夏。」

じゃあ私も少し言わせてもらいましょう。

「一夏。せっかくあそこまで鍛えたのですから、みっともない姿だけは見せないで下さいね。」

でないと教えた意味がありませんからね。

「え？ え？ なん——」

ええい、じれったいですね。何を呆けているんですか。

「「「早く！」「」「」

おや、皆さんと言葉がかぶりましたね。皆、同じ気持ちだったということでしょう。

「これが……」

「はい、織斑くんの専用IS”白式”です！」

——そこには、『白』がいました。

白。真っ白。飾り気の無い、無の色。眩しいほどの純白を纏ったISが、その装甲を開放して操縦者を待っていました。……一切の穢れを嫌う『白』ですか。私の”星空の剣”の全てを孕んだ『黒』とは真逆ですね。

「体を動かせ。すぐに装着しろ。時間がないからフォーマットとフイッティングは実戦でやれ。できなければ負けるだけだ。わかったな。」

初心者にはそれはひどいですよね。まあ今何を言っても、結局意味は無いのですが。

「あれ……？」

「何か問題でも？」

一夏の呟きに反応して問いかけます。束さんが手を出しているんですから、問題なんてそんなことあるはず無いですが…。

「いや、そういう訳じゃない。………馴染む。理解できる。これが何なのか。何のためにあるのか。——わかる。それだけだ。」

「そうか…。とりあえず乗れ。背中を預けるように、ああそつだ。座る感じでいい。後はシステムが最適化をする。」

織斑先生の言うとおりに一夏がISに乗り込みます。一夏の体に合わせて装甲が閉じます。そして一夏が”白式”と『繋がります』。

「ISのハイパーセンサーは問題なく動いているな。一夏、気分は悪くないか？」

急に視界等がクリアになるので、変化についていけず、気分が悪くなる人もたまにいますからね。それでも、少々心配し過ぎのように感じますが。

「大丈夫、千冬姉。いける。」

「そうか。」

心なしかほつとしたような声色に聞こえました。やはり弟が心配なのでしょう。やはり束さんの言う通りブ……やめましょう。あの出席簿の餌食にはなりたくありません。

「ちっ。」

「……もし最後まで考えていたら、今舌打ちした織斑先生の出席簿を食らっていたみたいですね……。危なかったです。」

「箒、優。」

「な、なんだ？」

「何でしょうか、一夏。」

「行ってくる。」

「へえ、いい顔をしますね。これなら期待できるでしょうか。あ、箒の顔が赤くなりました。」

「あ……ああ。勝ってこい。」

「頑張ってください、一夏。」

「私たちの言葉に一夏は頷きを返し、ピット・ゲートへと行きました。厳しい戦いになるでしょうが、一夏の勝利を祈りましょう。」

「よくもまあ、持ち上げてくれたものだ。それでこの結果か、大馬鹿者。」

試合終了後、一夏は『馬鹿者』から『大馬鹿者』へとランクアップしました。え、何で時間が飛んでいるんだ、ですか？ そんなの作者の力量不足に決まっていますよ。試合の方は、序盤、セシリアが『スターライトmk?』とビットを上手く使って一夏をまったく近づけさせませんでした。一夏は避け続けていましたが、ビットの攻撃に苦戦していましたね。十分くらいした時、一夏がビットを一機落としましたが、そのときにもじわじわと削られていました。試合開始から三十分たった頃、一夏がさらに一機落とし、一気に近づきますが、『弾道型』の『ブルー・ティアーズ』で迎撃されます。しかしちようどその時に一夏の『白式』が一次移行します。『白式』ワンオフ・アビリティの単一仕様能力『零落白夜』れいちらくびやくやでセシリアに一撃入れました。それにより、『ブルー・ティアーズ』のシールドエネルギーの大半を削りますが、もう一撃、と言うところでエネルギーが切れ、セシリアが勝利しました。

「武装の特性を良く考えずに使うからああなるのだ。身をもってわかっただろう。明日からは訓練に励め。暇があればISを起動しろ。いいな。」

「……はい」

頷くしかないでしょう。途中で「千冬姉の名前を守るさ！」だとか「勝たなきゃ教えてくれた優と箒に格好がつかねえ！」だとか叫んでおきながらこの結果ですからね。聞いてたこちらの方が恥ずしかったですよ。

「えっと、ISは今待機状態になってますが、織斑くんが呼び出せばすぐに展開できます。ただし、規則があるのでちゃんと読んでおいてくださいね。はい、これ。」

そう言つて山田先生は分厚い、辞書みたいな本を一夏に押し付けます。そういえば私、ISに関する規則なんて気にした事ありませんね。

「一夏、帰るぞ。」

「そうですね。今日はもう終わりですし、帰って休みましょう。少し遅くなりましたが一夏、お疲れ様でした。」

まあ、善戦していましたし、ここは労うべきでしょう。

「……！」

そうしたら何故が一夏がものすごい喜びました。……当たり前のことしかしてないのに何故ですか？ それに、休むと言いましたが反省会をしてからですからね？

「では、一年一組代表は織斑一夏くんに決定です。あ、一繋がりでもいい感じですね！」

「先生、質問です。」

「はい、織斑くん。」

「俺は昨日の試合に負けたんですが、なんでクラス代表になつてるんでしょうか？ それにセシリアも優に負けていましたよね？ なぜ、俺なんですか？」

「一夏、元々私はクラス代表に推薦されてはいませんよ。」

決闘はしましたが、クラス代表を決めるのには、関係ありませんでしたから。あの時余計なことを言わなかったのは、『推薦されていない』と言い訳できるようにするためですからね。私はクラス代表なんてしませんよ。

「それなら、セシリアがクラス代表なんじゃないのか？」

「ああ、それはですね——」

「わたくしが辞退したからですわ！」

私の言葉を引き継いで、セシリアが立ち上がりながら説明します。どうでも良いですが、ポーズをとる必要があるのでしょうか？

「まあ、勝負はあなたの負けでしたが、しかしそれは考えてみれば当然の事。なにせわたくしセシリア・オルコットが相手だったのですから。それは仕方のないことですわ。」

まあ、相手は代表候補生相手でしたからね。対策を立てたとはいえ、あそこまで戦えただけすごいと思いますよ。

「それで、まあ、わたくしも大人げなく怒ったことを反省しまして、」

しまして？

「一夏さん」にクラス代表を譲ることにしましたわ。やはりIS操縦には実践が何よりの糧。クラス代表ともなれば戦いには事欠きませんもの。」

確かに。クラス代表にならなくても訓練をさせるつもりでしたが機会は多いほうがいいですね。……それにしても“一夏さん”、ですか。どういう心境の変化なのでしょう？ そんなことを考えているうちに言い争いを始めていた筈とセシリアを織斑先生が叩いて止めていました。

「クラス代表は織斑一夏。依存はないな。」

その一言にクラスの大半がはいいと元気良く返事しました。元気があるのはいいことです。

「ではこれよりISの基本的な飛行操縦を実践してもらう。織斑、オルコット、有峰。試しに飛んでみせる。」

四月の下旬。今日は実習の日です。専用機を持っているからか、見本をやらされることになりました。こういうのは好きではないのですけど。

（来なさい、”星空の剣”）

光が私を包み、次の瞬間には”星空の剣”を纏った状態になります。少し遅れてセシリアが、さらに遅れて一夏がISを展開します。

「よし、飛べ。」

指示を受けたので飛び立ちます。順番は私、セシリア、一夏です。

「何をやっている。スペック上の出力では”白式”は”ブルー・テイアーズ”よりも上だぞ。」

”白式”は高機動タイプですからね。中距離射撃型の”ブルー・テイアーズ”より速度は上のはずです。それでも私の”星空の剣”より遅いですが。

「一夏さん、イメージは所詮イメージ、自分がやりやすい方法を模索する方が建設的ですよ。」

一夏が飛ぶ感覚がつかめないとこのぼやきを聞き、セシリアがアドバースをします。

「そうですね。まあ、慣れるまで飛び続けるのが一番早い気もしますが。」

教科書のイメージは正直、あまり役に立たないと思いましたね。

「そう言われてもなあ。大体、空を飛ぶ感覚自体があやふやなんだよ。何で浮いてるんだ、これ。」

確かに、慣れてないとそう思うかもしれませんね。

「説明しても構いませんが、長いですわよ？ 反重力力翼と流動波干渉の話になりますもの。」

「わかった。説明はしてくれなくていい。」

一夏、そんな『説明されても絶対わからん』って顔はやめなさい。

「一夏、ちょうどいいですから今日の勉強はその話にしましょう。」

疑問を持ったときに解決するほうがいいですからね。

「げっ、マジで……。」

「マジです。」

マジと言っ言葉はあまり使いませんが、ここは一夏に合わせて言うてみます。

「そっだ一夏さん、よろしければ今日の放課後に指導してさしあげますわ。そのときは二人きりで——」

「一夏っ！ いつまでそんな所にいる！ 早く降りてこい！」

おや、箒が怒鳴っています。そういえばセシリアと箒って、仲が悪い訳ではないですが、良く喧嘩しますね。何故あんなに喧嘩するのでしょうか？

「織斑、オルコット、有峰。急降下と完全停止をやって見せる。目標は地表から十センチだ。」

「了解です。ではお二人とも、お先に。」

そう言ってセシリアは急降下をしていきました。……下の様子を見るに、どうやら上手くいったみたいです。

「では、次は私が。」

「おう。」

一夏に断りを入れ、先に行きます。ミリ以下の細かい誤差は＜優亜＞に調整してもらってきつちり十センチに止まります。最後に一夏です。急降下してきますが……あれでは地面にぶつかりますね。そう思ったので私は、地面に衝突する直前に一夏を掴んで止めます。

「大丈夫ですか、一夏。」

「お、おう。悪い。助かった。」

イメージの仕方が悪いとこうなるんですね。

「馬鹿者。有峰が助けていなかったら地面に激突していたぞ。……まあいい、次は武装の展開をしる。まずは織斑からだ。」

そう言われて一夏が『雪片弐型』を展開します。ですが……。

「遅い。○・五秒で出せるようになれ。」

そうですね。最低それくらいはないと駄目ですね。

「オルコット、次はお前が展開しろ。」

「はい。」

セシリアが答えて武装を展開します。流石に一夏よりだいぶ早いです。一秒とかからずに展開し、射撃準備も整えます。

「さすがだな、代表候補生。——ただし、そのポーズはやめろ。有峰を撃つ気か？ 正面に展開できるようにしろ。」

そうですね、撃たないと分かっているとしても銃口を向けられるのは、いい気分ではありませんね。織斑先生の言葉にセシリアが反論します。が封殺されます。

「有峰、今度はお前だ。」

「分かりました。」

最後に私がやることになりました。とりあえず以前使った、『星影』と『星空の剣』を同時に展開します。

「いいだろう。だがそれは二つ同時でなければ展開できないのか？」

「いいえ。ただ、大抵の場合、二つ同時に使うので。」

『星影』で牽制して『星空の剣』で攻撃、という形です。他の武装を使うときはまた違います。

「ならいい。…オルコット、今度は近接用の武装を展開して見せろ。」

「は、はい。」

その後はセシリアがなかなか展開できず、織斑先生に怒られました。そういえば、怒られた後個人間秘密プライベート・チャネル通信で一夏とセシリアが何か話していたみたいです。がなんだったのでしょうか？

第六話（後書き）

感想・意見・誤字脱字等がありましたらよろしく願います。

第七話（前書き）

お待たせしました。

更新遅くてすみません……。せめて週に一回は更新したいと思っています。

第七話

「と、いうわけです！ 織斑くんクラス代表おめでとう！」

「おめでとう！」

祝いの声と共にクラッカーが鳴らされます。

「……………」

一夏が『めでたくない』って顔をしていますね。まあ、代表なんて面倒なだけですからね。

「いやー、これでクラス対抗戦も盛り上がるねえ。」

「ほんとほんと。」

「ラッキーだったよねー。同じクラスになれて。」

「ほんとほんと。」

なぜ他のクラスの子が一組の『織斑一夏クラス代表就任パーティー』に参加しているのでしょうか。一夏に興味があるからでしょうかね？

「人気者だな、一夏。」

「…本当にそう思うか？」

「ふん。」

これは嫉妬ってやつでしょうか？　ですが、これくらいで嫉妬しても仕方がないと思いますが。珍獣扱いされている部分もありますしね。

「はいはい、新聞部です。話題の新生、織斑一夏君に特別インタビューをしました〜！」

新聞部の方の発言に皆が盛り上がります。気になることがあるなら、同じクラスなので、自分で聞けばいいのでは？

「あ、私は二年の黛薫子。よろしくね。新聞部副部長やってます。はいこれ名刺。」

そういつて一夏に名刺を渡します。同じ学生なのに名刺が必要なのでしょうか？

「ではぜひ織斑一夏君！　代表になった感想を、どうぞ！」

「えーと……。まあ、なんというか、がんばります。」

「えー。もつといいコメントちょうだいよ。俺に触るとヤケドするぜ、とか！」

そんな台詞を言われても反応に困りそうなものですが。

「自分、不器用ですから。」

「うわ、前時代的！」

前時代的ってそういうのがあったのでしょうか？……<優亜>、調べなくていいですからね。そんなに情報を出されても困りますから。

「じゃあまあ、適当にねつ造しておくからいいとして、次。有峰ちゃん、色々と聞かせてもらおうよ。」

「私、ですか？」

私の何を聞きたいんでしょう？ 何かインタビューされるようなことをしたでしょうか？

「そうだよ、どの企業にも国家にも属していない謎の専用気持ち！さらに、その実力は代表候補生を上回り！さらにさらに、篠ノ乃博士とも関係があるという噂のある人物だからねー、有峰ちゃん。は。」

そんなに噂になっていたんですか……。そういえば、すれ違う人が変な視線を向けてきたことが、あったような、なかったような気がしますね。どうでもいいので気にしていませんでしたが。

「あと、織斑君との噂もあるし、そこらへんどうなのかなー、と聞きたいわけですよ！」

なにやら変なテンションになっていますね。……箒にセシリア、睨まないでください。何も無いのは知っていますでしょう？

「とりあえず、一夏とはただの友達であることを断言しておきます。親友、とか言えると嬉しいですけど。」

友達以上の特別な気持ちがあるわけではありません。

「そうやって否定するのも怪しい気がするけど……、何もなさそうね。つまんない。まあいいや、じゃあ篠ノ乃博士と親しいって言うのは？」

「そこらへんはご想像にお任せすると言うことで。」

あまりむやみやたらと広めてもらっても、周りがうるさくなるだけですからね。

「ちえ、答える気はないと。仕方がないから捏造させてもらうよ。じゃあ、セシリアちゃんもコメント頂戴。」

頭の言い方でよかったですよ。何度も迫られてもうつとうしいだけですから。

「わたくし、こういったコメントはあまり好きではありませんが、仕方ないですわね。」

そう口で入っていても、いつもより髪の設定がきちんとしていますよ？

「コホン。ではまず、どうしてわたくしがクラス代表、副代表を辞退したかという点、それはつまり――」

これは長くなりそうですね……。

「ああ、長そうだからいいや。写真だけちょうだい。」

黛先輩、ありがとうございます。

「さ、最後まで聞きなさい！」

「いいよ、適当になつ造しておくから。よし、織斑君に惚れたから
つてことにしよう」

「なっ、な、ななっ……！？」

図星なので、セシリアの顔が真っ赤になっていますね。それにしても、何故そんなにすぐに顔を赤く出来るんでしょう。不思議です。
ああなりたいとは思いませんが。

「何を馬鹿なことを。」

「え、そうかなー？」

「そ、そうですね！ 何をもって馬鹿としているのかしら！？」

「もう少し考えてから発言すべきですよ、一夏。」

一夏が馬鹿なことを言うので三人で否定します。

「だ、大体あなたは――」

「はいはい、とりあえず三人で並んでね。写真撮るから」

「えっ？」

セシリアが一夏に詰め寄ろうとしたとき、黛先輩が写真を撮ると言

い出しました。…あれ？

「三人って私ですか？」

「そうだよ。注目の専用機持ちだからねー、はいはい並んで並んでー。」

……ここで逃げようとしても無駄なんだろうね。なので私はあきらめて一夏の隣に立ちます。反対にはセシリアです。要は一夏が真ん中と言っことですね。

「そっだ、握手とかしてもらっていいかなー。」

ふむ、握手ですか。それくらい別にかまいませんが。……あ、そうだ。

「抱きついたりするのは？」

「お、いいねー。やっちゃってやっちゃって。」

私の視線の意味に気づいたのか黛先輩が乗っかってくれます。案外、素で反応したただけかもしれないが。どちらにしても、ありがたいです。

「……！」

「……！」

「えっ！」

ふふふ、やはり箒とセシリアはいい反応をしてくれますね。一夏まで驚いてますけど。冗談だって気づかれていないみたいです。なので、一夏によく『無表情』だと言われる顔を、出来るだけ茶目っ気を持たせた笑顔にして、一夏に笑いかけます。

「え、えっ、マジ!？」

どうやら気づいてくれなかったみたいです。うーん、こういう表情を作るのは苦手です。束さんを見本にしてみたんですけどね。…あれ、束さんの笑顔って嘘か本当か分からないような笑顔でしたね。じゃあ駄目に決まっているじゃないですか。……それにしても何でそんなに驚いているんでしょう。こういうのはいやなのでしょうか？

「……冗談ですよ。そんなに嫌がらないでください。」

友達に嫌われるのはいやですからね。

「い、いや別に嫌って訳じゃ——」

「一夏(さん)——」

一夏に怒鳴らないでくださいよ、二人とも。からかった私が悪いんですから。

「……ラブコメってるとこ悪いけど、写真撮るよー。35×51÷24は?」

と、黛先輩が声を掛けるので、一夏とセシリアの手をとって握手させます。

「うわっ！？ え？ えつと……2？」

「74・375ですよ一夏。」

というか手をとったときに驚かないでください。そんなに嫌だったんですか？ さっきの提案は？

「せいけい。」

その言葉と共にシャッターが切られます。にしても…。

「あ、あなたたち！ な、何故入っているんですの！」

そうなのです。写真を撮る瞬間、（簾を含めて）クラス全員が私たちの周りに集まっていたのです。ものすごい行動力ですね。

「まーまーまー。」

「セシリアと優だけ抜け駆けはないでしょー。」

「クラスの思い出になっていいじゃん。」

「ねー」

「う、ぐ……。」

クラスのみんなにセシリアが丸め込まれました。一夏は『何で皆はセシリアを丸め込んだんだ？』って顔をしていますね。まあそれはともかく。この後、この『織斑一夏クラス代表就任パーティー』は十時過ぎまで続きました。皆元気なものですね。

「織斑くん、有峰さん。おはよー。ねえ、転校生の噂聞いた？」

朝、私たちが教室に着くと、こんなふうには話しかけられました。

「転校生？ この時期に？ 優は何か知っているか？」

「いいえ。知りませんでしたよ。」

こんな時期に来るのは確かに変ですね。それにしても一夏、私は何でも知っているわけではないですよ？ なぜ私に聞くんですか。

「なんでも中国の代表候補生なんだってさ。」

「ふーん。」

「成る程。」

入学より条件の難しい転入でこれたのは代表候補生だからですか。

「あら、わたくしの存在を今更ながらに危ぶんでの転入かしら？」

それだけで代表候補生を送り込んでくるとは思えませんが。もっと複雑な理由が絡んでいると思いますよ？

「このクラスに転入してくるわけではないのだろう？ 騒ぐほどの

「ことでもあるまい。」

「そういうので騒ぐのが女子高生なんでしょう。それに情報は大切ですよ？」

「どんなやつなんだろうな。」

「む、……気になるのか？」

「ん？、そりゃもちろん。」

「ふん。」

「まあ、代表候補生ですから、気になって当然でしょうか。」

「今のお前に女子を気にしてる余裕があるのか？来月にはクラス対抗戦があるというのに」

「別に変な意味で気にしているわけではないでしょうから、不機嫌にならなくてもいいと思いますが。」

「そう！　そうですわー夏さん。クラス対抗戦に向けてより実践的な訓練をしましょう。ああ、お相手はこのわたくし、セシリア・オルコットが務めさせていただきますわ。なにせ、専用機を持っているのは私と優さんと一夏さんだけなのですから。」

「独学の私より、射撃に関しての教師として適しているでしょう。回避のためにある程度学ばなくてはいいけませんしね。」

「そうだな。やれるだけやってみるか」

「やれるだけでは困りますわ！　一夏さんには勝っていただきませんと！」

「そうだぞ。男たるものそのような弱気でどうする。」

「安心してください。勝てるように訓練してあげますから。」

「えっ……。」

何ですかその反応。『終わった……』みたいな顔しないでください。そんなに訓練を厳しくしたつもりは無いのですが。ああ、あと訓練だけでなく”白式”も整備しましょうか。

「織斑くん、頑張つてね！」

「フリーパスのためにも！」

「今のところ専用機もってる代表って一組と四組だけだし余裕だよ。」

優勝すると学食デザート半年フリーパスが配られるらしいです。このデザートはなかなかおいしいのでぜひ勝ってもらいたいですね。

「——その情報、古いよ。」

はい？　教室の入り口から聞き覚えのない声がします。誰でしょう？

「二組も専用機持ちがクラス代表になったの。そう簡単には優勝できないから。」

彼女が噂の転校生でしょうか？　少なくとも顔立ちは中国系ですが。

「鈴……？　お前、鈴か？」

おや、一夏の知り合いなんでしょうか。

「そうよ。中国代表候補生、鳳鈴音。今日は宣戦布告に来たってわけ。」

そう言つてふつと小さく笑みを漏らす鳳さん。その動作に合わせてツインテールが軽く揺れます。

「何格好付けてるんだ？　すげえ似合わないぞ。」

い、一夏。そこでその発言ですか。ほら、鳳さんが体勢を崩していますよ。

「んなっ……！？　なんてこと言うのよ、アンタは！」

まったくですね。……おや？

「おい。」

「なによ！？」

バシンッ！一夏が忠告しようとする前に鳳さんの頭が叩かれます。ああ、痛そうです…。

「もうSHRの時間だ。教室に戻れ。」

「ち、千冬さん……。」

一夏の知り合いだからか、やはり織斑先生とも知り合いみたいです。ですが、少し怯えているみたいですね。何故でしょう？

「織斑先生と呼べ。さっさと戻れ、そして入り口を塞ぐな。邪魔だ。」

「す、すみません……。」

そう言つて、ドアから鳳さんが下がります。やっぱり怯えていますね。そこまで怯えなくてもいいと思いますけど。

「またあとで来るからね！ 逃げないでよ、一夏！」

「さっさと戻れ。」

「は、はいっ！」

鳳さんも、余計なことを言ったら睨まれるって分かっているでしょうに。慌てても良い事はありませんよ？

「っていつかアイツ、IS操縦者だったのか。初めて知った。」

おや、知らなかったんですか。まあ、久しぶりだった見たいですし、そんなものですか。後で話を聞かせてもらいましょう。

「……一夏、今のは誰だ？ 知り合いか？ えらく親しそうだったな？」

「い、一夏さん！？ あの子とはどういう関係で——」

篤、セシリア。もう織斑先生は来ているんですよ。早く席に戻らないと——

「席に着け、馬鹿ども」

バシンバシンバシンバシン！

席に戻らず、一夏に詰め寄ったクラスメイトたちは全員叩かれてしまいました。まったく、先ほど凰さんが叩かれたのを見なかったのでしょうか？ と、そんなことを考えていても時間はたち、今日もISの訓練と勉強が始まります。

第七話（後書き）

感想・意見・誤字脱字等がありましたらよろしく願います。

第八話（前書き）

お待たせしました。

第八話

「待ってたわよ、一夏！」

そう言っただけ私達を学食で出迎えたのは鳳さんでした。なんと言っただけ、元気な人ですね。私にはとても真似できそうにありません。

「まあ、とりあえずそこどいてくれ。食券出せないし、普通に通行の邪魔だぞ。」

「う、うるさいわね。わかってるわよ。」

そういう鳳さんの手にはラーメンがあります。ラーメンも美味しいそうですね。昼食は既に買ったので（因みにカツ丼と海藻サラダを二つずつです）、夕食をラーメンにしましょうか。上に乗せる野菜は大盛りがいいですね。

「それにしても久しぶりだな。ちょうど丸一年ぶりになるのか。元気にしてたか？」

「げ、元気にしてたわよ。アンタこそ、たまには怪我病氣しなさいよ。」

そう言う理由は分かりますけど、さすがにひどいと思いますよ。

「どっという希望だよ、そりゃ……。」

「まあまあ、一夏。それだけ連絡を取りたかったということですよ。仲がいいですね。」

それにしても、なんと言うか、筈たちと似ていますね。本心をうまく言えないところとかが。そんなに恥ずかしいものなのでしょうか？

「べ、別にそんなんじゃないわよ。というか、アンタ誰？ 一夏と親しいみたいけど。」

そういえば自己紹介をしていませんね。これはいけません。

「申し遅れました。私は有峰優です。呼び方は好きにどうぞ。よろしく願いしますね、鳳さん。」

そう言って、握手のために手を出します。

「そう。私は鳳鈴音。鈴でいいわよ。よろしく、優。」

私が出した手を握りながら、鈴がそう言います。

「分かりました、鈴。ああ、一夏とはただの友人ですので安心して下さい。」

私は一夏に恋愛感情を抱いていませんよ、と暗に言っと、鈴がなんとなくほっとしたような顔をしました。まあ、その前に『余計なことを言うな』と、睨まれましたが。

「安心？ 俺と友達だからって、何で鈴が安心するんだ？」

まったく、一夏は……。

「アンタが気にすることじゃないわよ、馬鹿。」

「そうですね。一夏が気にすることではありません。」

一夏は、何故ここで口を挟もうという気になるのでしょうか。

「一夏、そろそろどういう関係か説明して欲しいのだが。」

「そうですね！ 一夏さん、まさかこちらの方と付き合ってるしやるの!？」

そんな会話をしていると、会話の流れについていけなくなりかけていた冪とセシリアが話し始めました。

「べ、べべ、別に私は付き合ってるわけじゃ……。」

「そうだぞ。何でそんな話になるんだ。ただの幼なじみだよ。」

はあ、またですか……。一夏らしいと言えば一夏らしいですが。

「……………」

「？ 何睨んでるんだ？」

「なんでもないわよっ！」

「一夏、あなたは余計なことを言い過ぎです。」

だから睨まれたりするんだと理解すべきですね。

「へ？ 何でいきなりそんな事言うんだ？」

はあ、一夏はこれを本気で言えるから、質が悪いですね。

「幼なじみ……？」

おや？ 同じ一夏の幼なじみである箒が怪訝そうな顔をしていますね。知らなかったのでしょうか？

「あー、えつとだな。箒が引越していったのが小四の終わりだっただろ？ 鈴が転校してきたのは小五の頭だよ。で、中二の終わりに国に帰ったから、会つのは一年ちよつとぶりだな。」

成る程。それなら、面識がなくて当然ですね。そんな事を考えていると、一夏が、箒を鈴に紹介し始めました。

「で、こっちが箒。ほら、前に話したろ？ 小学校からの幼なじみで、俺の通っていた剣術道場の娘。」

「ふうん、そうなんだ。」

…鈴。そんなにじろじろと見るのは失礼ですよ？ まあ、短い時間しか話していませんが、鈴が礼儀を気にするのも違和感を感じますけど。

「初めまして。これからよろしくね。」

「ああ。こちらこそ。」

二人の間に火花が散ります。お互いにライバルだと認めたってことですかね。これからさらに騒がしくなりそうな予感がします。

「ンンンッ！ 私の存在を忘れてもらっては困りますわ。中国代表候補生、鳳鈴音さん？」

二人の間にセシリアが入ります。これは三つ巴の戦いに……

「…………誰？」

…………なりませんでした。少し、気が抜けますね。一組の誰かがいたらひっくり返っているかもしれないですね。あのクラスの人たちは、本当にノリが良いですから。

「なっ！？ わ、わたくしはイギリス代表候補生、セシリア・オルコットですよ！？ まさかごぞんじないの！？」

「うん。あたし他の国とか興味ないし。」

「な、な、なっ…………！？」

おやおや、いつかのときみたいにセシリアがゆでダコになってますね。ですが、今回のことはそんなに怒ることでしょうか？

「い、い、言っておきますけど、わたくしあなたのような方には負けませんわ！」

「そ。でも戦ったらあたしが勝つよ。悪いけど強いもん。」

へえ、これを素で言いますか。なかなか自信家みたいですね。嫌味とかではないのは好感が持てますね。

「……………」

「い、言ってくれますわね……………」

あらら、こっちの二人にはお気に召さなかったようです。しかし、鈴はそんなことを気にせずラーメンをすすります。なかなかおいしそうに食べます。ふむ、夕食では何味をいただきましたでしょうか？

「そういえば一夏、アンタ、クラス代表なんだって？」

「お、おう。成り行きでな。」

「ふーん……………」

どうしたのでしょうか？ 歯切れが悪いですね。

「あ、あのさあ。ISの操縦、見てあげてもいいけど？」

成る程。これを言い出すのを恥ずかしがっていたんですね。ですが、もっと押していかないと伝わらないと思いますよ？ 箒やセシリアの気持ち、恋愛ことはよく分からない私でも分かるのに、一夏にはまったく伝わらないくらいですからね。

「そりや助か———」

一夏がそう言いかけた時、箒とセシリアがテーブルを叩いて立ち上がりました。二人とも、もう少し落ち着いて行動してほしいものです。

「一夏に教えるのは私の役目だ！ 頼まれたのは私だ！」

「あなたは二組でしょう！？ 敵の施しは受けませんわ！」

ああもうこの二人は……。

「二人は少し落ち着きなさい。周囲の人に迷惑ですよ。…そうですね、鈴。クラス代表戦が近いのに二組のクラス代表が一組のクラス代表を鍛えるって言うのはあまりよくないと思いますよ？」

二人をなだめた後、鈴に向き直りながら応えます。クラスの人に反感を持たれるのは確実でしょうね。

「うつ…。あ、アンタたちには関係ないでしょ。」

「いえ、一応現在一夏のISを見ているのは私たちなので関係ないわけではありませんよ。……いえ、そんなことはどうでもいいんです。それよりも、一夏に教える気があるなら、クラス代表戦が終わるまでは待ってくれませんか？ それ以降だったら問題ないでしょうし。……そうだ。もし鈴がクラス代表戦で優勝したら一夏を好きにしてくれてかまわないですから、今回は我慢してくれませんか？」

これ以上揉められても面倒です。これなら鈴も納得するでしょう。

「「「優（さん）！！！」」」

……結局騒ぎになるのは変わりませんか。むしろ一夏が加わる分悪化しましたか？

「わかった。乗ったわ、それ。じゃあ一夏、放課後にまた会いましょう。」

そういつてラーメンを食べ終えた鈴は去っていきました。確認を取らなきゃ会いにくいと思いますが。まあ、それはいいとして、今度はこちらの相手ですか。

「優！ どういうつもりだ！」

「そうですね優さん！ 何を考えてあのようなことを……！」

「優！ 勝手に俺を景品にしないでくれ！ とうかせめて俺に確認を取ってくれ！」

一度に叫ばないでください。周りにも迷惑ですよ？

「三人とも……。一夏が好きにされたくないのなら一夏が勝てばいいでしょう。」

そう、呆れたように言います。本当は私が無茶苦茶なことを言っているので第達が正しいです。ですがまあ、無理に通してしまいうまい。その方が楽です。

「だ、だが……。」

「それはそうですね……。」

「俺の話は無視か……？」

一夏、少し女々しいですよ。もっとしっかりして下さい。

「一夏、じゃあ、あなたが優勝したら私を好きにしていいますから、

それで許してください。」

私も同じリスクを負えば、問題ないでしょう？

「え……、それって——」

「「優（さん）！！ 何を言っている（のですか）！！！」」

一体何なんですか？ 何をそんなに怒っているんですか？ 落ち着いてくださいよ。……一夏も、顔を赤くしていないで二人をなだめて下さいよ。今にも攻撃してきそうなんですよ？

「何と言われましても、一夏に負わせたリスクと同じものを、私も背負っただけですよ？」

「だ、だからといって……。は、破廉恥な……。」

「す、少しは自分を大事にして下さい！」

二人は何を言っているのでしょうか？ まったく意味が分かりません。

「俺ってそんなに信用ないのか……。」

一夏も一夏で、何故か落ち込んでいて、意味不明です。何で皆そんなに過剰に反応するのでしょうか？

「よく分かりませんが、一夏のことは信用していますよ？」

一夏のよく分からない発言に、首を傾げながら答えます。好きにしているとは言っても、私が本気で嫌がることはしないと思ったから

こそ、あんなこと言ったんです。信頼していなくては、あの発言はできません。

「そ、そうか。ありがと、優。」

「礼を言われるようなことをしたつもりはありませんが、どういたしまして。……それで、先ほどの条件でいいですか？」

「あ、ああ。……でも、いいのか？」

「元々私が悪いんですから、構いません。」

私が提案したんですから、問題ありませんよ。それにしても、元々私が悪いということを忘れていたみたいですね。ああ、とでも言いそうな顔をしていますよ。

「一夏、もし優勝したとして、優に変なことをしてみろ……。」

「ただじゃおきませんわよ……！」

それにしても、何故二人は怒っているのでしょうか？ 聞いても答えられないでしょうし、誰か教えてくれませんかね？

放課後、普段この時間は一夏を鍛えているのですが、箒が訓練機を借りたと言うので、任せることにしました。なので今日は機体の調節のために整備室に行くと、青い髪の少女を見つけました。彼女は

私が整備室に来るたびにいますが、話したことはありません。いつものように後ろを通りすぎようとした時、目の端に見えたディスプレイが気になりました。

「…エネルギーの供給速度を上げたいのなら、こことかここは必要不是吗。代わりにここからここにバイパスを繋げばいいはず。」

「……………誰？」

ああ、いきなり横から口出しされたらこういう反応するのも当然ですよ。

「失礼しました。私は有峰優です。あなたは？」

「……………更識簪。」

「よろしくお願ひしますね、更識さん。」

なんと言いましょうか、不思議なしゃべり方をしますね。まあ、私も一夏に言わせれば『ずっと敬語でなんか堅苦しいよな』だそうなので人のこと言えないかもしれませんが。

「……………名字で…呼ばないで。」

「…？ 分かりました。では簪と呼びますね。……………それにしても、この機体のデータを少し見た限り個人の特色と言いましょいか、個人で組み上げたというのが見てとれますね。もしかして、自力でここまで作ったのですか？」

「……そう……だけど……？」

「ふむ、まだまだ不完全で未完成ですが、並みの研究者よりずっといい仕事をしますね。特に武装に関する部分は素晴らしいと思いますよ。」

そういえば以前見たデュノア社の”ラファール・リヴァイヴ”と似ている部分が多いですね。参考にしたのでしょうか？

「それにしても、このレベルのものをを見ると、細かい部分が余計気になりますね……。そうだ、手伝わせていただけませんか？ 手伝うと言っても、細かい部分の調整だけのつもりですが。」

一人の研究者として、こういうのはかなり気になります。

「……いい……、この機体は……私一人で作る、……作らなくちゃ……いけないから。」

……何でしょう、なんとなく追い詰められたような感じがしますね……。まあ、あまり口出しするのも良くないでしょう。ですが、一言だけ言わせてもらいましょうか。

「そうですね、なら構いません。ですが、これだけは言わせて下さい。ISはあなたのパートナーです。自分の半身、自らの心を映す鏡です。それさえ忘れず、真摯にISと向き合えば、きっとあなたのISは応えてくれるはずです。」

「……………」

「私が言いたいのはそれだけです。では、これで。」

そう言つて、私は奥へと行きます。簪には、あまり焦らず、ISとしっかり向き合つて欲しい。そう思いながら、私はの整備を始めます。さて、まずはスラスターの角度を調整しますか。もう少し外側に向けた方がいいみたいですからね。きちんと調整しましょうか。

第八話（後書き）

感想・意見・誤字脱字等がありましたらよろしく願います。

簪を出してみました。簪は好きです。でも、こんな感じで良いんでしょうか？

第九話（前書き）

お待たせしました。

第九話

本日はクラス代表戦当日。今日までに鈴が一夏に対して不機嫌になっていた（話をよく聞いたら、どっちもどっちのような気がしますが）、一夏が余計なことを言って鈴を本気で怒らせたり（施設を壊したので鈴は後で叱られていました）、簪がISについて時々相談するようになってくれたり（それ以外にも普通に話すようにもなりました。まともな友達つていいですね）、一夏が勝てるように特訓（一夏が言うには『もはや拷問、いや地獄？』だそうですが）したりと、なかなか忙しかったです。そして今、私は一夏のいるピットにいます。何故こんなところにいるのかと言うと、”白式”の最終調整の為です。と言っても、することはあまり多くありませんが。

「さて一夏、何か違和感などは感じますか？」

やり方によつては調整が逆効果になることもありますからね。

「いや、大丈夫だ。問題ない。……やっぱり優が整備してくれると動きが良くなるな。」

それなら良かったです。他人のISを調整するのって、一夏のが初めてなんですよね。以前から何度かしていますが、やはり自分のときとは勝手が違います。

「うれしいことを言ってくれますね。では、頑張ってきてください。」

あんな条件を出しましたが応援します。まあ、一夏が優勝しても私

に出来る事なんてたいしてありませんし、どうなっても大丈夫ですよ。

「おう。」

それだけ言つて一夏はアリーナへと飛んでいきました。さて、鈴のISがどんなものか知りませんが、どうなるでしょうか。

今私はピットで一夏と鈴の試合を見ています。試合前に何やら話していました。ここでは分かりませんでした。ブザーの音と共に一夏と鈴は切り結びます。スピードは”白式”の方が上ですが、パワーと操縦者の腕で鈴に分があるようです。そのため、一夏は防戦一方です。一夏はよく鈴の青竜刀のような『双天月牙』を防ぎますが、攻撃にまで移せません。そのためか一度鈴から距離を取ろうとします。しかし、鈴のISの非固定浮遊部位が光り、その瞬間一夏が何かに殴られたような動きをします。

「あれは、衝撃砲……！」

『鳳鈴音のIS”甲龍”に搭載された第三世代型兵器『龍砲』ですね。』

空間自体に圧力をかけて砲身を生成、余剰で生じる衝撃それ自体を砲弾化して撃ち出す衝撃砲。砲弾も砲身も見えない上、射角の制限が無い厄介な兵器です。

「砲身を見て、射線の予測が出来ないのはやはり面倒ですね……。」

モニターを見ると、一夏はランダムな動きで衝撃砲を避けています。私が『星の欠片』で追いかけて回した成果が出ているのか、見えない砲弾をよくかわします。しかし、直撃は無くとも何発か衝撃砲が機体を掠めていて、シールドエネルギーが少しづつ削られます。元々”白式”は燃費が良くないのでこのままでは確実に負けます。ですが、一夏が何かを狙ってます。一体何をする気でしょうか？ そんなことを考えていると、鈴に隙が出来ました。その隙を突き、一夏が零落白夜を発動して攻撃しようとした瞬間、上から何かがシールドを破ってきました。

「あれは……！」

『”ゴーレム”ですね。篠ノ乃東の製作した無人機です。』

「なぜあれがこんなところに……？」

襲撃してきたのが”ゴーレム”、ということはこれは東さんの仕業です。しかし、目的が読めません。

（IS学園内部に何かあるならわざわざアリーナには来ないはず。というより欲しいものがあるなら東さんは自分で作りますか。）

私が考えている間、一夏と鈴は”ゴーレム”と戦っています。鈴が隙を作って一夏が攻撃しますが、”ゴーレム”に紙一重でかわされて直撃までは至りません。零落白夜を使っているので直撃ではなくてもそこそ削れているようですが、このままではエネルギー切れで負けるでしょう。その前に、あのビームの雨に当たるかもしれないが。

『マスター？』

（では狙いは人？ ならば一夏？ 箒？ 織斑先生？ それとも私？ この場合は一夏でしょうか。現在戦闘中ですし。）

『……マスター？』

（でも何故一夏を襲う必要があるのでしょうか。 ”白式”の戦闘データを取るため？ 一夏自身のデータを取るためでしょうか？ 一応、私がデータを送ってはいますが足りないのかもしれませんが。それとも――）

『マスター！』

（……どうしたんですか<優亜>。大声を出して。）

考え事をしていたら<優亜>に呼ばれました。音ではないので耳は痛くありませんが頭に響きます。

『先ほどから呼びかけているのに無視するからです。……いえ、それよりも、篠ノ乃箒が先ほど後ろを通り過ぎてアリーナへ向かいましたが良いのですか？』

（な……。）

専用機も無いのに何をしに――

「一夏あつ！ 男なら………男なら、そのくらいの敵に勝てなくてなんとするー！」

私の疑問に答えるかのように箒が叫びます。あんなふうには叫んだら狙われるに決まっています。それなのに叫ぶということは――

（狙われたいんですか箒は！）

ついそう思っしまいました。そして案の定、今の声に反応して”ゴーレム”が箒へと照準を向けます。それを防ごうと一夏と鈴が何かしていますが間に合いそうにありません。だったら、

（＜優亜＞、”星空の剣”展開後『星の欠片』を射出。箒の前にエネルギーシールドを三枚形成！）

『了解、マスター。』

そう言いながら私は”星空の剣”を展開、＜優亜＞に『星の欠片』の操作を任せながら飛びます。”ゴーレム”の攻撃はISのシールドすら抜きますが、流石に『星の欠片』四機によって形成されるエネルギーシールドを三枚は抜けないはずです。

「箒っ！」

私が箒を呼ぶと同時に”ゴーレム”からビームが発射されます。しかし、『星の欠片』によるエネルギーシールドが防ぎます。…危ないですね。二枚抜いて、三枚目にまで届いていましたよ。三枚目は使わなくてもいいかとも思っていたんですが……用意しておいてよかったです。

「優！」

「筈は無事です！ やりなさい！」

一夏の声に応えて、私は言います。私の声に頷くと一夏は、鈴の衝撃砲を背中に受けて、そのエネルギーを利用して瞬間加速イグニッションブーストをします。成程、それなら自分のエネルギーを使いませぬ。一夏が突進し、”ゴーレム”の左腕を切り落とします。しかし残った右腕で捕まっています。

「一夏あ！」

心配して鈴が叫びます。ですが――

「……狙いは？」

『完璧ですわ！』

一夏が零落白夜で壊したシールドの向こうからセシリアが”ゴーレム”を撃ちます。『ブルー・ティアーズ』と『スターライトmk』の一斉射撃で”ゴーレム”が落ちていきます。その光景に気を抜いたのか、一夏とセシリアが何やら話しています。

「優、ありがとな。筈を守ってくれて。」

そして、セシリアとの話が終わったのか、今度は私に話しかけてきました。

「自分の友達を守っただけです。あなたが礼を言うことではありませんよ。それより……。」

そう言いながら私は両肩の『星崩し』で、今一夏を狙い打とうとし

た”ゴーレム”に止めを刺します。やはり止めを刺しきれていなかったですね。ですが、『星崩し』はこの”星空の剣”の武装の中でも特に高い威力を誇る射撃武器です。その威力によって、完全に”ゴーレム”を沈黙させることに成功します。

「確実に止めを刺したことを確認するまで、気を抜いてはいけませんよ？」

残心を忘れるな、ということですね。そういえば昔、気を抜いたせいで痛い目にあったことがあるんですよ……。あの時、運よく逃げ出せたから良かったですが、逃げ出せなかったら今ここに私はいないでしょう。

「う……。悪い。」

「まあ、次から気をつけるようにしてくれれば——って、一夏！？」

安心したのか、一夏が気絶しました。何故……って、背中がずいぶん怪我していますね。多分、イクニッション・ブースト瞬時加速の時に受けた衝撃砲のせいでしょう。命にかかわるようなものではないようなので、少し安心しました。ですが、保健室に運びましょうか。

「……は……？」

「ああ、起きましたか。」

保健室で本を読んでいると、一夏が目覚めました。

「あれ…、俺、確かあのISと戦ってて優が止めを刺して……。」

「その後、一夏は気が抜けたのか気絶したんですよ。」

「そうだったのか……イテッ。」

不用意に動いたせいで一夏が痛がります。そりゃあ痛いはずですよ。

「一夏の背中は、鈴の衝撃砲を受けたせいで、大変なことになっています。ですから、とても痛いはずですよ。どうやら絶対防御を切っていたみたいですね。だからそこまでの怪我になったのでしょうか。」

エネルギーを吸収しても、衝撃を全て吸収できるわけではありませんせんからね。

「そっか…………。」

何やら疑問がありそうですが、分からなければ聞いてくるでしょう。

「優。」

「はい？ 何でしょう？」

「俺……、皆を守れたんだよね？」

…なかなか意味深なことを言いますね。

「……そうですね。あなた以外にけが人もいませんし、守れたといえど守れたんじゃないでしょうか。」

そういうと少しだけ一夏の顔に、安堵と喜びの入り混じったような顔をしました。

「ですが、あなたが怪我をすることで悲しむ人間もいるんです。そういうことを考えると、ちゃんと守れたとは言えませんよ。本当の意味で、全てを守りたいのであれば、自分のことも忘れないようにしないとけませんよ。」

「……………そうだな。わかった。」

そう言つて、強い目でこちらを見ます。とてもいい目です。これなら大丈夫でしょう。

「まあ、そのための力は、私が鍛えてあげますから、安心してください。」

一夏なら力の矛先を見誤ることも無いでしょう。

「ああ、頼んだ。」

「ええ。……さてと、私はもう帰りますね。あなたはもう少し寝ておきなさい。怪我が良くなったら、今日の戦闘について色々話をしますからそのつもりで。」

今日の戦いについての話を言つたら、一夏がものすごい嫌そうな顔をしました。次があるならこういうことはできるだけするべきなんですよ？ 必要なことをおろそかにしては、守れるものも守

れなくなります。

「ああそうだ。遅れましたけど、一夏が無事でよかったです。では、おやすみなさい。」

無事であつたことを喜ぶ印に、微笑みながらそう言います。命に別状はないことは分かっていても、心配なことには変わりありませんでしたからね。箒や鈴、セシリアに織斑先生達も心配していましたね。

「……………あ、ああ！ お、おやすみっ！」

……………なぜか一夏が顔を赤くして呆けていました。別に変な格好はしていませんよね？ うん、普通です。

（何であんな顔をしたんでしょうね。分かりますか＜優亜＞？）

AIにこんなことを聞くのを変だと思う人もいるかもしれませんが、ネットの情報を大量に集めているので、基本的に普通の人間よりはるかに物知ります。

『マスターの笑顔に照れたのでは？ マスターは美人ですから。』

（……………あの一夏が私の笑顔程度で照れるわけ無いと思いますよ。第一、これくらいで照れるなら、一夏はとくに誰かを襲っていますよ。）

鈍感過ぎる一夏が、これくらいで照れるはずがありません。それ以前に私はそんな言われる程美人ではないと思うのですが。

『……マスターがそう言うなら、そうなのでしょう。』

(…何ですか、その呆れたような声は。)

まったく、言いたいことはちゃんと言うべきですよ、＜優亜＞。…
…まあ、よく考えたら、たとえ私の笑顔に照れたのだとしても、何かが変わるわけでもありませんし、問題ありませんか。

私が部屋に戻る途中、織斑先生に出会いました。

「こんばんは、織斑先生。」

「ああ。……有峰、聞きたいことがある。」

「今日襲撃してきたISのことでしょうか？」

今、織斑先生が私に聞きたいことがあるならば、それくらいしかないでしょうが。

「ああ、そうだ。……分かるか？」

その問いに、私は首を横に振りました。

「正直、何を考えているか分かりません。」

誰かは、織斑先生なら分かっているはずですので、言いません。…

…少しだけ、あの人の考えが読めるようになったら人間として終わ
りな気がしますね。

「そうか……。まあ、あいつの考えを読もうとするだけ無駄か。」

「ええ、確かにそうかもしれませんね。」

束さんは何を考えているのかよく分かりません。考えがない訳では
ないでしょうが。

「分かった。もういいぞ。」

「はい。ではこれで。また明日、織斑先生。」

それだけ言つて、部屋へと向かいます。それにしても、本当に束さ
んは何を考えているのでしょうか。少しは周りのことを考えて欲し
いものです。……でも、もし束さんが人のことを考えて行動するよ
うになったら、それはそれで気持ち悪い気がします。やはり我慢す
るしかありませんか。

第九話（後書き）

感想・意見・誤字脱字等がありましたらよろしくお願いします。

これで一巻は終わりです。これからこんな調子で書いていきたい
と思います。

第十話（前書き）

お待たせしました。

第二巻の始まりです。

第十話

とある人のせいで中止になったクラス代表戦から数週間たち、6月になりました。ちなみに今日は日曜です。普段だったらISの装備を考えているはずの日ですね。なら何故外にいるかというと、数日前に私が、私服を数点しか持っていないと話したことに起因します。その発言にクラスメイト全員に『ちゃんと服を買いなさい!』と言われてしまいました。そのため、今日は買いに出たというわけです。私は買う気はないと言ったのですが、女子全員のぎらぎらした目には勝てませんでした。

「ふう、これだけ買えば十分ですよね。」

『そう思われます。』

私は服は分らないので、店員とく優亜>に選んでもらいました。そのうちの一つを今着ています。どんな物かというと、細身のジーンズに、黒のタンクトップ。その上に半袖の物を一枚羽織っています。

（しかし……この格好になってから妙に男性に声を掛けられますね。何故でしょう?）

前もよく声を掛けられましたが、この姿になってから何倍も増えた気がします。鬱陶しくてたまらないので、声を掛けられ無いようにと逃げてきたら、あまり知らないところに来てしまいました。

『一言で言えば、ナンパでしょう。』

ナンパ……ですか？　＜優亜＞のことですから、冗談ではなく、真面目に言っているのでしょう。ですが、

（私にそういう魅力があるとは思えませんが？）

お洒落に気を使わない私がそういう理由で声を掛けられるのでしょうか？　もっと可愛い子が沢山いるでしょうに。

『マスターはとても魅力的なんです。だからこそ、沢山の男共が群がってきたのです。』

（……まあ、あなたがそういうなら、そうなのかもしれませんね。）

あまりそうは思えませんがね。……それにしても、お腹が空きました。ああ、もうこんな時間なんですね。

（＜優亜＞、この辺りに食事が出る所はありますか？）

『……一番近いところならば、その先の交差点を右に曲がったところに五反田食堂、というのがありますが。』

流石、仕事が早いです。

（なら、そこにしましょうか。）

『分かりました。』

「らっしやい。」

五反田食堂に入ると、厳めしい声に迎えられました。私はそれに一礼し、カウンター席に座ります。何を頂こうかと、壁にかかっているメニューを見ます。……あれにしましょうか。

「業火野菜炒めと焼き魚定食を下さい。」

「……うちのはけっこう量あるぞ。食べんのか？」

やはり私が注文するとかこういう反応が多いですね。よくそういう言葉が聞かれます。そんなに私は食が細く見えるのでしょうか？

「大丈夫です。決して残したりはしません。」

正直、食べ物を残す人の気持ちは分かりませんね。食材と料理を作ってくれた人に感謝し、綺麗に食べる。これは当たり前のことだと思っのですが。

「……そうか、だったらかまわねえ。」

私の答えに満足したのか、それだけ言っつて、料理を作り始めました。その様子を見ながら私が待っていると、

「あれっ。なんでこんなところにいるんだ、優？」

聞き覚えのある声が聞こえてきました。

「私は服を買った帰りですよ。あなたこそ、何故ここにいるのです

か、一夏？」

テーブル席に赤い髪の少年と少女と共に座る一夏。確か家の様子を見に行くと言っていたはずですが。

「ああ、家の様子を見に行つた帰りに友達の家によつてみたんだ。」
成る程、そういうことですか。

「おい一夏！ お前この人と知り合いなのか！？」

「い、一夏さん！ ず、ずいぶん親しいみたいですけど、どういう関係なんですか！？」

おや、赤髪の男の子と同じ色の髪を持った少女が慌てたように一夏に問いかけ始めました。なんであんなに慌てているのでしょうか。
もつとも、少女の方は箒たちと同じ反応なのでなんとなく分かりますが。

「ん？ ただの友達だよ。IS学園で知り合った。」

「ただの、とは寂しいですね。仲の良い、とかくらい言ってくれると嬉しいのですが。」

「ん、悪い。」

「いえ、本気で責めているわけではないのでかまいません。…おつと、挨拶が遅れましたね。私は、有峰優です。一夏とは友達です。まあ、コーチの真似事もしていますが。お二人の名前は？」

自己紹介をして、カウンター席から一夏たちのいる席に移ります。
ちなみに席は、一夏と私、向かい側に一夏の知り合いらしい二人が
座っています。

「えっと、五反田蘭です。」

「あ、あのっ、ごっごっ、五反田弾と言いますっ！」

私が友達だと言うと少しだけ安心したような、でもやっぱり不安が
残ったような声で自己紹介をする蘭さんと、なぜか緊張した声を出
す弾さん。それにしても、兄弟ですか。だから髪の色が同じなん
ですね。

「蘭さんと弾さん、ですね。よろしくお願いします。……一夏、弾
さんって、一夏が前に話していた中学時代の友達ですか？」

中学生の頃、よく食べに行った食堂の息子が友達だと、言っていま
したね。

「ああ、そうだな。そっぴや優に話してだっけ。」

「……おい一夏、有峰さんに変な事吹き込んだじゃいねえだろうな……
！」

やっぱり知らないところで自分のことが話されているのは嫌なので
しょうか？　なぜか弾さんが怒ったような声を出します。

「鈴の話の時に少し出ただけですよ？　名前だって知りませんでし
たし。」

「あ……、そ、そうですか。」

うーん、やっぱり緊張されてますね。やっぱり初対面ですし、仕方ないでしょうか？

「おい、できたぞ。」

「ありがとうございます。……料理が来ましたし、いただきますしよ
う。」

料理が来たので、皆にそう呼び掛けて、私は料理を食べ始めます。
…うん、美味しいですね。

「あー…、そっぴや優、その服似合ってるぞ。うん。」

へえ、あの一夏が女性の服を誉めるとは…。少しは考えるようにな
ったものですね。

「…ありがとうございます。まあ、私のことはいいとして……、こ
の後一夏は蘭さんとデートですか？」

先ほどの蘭さんの様子からすると、一夏のことを好きみたいです
かね。一夏を誘ったとしてもおかしくありません。綺麗な服を着て
いる理由も説明がつかますし。

「いいい、いえ！　そ、そういうわけでは…。」

「何言ってるんだ優？　そんな訳ないだろ。」

ここでも一夏は一夏ですか…。蘭さんもかわいそうに。それにして

も、本当に一夏はもてますね。学園外にも一夏のこと好きな人がいるとは思いませんでした。

「はあ、筈と一ヶ月以上一緒に暮らしても、女心は全く分からないままなんですネ。」

「え……、ちょっと待って下さい有峰さん！　ほ、筈って人はもしかして女性ですか！？」

「ええ、IS学園での話ですからね。」

今の話は迂闊でしたかね。蘭さんが百面相をしていますよ。好きな人が他の女性と一緒に暮らしていたなんて、やはり嫌なんですかね。私には理解できませんが。

「……決めました。私、来年IS学園に受験します。」

「ちよつ、待て蘭！　お前何を言っ——」

「それなら私達は来年あなたの先輩になりますね。一夏、ちゃんと面倒見てあげてくださいよ？」

「あ、有峰さん！？」

うるさいです、弾さん。食事中に騒ぐなんていけませんよ？

「あ、ああ、そうだな。受かったらな。」

「約束ですからね！　絶対ですよ！」

嬉しそうな顔をする蘭さん。うん、やはり笑顔はいいですね。ですが一夏、私が仕向けたとはいえ、あまり安請け合いはしないほうが良いですよ？

「蘭！ お前考え直せ！ 急に受験する高校変えるなんて――」

ヒューー、ガアンツ！

厨房から飛んできた中華鍋によって、弾さんが倒されました。食事中はお静かに。

「やっぱりハヅキ社製のいいなあ。」

「え？ そう？ ハヅキのってデザインだけって感じしない？」

「そのデザインがいいの！」

「私は性能的に見てミューレイがいいかなあ。特にスムーズモデル。」

「あー、あれねー。モノはいいけど、高いじゃんアレ。」

月曜日、教室に行くときクラスメイトの皆がISスーツについて話していました。そういえば今日からISスーツの申し込みが開始されるのでしたね。関係が無かったので今の今まで忘れていました。そんなことを考えていた私や一夏が教室に入ってきたのを見て、何人かが声を掛けてきました。

「ねえ、そういえば織斑くんのISスーツってどこのやつなの？
見たことない型だけど。」

「有峰さんのは？ あのえっちいやつ。…あ、もしかして篠ノ乃博士が作ったやつとか!？」

「えっちいやつ……。私のは自作です。やはり自分で作ったほうが信頼できるので。」

……やはり、あの形はそういうものなのでしょう。見る人全員がそういうことを言うんですよね。もっとも、何を言われようとも作り直す気はありませんが。

「あー。俺のは特注品だつて。男のISスーツが無いから、どっかのラボが作ったらしいよ。えーと、もとはイングリッド社のストリートアームモデルって聞いている。」

一夏のISスーツが市販品だったら驚きですね。使う男は一人しかないのに、わざわざ市販するなんてありえませんかね。

「有峰さんのつて自作なんだ……。ねえ、私のISスーツ作ってくれたりしない？」

「それはかまいませんが……。普通の十倍くらい払ってくれないと作れませんよ?」

無料で作るには高すぎます。勿論、効果は折り紙つきですが。

「げっ、そ、それは……。や、やっぱりいいや。あはは……。」

まあ、そういう反応になりますよね。自分でも高いと思いますから。

「諸君、おはよう。」

「お、おはようございます！」

そんな話をしていると、織斑先生と山田先生がやって来ました。それにしても、織斑先生が来た瞬間に全員席に座るのはすごいですね。

「今日から本格的な実戦訓練を開始する。訓練機ではあるがISを使用しての授業になるので各人気を引き締めるように。各人のISスーツが届くまで学校指定のものを使うので忘れないように。忘れたものは代わりに学校指定の水着で訓練を受けてもらう。それもないものは、まあ下着でかまわんだろう」

さすがに授業を下着で受けるのはどうかと思いますが。普通の授業で下着にならないのと同じです。教わる身としては身だしなみはきちんとしなさいといけません。

『マスター、そういう問題ではないと思います。』

（それ以外に何か問題ありますか？）

『……織斑一夏がいるではありませんか。』

（？　一夏がいるからといって、何が変わるのですか？）

よく分かりませんね。一夏がいても同じだと思いますが。

『……………もう、いいです。』

（＜優亜＞、本当にどうしたのですか？）

結局、何が言いたかったのでしょうか？そういえば最近、＜優亜＞がはつきりものを言わなくなった気がします。……生みの親である私に対して隠し事ですか。成長している証なのでしょうが、少し寂しいですね。

「では山田先生、ホームルームを。」

「は、はいっ。」

眼鏡を拭いていた山田先生が慌てて返事をします。その動きが子犬などの小動物を連想させます。

「ええとですね、今日はなんと、転校生を紹介します！ しかも二名です！」

「『えええええっ！？』『』」

いきなりもたらされた驚きの情報に、皆大きな声を上げます。まあ、あまりにも唐突ですものね。

「失礼します。」

「……………」

クラスに入ってきた転校生を見て、ざわめきがピタリと止まりました。

た。何故なら――

「シャルル・デュノアです。フランスから来ました。この国では不馴れなことも多いかと思いますが、みなさんよろしくお願いします。」

――転校生の一人が男だったからです。ですが……、

(……<優亜>。)

『何ですか、マスター？』

(デュノアさんって、男の服を着て、男の名前を名乗ってはいますか……女の子ですよ？)

振る舞いも男の真似をしているようですが、私が見た限りは女の子だと判断しました。子供の頃に、いつのまにか女装や男装を見破るのが得意になっっていたんですよ。嘘を見破るのが上手くなってきた頃からでしょうか？ それとも他人のわずかな動きに反応できるようになった頃からでしょうか。まあ、それはどうでも良いですね。

『はい。筋肉量、骨格、皮膚の水分量等、総合して間違いなくシャルル・デュノアは女性でしょう。』

(やはりそうですか……。<優亜>、デュノア社について、出来るだけ調べておいてください。)

まあ、わざわざ男の振りをしてIS学園に来るという事は、一夏の接触を望んでいるはずです。調査くらいなら良いですが、一夏の

籠絡などだとしたら面倒ですね。なぜここに来たのか見極めさせてもらいましょう。

第十話（後書き）

感想・意見・誤字脱字等がありましたらよろしく願います。

第十一話（前書き）

お待ちせしました。

第十一話

「お、男……?」

男装しているデュノアさんを見て、誰かがそう呟きました。デュノアさんを見ても、普通は女性だと気づかないものなのですね。だったら、＜優亜＞がデュノアさんのことを調べ終わるまで合わせておきましょう。

「はい。こちらに僕と同じ境遇の方がいると聞いて本国より転入を――」

「きゃ……。」

……なんでしょう、ものすごく嫌な予感がします。とりあえず、耳をふさいでおきましょう。

「はい?」

「「「きゃああああー!」」」

こゝこれは耳を塞いでいても頭に響きますね……。ああ、一夏が今の叫びを受けてつらそうですね。……御愁傷様です。

「男子! 二人目の男子!」

「しかもうちのクラス!」

「美形! 守ってあげたくなる系の!」

「地球に生まれてよかった～～～！」

男（本当は男装女子ですが）が来たくらいで何故そんなに喜ぶのでしょうか。私には分かりません。

「あー、騒ぐな。静かにしろ。」

「み、みなさんお静かに。まだ自己紹介が終わってませんから！」

織斑先生は面倒くさそうに、山田先生は慌てたように生徒たちを静めます。騒ぎが収まったところで、もう一人の転校生に眼が行きます。デュノアさんは『貴公子』だしたら、もう一人の方は『軍人』ですね。

「……挨拶をしろ、ラウラ。」

「はい、教官。」

教官……？　どういうことでしょうか。後で＜優亜＞に調べて……いえ、やめておきましょう。面倒なことに繋がるような気がします。

「ここではそう呼ぶな。もう私は教官ではないし、ここではお前も一般生徒だ。私のことは織斑先生と呼べ。」

「了解しました。」

どうでも良いですが、本当に分かっているのでしょうか。あの返事から考えると、何も態度が変わってないように思えます。

「ラウラ・ボーデヴィツヒだ。」

「……………」

続きは無いのでしょうか？

「あ、あの、以上……ですか？」

「以上だ。」

山田先生の言葉を一言で切り捨てるボーデヴィツヒさん。そのせいで山田先生が涙目です。

「！ 貴様が——」

？ ボーデヴィツヒさんが一夏と目を合わせた瞬間、敵意を見せながら歩いていきます。そして目の前に立ち、腕を振りかぶります。……殴る気ですか。仕方がありません、止めましょうか。

「はあ、一夏の周りは本当に騒動だらけですね。」

「……………貴様、邪魔をするな。」

私がボーデヴィツヒさんの腕を掴んでとめると、鋭い目で睨んできました。こういう強い敵意は久しぶりですね。懐かしく思えます。

「生憎、友達が殴られそうになっているのを黙って見過ごせるほど薄情ではありませんので。」

「ふんつ。」

私の発言に対して、ボーデヴィツヒさんが馬鹿にしたように鼻を鳴らします。そして一夏に向き直り、殺気すら含んだ声で言い放ちます。

「私は認めない。貴様があの人の弟であるなど、認めるものか。」

それだけ言って、自分の席に座るボーデヴィツヒさん。何なんでしょう一体。一夏に心当たりがあるか後で聞きましょうか。その後、織斑先生が今日の予定を話しました。二組と合同でISの模擬戦闘をやるそうです。……実演とかやらされなければいいですが。そんなことを考えていると、一夏が話しかけてきました。

「あー、優。よく分からんけどありがとう。」

「どういたしまして。……ですが、早く教室から出たほうが良いですよ？ちゃんとデュノアさんも連れて行ってあげてくださいね。」

このまま女子と着替えたいというなら別ですが。

「ああ、そうだな。よし、行くぞ。」

「えっ、あ、うん。わかった。」

そう言って一夏はデュノアさんの手を握って教室から出て行きました。それにしても、本当に一夏といると、退屈しなくて済みますね。面倒なことも多いですが。

「では、本日から格闘及び射撃を含む実戦訓練を開始する。」

「はい！」

一組と二組の合同実習。何故だか普段より気合の入った返事です。二組の人にとっては織斑先生の授業を受けられる機会が少ないからでしょうか？

「今日は戦闘を実演をしてもらっ。ちょうど活力が溢れんばかりの十代女子もいることだしな。——凰！オルコット！」

先ほど、一夏と話していて織斑先生に叩かれた二人が実演することになりました。私でなくて良かったです。二人は文句を言いながら前に出て行きます。

「少しはやる気を出せ。——アイツに良いところを見せられるぞ？」

「やはりここはイギリス代表候補生、わたくしセシリア・オルコットの出番ですわね！」

「まあ、実力の違いを見せるいい機会よね！ 専用機持ちの！」

……織斑先生。こんなことで人の恋心を利用するのはどうかと思いますよ？ まあ、それだけで態度を百八十度変える二人も問題かもしれません。

「それで、相手はどちらに？ わたくしは鈴さんとの勝負でも構い

ませんが。」

「ふふん。こっちの台詞。返り討ちよ。」

「慌てるなバカども。お前達の対戦相手は——」

キイイイン……

おや、上から山田先生が来ていますね。しかし、墜落しそうになっている気が——

「ああああーっ！ ど、どいてくださいーっ！」

あー、このコースだと一夏にぶつかりますね。まあ、”白式”もありますし、自分で何とかするでしょう。

ドカーン！

ぎりぎりで”白式”を展開させた一夏。そのおかげで怪我は無いようですが、数メートル吹き飛ばされました。一夏は山田先生ともつれ合い、なぜか山田先生の胸を揉んだ状態になっています。

（どうなったら上手くあんな風になるのでしょうか？）

『さあ？ 私には分かりません。』

（でしようね。）

この光景を見て、セシリアと鈴がISを展開します。箒も武器があったら斬りかかりそうな顔をしています。あ、セシリアが『スターライトmk?』撃ちました。ぎりぎりだなにか（多分殺気でしょう）を感じたのか、それを一夏がかわします。

「ホホホホ……。残念です。外してしまいましたわ……。」

笑ってはいますが全身から怒気が溢れ出しています。今度は一夏の後ろで鈴が『双天月牙』を連結して投げつけます。一夏を殺す気なんでしょうか、と私が考えていると、山田先生が『双天月牙』を打ち落としました。……全然雰囲気違います。とても同一人物には見えません。

『百パーセント同一人物ですよ、マスター。』

(……分かっていますよ。)

妙なところに反応するく優亜>に突っ込みを入れてみると、織斑先生が説明をしてくれました。

「山田先生はああみえて元代表候補生だからな。今くらいの射撃は造作も無い。」

「む、昔のことですよ。それに候補生止まりでしたし……。」

織斑先生が人を褒めるとは珍しいですね。……でも『ああみえて』というのは少しひどいような気がしますよ、織斑先生？

「さて小娘どもいつまで惚けている。さっさと始めるぞ。」

「え？ あの、二対一で……？」

「いや、さすがにそれは……。」

「安心しろ。今のお前たちならすぐ負ける。」

へえ、織斑先生にそこまで言わせるほど山田先生は強いのですか。これは楽しみですね。

「手加減はしませんわ!」

「さっきのは本気じゃなかったしね!」

「い、行きます!」

言葉は普段通りですが、その目は戦う者の目が変わっていました。ああいう目も、一夏に足りないものの一つですね。それをどう教えればいいのか考えている間、デュノアさんが”ラファール・リヴァイブ”について説明しています。それにしても山田先生の動きは無駄の無い、堅実なものです。一対二ではなく、一対一を交互に行うように動いたり誘導したりしています。

「ああ、いったんそこまでいい。……終わるぞ」

織斑先生の言葉の直後、山田先生が二人がぶつかったところにグレネードを投げつけ、二人を落としました。へえ、セシリアと鈴の二人をほぼ完封しましたよ。すごいですね。

「あ、アンタねえ……何面白いように回避先読まれてんのよ……。」

「り、鈴さんこそ! 無駄にばかすかと衝撃砲を撃つからいけないのですわ!」

「こっちの台詞よ! 何ですぐにビットを出すのよ! しかもエネルギー切れるの早いし!」

……醜い争いですね。二人とも間違ったことを言っていないのが余計に悪いです。

「ぐぐぐぐつ……！」

「ぎぎぎぎつ……！」

「さて、これで諸君にもIS学園教員の實力は理解できただろう。以後は敬意を持って接するように。」

まあ、よく考えると教える立場なんですから強いのは当然ですよ。

「専用機持ちは織斑、有峰、オルコット、デュノア、ボーデヴィツヒ、凰だな。ではグループになって実習を行う。各グループリーダーは専用機持ちがやること。いいな？ では分かれろ」

その言葉で一夏とデュノアさんの二人に皆が群がります。その様子を見かねた織斑先生が出席番号順にグループを分けました。さて、早く始めましょうか。だらだらとやっても仕方ありませんね。

午前の実習が終わり、昼休み。私達は屋上にいます。

「たまには屋上で食べるというのも、いいですね。」

「今日は特に天気がいいからな。……第、どうした？」

なにやら筈が納得いかないとも言いたげな顔をしています。一体どうしたのでしょうか？

「……何故こうなっている。」

「せっかくの昼飯だし、大勢で食った方がうまいだろ。それにシャルルは転校したばかりで右も左も分からないだろうし。」

「そ、それはそうだが……。」

そういう問題ではない、と言いたそうな筈。ああ、一夏と二人きりで食べるつもりだったんですね。それなら悪いことをしましたかね。わざわざ一夏のためにお弁当を作ってきたみたいですし。ちなみに、セシリアと鈴の二人もお弁当を作ってきたそうです。ちなみに私はパンを買い込んだだけで、お弁当はありません。

「ええと、本当に僕が同席して良かったのかな？」

「気にすることありませんよ、デュノアさん。」

「ありがとうございます。後、シャルルでいいよ？」

私がデュノアさん……いえ、シャルルに声をかけると、シャルルが微笑みながら礼を言ってきました。

「なら、私も優でかまいません。…しかし、名乗った覚えはありませんが、私の名前は一夏に聞いたのですか？」

「えっ！？ ああ、うん、そうだよ。」

私が質問すると、シャルルが慌てたように答えます。反応を見るとここに来る前に知っていた気がしますね。シャルルは企業の関係者ですし、そうであってもおかしくありませんから。

「…本当にうまいから箸も食べて見ろよ。ほら。」

いつの間にか、箸からもらった弁当を食べていた一夏が、何故か箸に唐揚げを食べさせようとしていました。

「あ、これってもしかして日本ではカップルがするっていう『はい、あーん』っていうやつなのかな？ 仲睦まじいね。」

その光景を見ていたシャルルがそんなことを言いました。……からかって言っている訳ではなく、本心からその台詞を言うとは、恐ろしいですね。

「だ、誰が！ 何でこいつらが仲いいのよ！」

「そつ、そうですわ！ やり直しを要求します！」

二人とも、そんなに怒らなくても良いじゃありませんか。笑顔の方が印象がよくなりますよ？

「シャルル、一夏と箸は付き合っていないですよ。一夏が鈍感な上に、枯れていますから。」

「あ、そうなんだ。」

「ちょっと待て。その評価には断固抗議するぞ。」

セシリアと鈴が私の評価に頷く隣で、一夏が文句を言ってきました。

「……でしたら。」

「うわっ！？ ゆ、優！？」

「こんなことをしたらドキドキしますか？」

枯れていないと言っなら、女の子に抱きつかれれば反応するはずです。ということを抱きついてみました。やっぱり、男の子だからでしょう？ 何となくゴツゴツしている気がします。うわ、一夏の顔が真っ赤で、こちらまで心臓の音が聞こえますよ。なんだかこちらまでドキドキしてきそうですね。

「ちょっと優！ 何やってんのアンタ！」

「そうですね！ そんな羨ま……いえ、はしたないことをするなんて！」

「うわー、優って大胆だね。」

「……………」

鈴、ふざけているだけですから怒鳴らないで下さい。セシリアは本音が出ていますよ？ シャルル、このくらいなら大胆というほどでもないと思いますが。ちなみに筈は、シャルルの『カップル』の部分に反応してどこか違う世界に飛んでいます。

「ふふっ、鈴、セシリア、冗談ですからあまり怒らないでください。」

……一夏、ドキドキしてくれたみたいなので枯れている、ではなくヘタレ、ということにしておきますね。」

一ヶ月女の子と一緒に暮らしておきながらまったく手を出しませんでしたからね。枯れているわけでないならヘタレでしょう。

「結局不名誉な評価のままじゃねえか……。」

うーん、やりすぎたでしょうか？ ものすごいげっそりとした顔をしています。

「どうしたの、一夏？ 僕の方をじっと見て。」

「ああ……、男同士っていいなと思ってな。」

一夏……それは……。

「男同士がいつて何よ……。」

「…不健全ですわ……。」

「…灯台もと暗しに気づかぬ愚か者め……。」

「ああ、ヘタレではなく同姓愛者だったんですか。……いえ、さっきの事もありますし、バイセクシャルでしょうか？」

「違えよ！ ……はあ、何でこうなるんだよ……。」

「あ、あははは……。」

一夏ががっくりと肩を落とすのを見て、シャルルが乾いた笑いを漏らします。一夏はこんなことに本気で返してくれるから楽しいですね。これからも、そのままいて欲しいですね。

第十一話（後書き）

感想・意見・誤字脱字等がありましたらよろしくお願いします。

優が暴走しました。始めはこんなはずではなかったんですがね……。

第十二話（前書き）

お待たせしました。

第十二話

シャルルが転校してきた日の夜、今私は＜優亜＞が調べ上げた資料を見えています。

「本名はシャルロット・デュノア……ああ、愛人の子ですか。」

だから社長の子なのに男装なんてしているのですか。

『ISに対する高い適正を持つため、母親が死んだ後に引き取られたようです。』

「目的は……広告塔と、”白式”のデータですかね。……弱みを握れ、とかはなさそうですね。」

そう言いながら小さく息を吐き出します。もっと酷いことも想像していたので少し安心しました。デュノア社は経営不振ですからね。もっと悪いこともしかねません。

『それならば問題ないのでは？ 一応、警戒はしておいた方が良いでしょうが。』

（ええ、それで良いでしょう。……ところで、このファイルは何ですか？）

シャルルに関するファイル以外に、妙なファイルも持ってきているんですよ。

『デュノア社に関する不正な行為の証拠です。』

(……そんなことまで調べるように言いまっけ?)

さらりと言うく優亜>に、ファイルの中身を見ながら質問を投げかけます。しかし、デュノア社もよくこれほどまで不正を溜め込んでいましたね。

『デュノア社について調べるように言われたので調べたのですが……余計なことでしたか?』

(いえ、役に立つでしょうから問題ありません。)

ただ、わずか半日でここまで調べるとは予想外だっただけです。

『それならば良かったです。』

(ええ、……もう良いです。ありがとうく優亜>。)

<優亜>のおかげで万が一デュノア社が何かしてきたとしても、十分に対処することができます。これで少しは安心できますかね。それでも問題がまだあるところが悲しいですが。

「ええとね、一夏がオルコットさんや鳳さんに勝てないのは、単純に射撃武器の特性を把握してないからだよ。」

「ああ、そう言われると確かに分かっていますね。」

今日はシャルルも含めて、一夏にISの戦闘技能を教えています。

「そ、そうなのか？ 一応わかっているつもりだったんだが…。」

「体で覚えていない、といったところですね。」

「そうだね、知識としては知ってるって感じかな。さっき僕と戦った時もほとんど間合いを詰められなかったよね？」

「うっ……確かに。『^{イグニッション・ブースト}瞬時加速』読まれてたしな……。」

「一夏のISは近接格闘オンリーだから、より深く射撃武器の特性を把握しないと対戦じゃ勝てないよ。特に一夏の瞬時加速って直線的だから反応出来なくても軌道予測で攻撃できちゃうんだ。」

「ですが、瞬時加速の途中で軌道を変えようとしてはいけませんよ。骨が折れたりしますから。」

「ああ、わかった。」

しかし、シャルルの説明は分かりやすいですね。独学でやってきたせいか、問題点は分かっても、原因が分からないんですね。私の場合、『もつと上下の動きを取り入れなさい。』とか、『小刻みに動いて軌道を予測させないようにしなさい。』程度しか言えないんですね。ちなみに箒、セシリア、鈴の三人の場合、

『こう、ずばーっとやってから、がきんっ！ どかんっ！ という感じだ。』

『なんとなくわかるでしょ？ 感覚よ感覚。……はあ？ なんてわかんないのよバカ。』

『防御の時は右半身を斜め上前方へ五度傾けて、回避の時は後方へ二十度反転ですわ。』

です。私もあまりよく教えられてはいないと思うのですが、この三人よりはマシだと思っています。これで分かれと言う方が無理でしょう。

「ふん、私のアドバイスをちゃんと聞かんからだ。」

「あんなにわかりやすく教えてやったのに、なによ。」

「わたくしの理路整然とした説明の何が不満だと言うのかしら。」

箒のは意味不明、鈴のはアドバイスになっていない、セシリアはイメージに繋がらない説明ですからね。教える側も教えられる側も不満ばかり、と言った所です。

「一夏の『白式』^{イコライザ}って後付武装がないんだよね？」

「ああ、何回か調べて貰ったんだけど、^{バススロット}拡張領域が空いてないらしい。だから量子変換^{インストール}は無理だって優が言ってた。」

「ええ、ワンオフ・アビリティにに容量を食われていますからね。そうでなくても”白式”が他の武装を嫌うので容量が空いていても入れられません。」

”白式”のコアは随分と頑固なんですよね。ここまで他の武装を嫌

うのは珍しいです。

「へえ、そうなんだ。ブレード一本だけって言うのは大変だね。…よし、次は射撃武器の練習を試みようか。射撃武器の特性を把握するのに役立つしね。はい、これ。」

そう言いながらシャルルは五五口径アサルトライフル『ヴェント』を渡します。

「え？ 他の奴の装備って使えないじゃないのか？」

「所有者が使用許諾すれば登録してある人全員が使えるんですよ。」
そういえばそのあたりについてはまだ教えていませんでしたね。

「そういうこと。——うん、今一夏と”白式”に使用許諾を発行したから、試しに撃ってみて。」

「お、おう。」

そう言いながらおぼつかない様子で銃を構える一夏。まあ、素人ならこんな感じですかね。

「構えはこうでいいのか？」

「えっと……脇を締めて。それと左腕はこっち。わかる？」

ISに乗っていて浮いているため、自由に動いて一夏の構えを直します。

「火薬銃だから瞬間的に大きな反動が来るけど、ほとんどはISが自動で相殺するから心配しなくてもいいよ。センサー・リンクはできてる?」

「あ、”白式”にはセンサー・リンクはありませんよ。完全に格闘専門の機体ですから。」

こっちに着てからセンサー・リンクが無いのを見たとき入れておくうかとも思いましたが、”白式”が嫌がりそうなのでやめておきました。

「そうなんだ。じゃあ目測でやるしかないね。」

「じゃあ、行くぞ。」

「うん。とりあえず撃つだけでもだいぶん違うと思うよ。」

バンッ!!

「うおっ!?!」

銃を撃った一夏が驚いています。そういえば一夏がISで実弾武器を見るのはシャルルのが初めてですね。他は格闘かエネルギー主体の射撃武器ばかりです。そういう意味でも銃は新鮮でしょう。

「どう?」

「お、おう。なんか、アレだな。とりあえず『速い』っていう感想だ」

「そう。速いんだよ。一夏の瞬時加速も速いけど、弾丸はその面積が小さい分より速い。だから、軌道予測さえあつていれば簡単に命中させられるし、外れても牽制になる。一夏は特攻するとき集中しているけど、それでも心のどこかではブレーキがかかるんだよ。」

「だから、簡単に間合いが開くし、続けて攻撃されるのか……。」

「とは言っても、高速移動中に同じく高速で動くISに命中させるのは容易ではありません。砲身を見て弾道を予測しながら動けば距離を詰められるはずですよ。」

「そっか、弾は速いけど真っ直ぐにしか飛ばないもんね。撃たれる前に動けば当たらないか。」

「そういうことです。」

勿論、口で言うほど簡単ではありませんが、一夏は飲み込みが良いですすぐに出来るようになるでしょう。

「だからそうだと私が何度も説明したと……！」

「って、それすらわかってなかったわけ！ はあ、ほんとにバカね。」

「わたくしはてっきりわかった上であんな無茶な戦い方をしているものと思っていましたけど……。」

……やっぱりシャルルが転校してきてくれてよかったですね。一夏の絡みの気苦労を共有できそうです。簪に愚痴を言う訳にはいきませんからね。

「ねえ、ちょっとアレ……。」

「ウソっ、ドイツの第三世代型だ。」

「まだ本国でのトライアル段階だって聞いてたけど……。」

そんな会話をしていると、急にアリーナがざわつきました。何かと思つて振り返つてみると、そこにはISを纏つたボーデヴィツヒさんがいました。

『“シュヴァルツェア・レーゲン”、ドイツの第三世代型ISですね。』

ボーデヴィツヒさんのISについてく優亜>が解説しているのを聞いていると、ボーデヴィツヒさんが一夏に開放回線オープン・チャネルで話しかけました。

「おい。」

「……なんだよ。」

いきなり殴られそうになつたからか、一夏も喧嘩腰です。

「貴様も専用機持ちだそうだな。ならば話が速い。私と戦え。」

こんな周りに生徒が大勢いる状況で戦おうというのですか？ 少しは考えて欲しいですね。

「イヤだ。理由がねえよ。」

「貴様にはなくても私にはある。」

そう言いながら眼帯をつけていないほうの目で一夏を睨みつけます。

「貴様がいなければ教官が大会二連覇の偉業をなし得ただろうことは用意に想像できる。だから私は貴様を——貴様の存在を認めない。」

織斑先生の二連覇……ああ、モンド・グロツソの話ですか。確か決勝戦が織斑先生の不戦敗でしたっけ。そのことに一夏が関わっている、ということでしょうか？ どういうことでしょうか？ 話が読めませんね。

「また今度な。」

「ふん。ならば——戦わざるを得ないようにしてやる！」

「！」

そう言っただけにある大型のレールカノンを撃ってきました。周りにはISを展開していない人が何人もいるのに何を考えているのでしょうかね。

ゴガギンッ！

「……こんな密集空間でいきなり戦闘を始めようなんて、ドイツの人は随分と沸点が引くいんだね？ ビールだけでなく頭もホットなのかな？」

ボーデヴィツヒさんの攻撃を、すばやく一夏の前に出たシャルルが盾で防ぎました。え？ 私は何故動かなかった、ですか？ シャルルが動いたのを見たのでシャルルに任せることにしただけですよ？

「フランスの第二世代型アンティークごときで私の前に立ちふさがるとはな。」

「未だに量産化の目処が立たないドイツの第三世代型ルーキーよりかは動けるだろうからね。」

そう言いながら二人は武器を構えます。やれやれ、仕方ありませんね。

「……二人とも、周りに迷惑を掛ける気ですか？ 少しは考えなさい。」

私はボーデヴィツヒさんに対して”星空の剣”を展開し、宙に飛ばした『星の欠片』いくつか向けます。

「……！ 貴様、まさか！」

私のISと、空中に浮いているビット兵器を見てボーデヴィツヒさんが大きな声を上げます。そして両腕からプラズマ刀を展開して私に斬りかかってきます。何故？ と思いながら両足の『昂』を取り、ビーム刃を出してプラズマ刀を防ぎます。

「いきなり斬りかかってきて、一体何のつもりですか？」

「まさかこんなところに居たとはな……、『黒き魔女』よ！」

……IS学園でその名前を聞くとは思いませんでした。その名前は

あまり好きではないのですが。だって、恥ずかしいじゃないですか。

『いわゆる厨二病ですからね。』

（あなたは少し静かにしてください。）

まったく……。余計なことと言わないで欲しいですね。厨二病の意味は分かりませんが、馬鹿にしたようなニュアンスは伝わってきましたよ。

「…………『黒き魔女』？」

一夏が頭に疑問符を浮かべます。まあ、知り合いがいきなり変な名前前で呼ばれたらそうなりますよね。

「えっとね、『黒き魔女』っていうのは世界中でいくつものISの研究施設を潰している正体不明のISとその操縦者のことだよ。わかってるのは機体の色、違法な研究所にしかこない事、それと人は殺さない事くらいなだけ……。まさか優がそうだったとはね…………。」

それ以外の情報がでないように徹底的に隠しましたからね。しかし、シャルルは知っていましたか。鈴もセシリアも初めて聞いた、という顔をしているのですけどね。

「それにしても、私のこの姿を見て『黒き魔女』だと分かるということは、私はあなたと戦ったことがある、ということですか。」

「ああ、そうだ。あの時貴様から受けた屈辱……………忘れたことは無いぞ……………」

罅迫り合いをしながら、憎しみの籠った声で叫ぶボーデヴィツヒさん。はて、他人に屈辱を与えるようなことをした記憶はありませんが。私が不思議がっている間、ボーデヴィツヒさんはさらに力を込めてきます。

『その生徒！ 何をやっている！ 学年とクラス、出席番号を言え！』

騒ぎを聞きつけたからか、はたまた喧嘩の領域から外れそうなのを見かねたのか、先生がスピーカーで叫んできます。

「……ふん。今日は引こう。」

興が削がれたからか、ISを解除し、アリーナゲートへ去って行きました。

「ふう、私たちも戻りましょうか。」

ボーデヴィツヒさんが去って行くのを見た後、呆けている一夏たちに声を掛けます。

「あ、ああ。そうだな。」

それにしても、何故ボーデヴィツヒさんは一夏を敵視するのでしょうか？ 出来ることなら一夏に聞きたいですが、話したくないかもしれませんね。話してくれるまで待ちますか。

第十二話（後書き）

感想・意見・誤字脱字等がありましたらよろしく願います。

はい、優に二つ名ができました。

あとラウラが屈辱だと受け取った優の行動は、武装のみを破壊して無力化しただけです。ラウラは加減されたと取っていますが、優としては効率がいいと思っただけの行動です。一時的に無力化できれば良いので最低限の破壊で終わらせました。

第十三話（前書き）

お待たせしました。

第十三話

『黒き魔女』という恥ずかしい名前が周りに知られた日の夕方、いつものように一夏に勉強を教えるに部屋に行くと、予想外の光景を目にしました。とは言っても、一夏とシャルルがいるだけで、他に特に新しいものがあるわけではありませんよ？

「うわわわわわ、ゆ、優！？」

「あああ、あのだな、優！ これはだな、いろいろと事情があつてだな……。」

ただ、いつもなら部屋でも男装をしているはずのシャルルが、男装を解いていました。どうやら一夏にはれたみたいですね。そして今度は私にはれたと思って慌てている、というわけですか。ちなみにシャルルは意外と胸が大きいです。男装している時は辛そうですね。

（しかしこれは……、面白いですね。）

『……マスター？』

私の心のつぶやきに反応するく優亜くを無視して、シャルル達にどういう返しをするか考えます。……よし。

「……シャルル。」

「ゆ、優！？ じ、これは——」

「たとえシャルルに女装趣味があつても、私は友達ですからね。安

心してください。」

「違うよ！ 何でそうなるのさ！ 僕は正真正銘お——」

「心は女、ということですか。だからこれが本当の自分、ですね。分かりました。私は何も言いません。」

「あーもう！ だからそういうことじゃなくてね！」

うんうん。いい反応を返してくれますね。弄りがいがあります。しかし、自分で始めておいてなんですがお遊びは終わりにしておきましようか。一夏が呆けた顔をしていますし。

「……で、どうして男装がばれたんですか？ 鈍感な一夏相手ですから、このまましばらくはばれないと思っていたのですが。」

それに、シャルルが結構上手に男を演じていましたからね。まあ、ところどころ女性っぽさは出ていましたが。

「えー？ えつと、それは……。」

それだけ言ったきり、顔を真っ赤にしてうつむいてしまいました。
？ どうしたのでしょうか？

「……なあ、優。」

「何でしょう？」

一夏に目を向けると、何故か妙な目でこちらを見ていました。

「さっきの口ぶりからすると、前からシャルルが女だって知っていたかのように聞こえるんだが？」

「おや、結構冷静ですね。ちゃんとこちらの話を聞いているみたいですよ。」

「ええ、知っていましたよ。」

「えっ!？」

私の言葉に驚くシャルル。そこまで驚くことだったのでしょうか？
織斑先生とかだったら分かっていそうですけど。いえ、間違いなく分かっているでしょう。

「……じゃあ、何でも言わなかったんだ？」

「シャルルがここに来た理由は調べたら大体分かりましたし、放置しても問題無いと思ったので。」

私達に実害はありませんからね。”白式”のデータを取ったところで、男がISを使えるようになる方法が分かるとは思えませんからそれならコアの解析に力を入れたほうが早いでしょう。

「ここに来た理由？ 一体何なんだ？」

「それは私から話すことはありませんね。」

そう言いながら、シャルルに目を向けます。

「まさかそんなことまで知られているなんて……。うん、話すよ。」

僕がなんでここに来たのかを……。」

「……今まで嘘ついててゴメン。」

悲しそうな表情をしたシャルルの説明が終わりました。ふむ、大体のことは知っていましたが、本人から話を聞くと、また違った印象を受けますね。

「……良いのか、それで。」

「一夏？」

「それで良いのか？ 良いはずがないだろ。親が何だって言うんだ。どうして親だからってだけで子供の自由を奪う権利が有る。可笑しいだろう、そんなものは！」

「一夏、少し落ち着きなさい。」

「でも！」

「今あなたが騒いでも、何も問題は解決しませんよ。」

頭を冷やすべきですよ。怒りを向ける相手はここにいないのですから。

「うつ……、悪い。」

「……一夏、どうしてそんなに怒ってたの？ 本当に変だったよ？」

「俺は——俺と千冬姉は両親に捨てられたから。」

そんなことがあったんですか……。今ここにいる人は皆親に恵まれていないみたいですね。

「その……ゴメン」

「気にしなくて良い。俺の家族は千冬姉だけだから、別に親になんて今更会いたいと思わない。」

「まあ、そうでしょうね。それで、シャルルはこれからどうしたいのですか？」

ここに居れば、そうそう手出しできないでしょうし、安全だとは思いますが、どうしたいのでしょうか。

「どうって……フランス政府も黙っていないだろうし、良くて牢屋じゃ——」

「シャルル、そういうことが聞きたいのではありません。あなたの望みを聞いているんです。」

これから何もしなければどうなるか、なんて予想は聞くつもりありません。そんなくだらないことが聞きたいのではありません。

「……そりゃあ、ここにいたいよ。皆と一緒にいるのは楽しいし。でも——」

「だったら、ここにいればいい。」

シャルルがここにいられないと続けようとした時、一夏が口を挟みました。

「えっ？」

「特記事項第二十一、本学園における生徒はその在学中においてありとあらゆる国家・組織・団体に帰属しない。本人の同意がない場合、それらの外的介入は原則として許可されないものとする。これがあるんだから、少なくともここにいる間は、デュノア社も手出しできないだろ。」

どうやら私が教えた事を、しっかりと覚えていたみたいですね。教えたかがあります。とは言ってもこれは教科書にあったのを覚えさせただけです。」

「それでもデュノア社がシャルルに手を出そうとしてきたら、これを使えば良いでしょう。」

そう言いながら、目の前にデュノア社の不正の証拠を空中投影ディスプレイに表示します。

「これは……？」

「デュノア社の行った違法行為の証拠ですよ。」

元々、見せるつもりはありませんでしたが、一夏が手を差し伸べてしまいましたからね。最後まで責任を取れるようにするべきでしょう。

う。

「嘘……。」

「そんなことをもう調べてあるなんて……、相変わらず優は凄いな。」

シャルルは呆然とし、一夏は呆れた声を出します。＜優亜＞か調べ上げたものですから、私が凄い訳ではないのですけどね。

「……僕は、ここにいてもいいの？」

シャルルが今にも泣き出しそうな顔でそんなことを言いました。はあ、この子は……。

「何当たり前のことを言ってるんだよ、シャルル。」

「一夏の言つとおりです。あなたが居たいのなら、ここに居て良いんですよ。」

あなたのしたいようにすればいいんです。

「……うん、ありがとう。一夏。優。」

シャルルがぼろぼろと涙をこぼしながらそう言いました。私はその姿に庇護欲をそそられて、シャルルを抱き締めました。

「……優？」

「私達はあなたの味方ですから、安心して下さい。ですよ、一夏

「？」

「ああ、いつでも俺たちを頼ってくれ。……ただ、ISのことは優に聞いてくれ。俺じゃあ分からないからな。」

一夏……、余計なことは言わなくて良いですのに……。格好悪いですよ。

「ふふっ、本当にありがとう、二人とも。」

一夏の情け無い発言を聞いて、シャルルが笑い出しました。まあ、シャルルが笑ったなら格好悪かったとしても良いですか。コンコン。

シャルルが落ち着き、普通に笑うようになったので抱き締めるのをやめて開放していると、ノックの音が聞こえてきました。

「一夏さん、いらっしゃいます？ 夕食をまだ取られていないようですけど、体の具合でも悪いのですか？」

扉の向こうからセシリアの声が聞こえてきます。何もこのタイミングで来なくてもいいと思うのですが……。シャルルは今も男装していないので、このままではばれてしまいます。そのため、一夏とシャルルが大慌てしています。それとまったく関係ありませんが、一夏は夕食を食べていなかったのですね。シャルルのことが無くても、勉強は出来なかったということですか。

「一夏さん？ 入りますわよ？」

なかなか返事を返さない一夏に焦れたのか、そんなことを言い出します。

「ど、どうしよう？」

「と、取り敢えず隠れろ。」

「わ、分かったよ。取り敢えず身を潜めて——」

「シャルル、布団の中で十分でしょう。クローゼットに行く必要はありませんよ。」

「あ、あぁっ、そっか！」

二人とも、少し冷静になったほうが良いですよ？ セシリアに怪しまれますから。

「よぉセシリア！ 何だ？ どうした？」

「何をしていますの？」

「シャルルが何だか風邪っぽいって言うから、布団をかけてやったんだ。」

成る程、風邪という事にするのですか。ならば合わせましょう。

「う、ごほっごほっ。」

わざとらしすぎと思いますよ。無理に演技をしないで大丈夫でしょうに。

「私はシャルルのお見舞いです。一夏に勉強を教えにきたら、シャ

ルルが病気だというので。」

「それはお気の毒ですわね。」

どうやら信じてくれたみたいですね。良かったです。

「一夏、夕食を食べていないならセシリアと行って着たらどうですか？ シャルルのことは任せてください。」

とにかく今は出来るだけ早くセシリアに部屋から出て行ってもらいましょう。今はここにいられると困りますからね。

「それは良いですわね！ 私も偶然夕食がまだなんですのよ。参りましょう、一夏さん。」

「お、おう。じゃあ優、頼んだ。」

「はい。」

そして二人が部屋から出て行きました。ふう、ばれずに済みましたね。……あ、夕食もらってくるように言うのを忘れました。……きっと大丈夫ですよ。言わなくても持ってきてくれるはずですよ？

「もう大丈夫ですよ。」

「うん。ありがとう、優。」

「気にすることはありませんよ。」

別に大したことではありませんしね。

「……聞いても良いかな。」

「ええ、構いませんよ。」

シャルルがひどく真面目な顔をして私に聞いてきました。しかし、このタイミングで聞きたいことは一体何なのでしょう？

「どうして、僕に優しくしてくれたの？　僕は優のことも一夏のことも騙してたんだよ？」

「どうしてといわれましても……。そもそも始めはあなたの事情を知っていながら放置していた、つまりは見捨てていたんですよ？　優しいと言える訳ではないと思いますが。」

一夏だったら迷わず動いていたでしょう。先ほどのように。むしろ何故助けてくれなかったとか言われてもおかしくないと思います。

「ううん、今こうやって一夏と一緒に手を差し伸べてくれた。一夏は深く考えてないかもしれないけど、僕を助けるってことは最悪国すら敵に回すかもしれない。優ならそれくらい分かってたでしょ？」

「確かに分かっていたましたが……。一夏が助ける決断をしましたからね。友達が友達を助ける決断をしたんです。友達ならそのために行動するのは当たり前でしょう？」

まあ一夏が行動しなくても、本当にシャルルが困ったことになったら助けるつもりでしたが。始めにシャルルのことを知ったときとは違って、今は友達だと思っていますから。

「それを当たり前だとさらいといえるのがすごいと思うよ。」

「……そうでしょうか？」

友達のために行動するのは当たり前だと聞いていたのですが、違うのでしょうか？

「うん。普通なかなか行動できるものじゃないよ。だから……本当
にありがとう。僕に手を差し伸べてくれて。僕、ここにこれてよか
ったよ。」

そう満面の笑みで言うシャルル。こんな笑顔を見せられると、私ま
で笑顔になりそうになりますね。

「……あなたがそう思えるなら、私もうれしいですね。」

そう言って笑顔のシャルルに、私も笑顔を向けます。……？ シャ
ルルが顔を赤くしてぼかんとしています。何故でしょう？

「……初めて優の笑顔を見たけど……、すごいね。」

「どういう意味ですか、それは。」

前もこんなこともあつた気がしながらシャルルに問いかけますが、
答えてくれません。私が笑うと変なのでしょうか？ もしそうなら
あまり笑わないほうが良いかもしれませんね。それを言ったらシャ
ルルに強く反対されました。本当に何故ですか？

第十三話（後書き）

感想・意見・誤字脱字等がありましたらよろしくお願いします。

優の笑顔は性別問わず皆を魅了します（笑）。普段優は表情の変化が乏しい分、笑顔が強力になっています。

第十四話（前書き）

お待ちしました。

第十四話

「そ、それは本当ですよ!？」

「う、ウソついてないでしょうね!？」

月曜の朝、一夏やシャルルと三人で教室の前まで行くと、いきなり大声が耳に飛び込んできました。相変わらずあの二人は元気ですね。それとも私がおとなしいだけでしょうか？

「なんだ？」

「さあ？」

「私にも分かりません。」

噂にはあまり興味がありませんでしたからね。それでも＜優亜＞に聞けばすぐ調べてくれそうです。

『調べておきましょうか、マスター？』

(……いえ、後で鈴かセシリアに聞けばいいだけですし、そこまでしなくてかまいません。)

たかだか噂話の内容を知るために、学園中のコンピューターにハッキングさせる訳にはいきません。＜優亜＞だったらやりかねませんから釘を刺しておきませんか。

『……わかりました。』

何故そこで不満そうにするのですか。私は＜優亜＞につっこみを入れながら教室に入ります。

「本当だつてば！ この噂、学園中で持ちきりなのよ？ 月末の学年別トーナメントに優勝すると織斑君と交際でき――」

「俺がどうしたって？」

「「「きゃああっ！？」」「」」

一夏が声を掛けた瞬間、噂話をしていた人たちが驚いて飛び上がりました。もう少し待てば勝手に話してくれたと思うのですが、一夏は何故声を掛けたのでしょうかね。

「で、何の話だったんだ？ 俺の名前が出ていたみたいだけど。」

「う、うん？ そうだっけ？」

「さ、さあ、どうだったかしら？」

一夏の質問に口ごもる鈴とセシリア。その様子では何かあるとばらしているようなものだと思いますけど……。

「じゃ、じゃああたし自分のクラスに戻るから！」

「そ、そうですね！ わたくしも自分の席につきませんと。」

そう言って逃げるように鈴とセシリアは行ってしまいました。どう

やら一夏には隠したい内容みたいですね。後で一夏がない時に聞いてみましょうか。ここまで露骨に隠されると気になりますからね。

「……何なんだ？」

「さあ……？」

本当に、一体何なのでしょう。まあ学園中に広まっているらしいですし、すぐに分かるとは思いますが。

「一夏、今日も放課後特訓するよね？」

「ああ、もちろんだ。今日使えるのは、ええと——」

「第三アリーナだ。」

「「わあ!？」」

私達が廊下を並んで歩いていると、後ろから箒が声を掛けてきました。二人はどうやら箒の接近に気づいていなかったみたいです。飛び上がって驚いています。私ですか？ 気配を隠蔽しているわけでもないのに気づかないはありますがありませんよ。それに生身の人間が<優亜>のサーチから逃れることは不可能ですし。

「……そんなに驚くほどのことか。失礼だぞ。」

「お、おう。すまん」

「ごめんなさい。いきなりのことのでびっくりしちゃって。」

「あ、いや、別に責めているわけではないが……。」

シャルルが礼儀正しく頭を下げています。それに筭はばつの悪そうな顔をします。

「たしか今日は使用人数が少なかったはずですが。もしかしたら模擬戦も出来るかもしれませんが、早く行きましょう。」

そう言っただけで私達は第三アリーナへと向かいます。こういふときに出るのですが、本当にIS学園って広いですね。移動が非常に面倒です。

「……おや？」

「どうした、優？」

「いえ、何でもありません。」

周囲の人たちが慌てたように第三アリーナへと向かっていますね。一体何があるのでしょうか。嫌な予感がしますね。
ドゴオンッ！

私の勘に対して正解だとも言うかのようなタイミングで爆発音が聞こえます。私達は様子を見るために観客席に向かいグラウンドを見ます。

「鈴！ セシリア！」

グラウンドの中央の煙から出てきた二人を見て一夏が叫びます。二人のISの装甲は所々損傷しており、一部は完全に破壊されています。二人は煙の中央を睨みつけています。そしてそこから一機のISが煙を裂いて飛び出してきます。

（”シユヴァルツェア・レーゲン”、ということはボーデヴィツヒさんですか……。）

彼女のISも多少損傷していますが、二人に比べると明らかに軽微なものです。二対一でこの損傷度の差、ボーデヴィツヒさんはかなり強いようです。ですがそれよりも……

（あの目は……！）

眼帯で隠されていない左目は、暴力を振るい、そのことに酔っている者の目をしています。力に振り回されている者の目です。彼女は私がかつて散々目にして来た、悪意を持つ者の目をしています。私は彼女の目を見た瞬間に駆け出しました。

「優！？」

シャルルが驚いたように呼びかけますが無視します。そして全速力でピットへと向かいました。階段を何段も飛ばし、人と人の間をすり抜けて走ります。

（＜優亜＞！ ”星空の剣”を展開後、シリウス フォーム・チェンジ に形態変化します！）

『わかりました。』

ピットについた瞬間に＜優亜＞に指示を出しながら”星空の剣”を展開し、フォーム・チェンジシリウスへと形態変化をします。この形態変化は、近接、射撃、防御、高速機動、電子戦の五つにそれぞれ特化した形態に瞬時に機体を変化させるシステムです。今回は移動距離が短いので、瞬間的な加速と近接格闘において特化したシリウスに形態変化します。

（早く止めないと……。）

ピットからわずかに鈴とセシリアが追い詰められ、殴られているのが見えます。あのままでは二人の命に関わります。私は瞬時加速でボーデヴィツヒさんに突撃します。初速だけなら間違いなくあらゆるISの中で最速を誇るシリウス形態の”星空の剣”。その状態での瞬時加速は既存のISの数倍以上の速度にもなります。その速度で体当たりし、ボーデヴィツヒさんを吹き飛ばします。

「優！」

私がボーデヴィツヒさんを吹き飛ばした直後に、一夏が”白式”を纏ってこちらに来ました。しかし、どうやって来たのでしょうか。観客席に居たはずですが。

「一夏、鈴とセシリアを安全な場所に。」

「お、おう。」

私はボーデヴィツヒさんが吹き飛んだ時にできた煙を見ながら一夏に指示します。一夏が二人を確保した時、土煙を裂くようにワイヤーブレードが飛んできました。

「ふっ！」

小さく息を吐きながら『星空の剣』を展開、一夏を狙った物を含めて全て弾き飛ばしました。そして私がワイヤーブレードを弾いている隙に瞬時加速を使ったボーデヴィツヒさんが斬りかかってきました。それを私は『星空の剣』で受け止めます。

「私の邪魔をするか、『黒き魔女』！」

ギチギチギチと、鏝競り合いをしながらボーデヴィツヒさんが叫びます。

「当たり前でしょう。あなたはやり過ぎです。」

それとその名前は嫌なんですがね、と言っても仕方ないだろう事を心の中で呟きます。

「ふん、だったら貴様からだ！！」

そう言っただけワイヤーブレードを使いながらプラズマ刀を振るってくるボーデヴィツヒさん。ワイヤーブレードを避け、剣を受け止め、戦い易い距離を保ちます。勿論、時折隙を突いて私も反撃します。しかし、ボーデヴィツヒさんは剣の腕もワイヤーブレードの操作もかなりレベルが高いです。剣一本だと十分に反撃出来ません。そこで私は僅かな隙を突いて足の『昂』を抜き、光刃を振るいます。私が二本の剣を使うようになったことで、ボーデヴィツヒさんを押し始めます。ワイヤーブレードを弾いた直後に攻撃出来るようになった分、反撃の機会が増えたおかげです。

「ちっ！」

ボーデヴィツヒさんが舌打ちをしながら後ろに下がり、腕をこちらに向けてきます。嫌な予感がした私は全力で回避しました。何が起きたのかは分かりませんが、どうやら回避に成功したみたいです。

「忌々しい、停止結界も避けるか……。」

停止結界、ですか。そう呼びうるISの兵器といえば……。

「……AICですか。また厄介な物を使ってきますね。」

アクティブ・イナーシャル・キャンセラー

AICとは、周辺空間に慣性を停止させる領域を展開し、その領域内の物の動きを封じることが出来るドイツの第三世代型兵器です。一対一では非常に強力ですが、発動にかなりの集中力が必要、エネルギー兵器相手には効果が薄い等の弱点もあります。一対一なら、接近しないか発動前に回避するしかありません。そして シリウス ならば近距離でも回避することが出来ます。

「しかしここまで完成させていましたか……。」

思わず眩きが漏れます。先ほどまでの激しい打ち合いから変わり、ボーデヴィツヒさんはAICを絡めた動きに、私はAICに捕まらないように回避を重視したのになりました。シリウスの機動力を活かし、縦横無尽に、ボーデヴィツヒさんを翻弄するように動きます。

「ちょこまかと！」

AICに捕まったら終わりなんですから仕方ないでしょう、なんて言える訳無いので黙って回避し続けます。回避しながらも少しずつ攻撃を当ててはいるのですが、このままでは長引きそうです。

「うおおおおー！」

どうしたものかと考えていると、二人を安全な場所に運んだ一夏が割り込んできました。しかし素早く反応したボーデヴィツヒさんのAICに捕まってしまいます。

「ふん……。感情的で直線的、絵に描いたような愚図だな。」

「な、何だ！？ くそつ、体がっ……！」

全く、直線的に突っ込むなど何度も言っていますのに、と若干一夏に対して呆れながらも、ボーデヴィツヒさんの気を引いてくれたことに心の中で感謝します。ボーデヴィツヒさんが一夏に気を取られている間に『星空の剣』を収納、大型のハルバート『柄杓星』を展開します。

「ボーデヴィツヒさん、私のことを忘れていませんか？」

そう言いながら思い切り振り回した『柄杓星』をぶつけます。ボーデヴィツヒさんは辛うじて気づいたようで、防御しますが吹き飛ばされます。遠心力が加わっているので、かなりダメージを与えたはずです。

「貴様あ！」

吹き飛んだ場所でボーデヴィツヒさんが怒り狂い叫びます。

「そう怒鳴られましても、戦いの最中に余所に気をやるあなたが悪いと思うのですが。」

そんな私の呟きは聞こえていないようで、吹き飛んだ先から瞬時加速をしてきます。それを迎撃しようと構えたその時、

「……やれやれ、これだからガキの相手は疲れる。」

ボーデヴィツヒさんの剣をIS用の近接ブレードを手にした織斑先生が受け止めました。……受け止めた？ 何の補助も無しにISの攻撃を受け止めるとは……、織斑先生は本当にすごいですね。私は特別製のISスーツの補助無しだと受け流すことまでしか出来ませんよ。あんな風に受け止めたら間違いなく吹き飛ばされてしまいます。一体どうやっているんでしょう。

「模擬戦をやるのは構わん。——が、アリーナのバリアーまで破壊する事態になられては教師として黙認しかねる。この戦いの決着は学年別トーナメントでつけてもらおうか。」

ああ、一夏はアリーナのバリアーを破壊して入ってきたんですね。アリーナに入ってくるのが速いな、と思いましたがそういうことだったんですね。

「教官がそう仰るのなら。」

「分かりました。」

私としては止め時を見失っていたのでむしろありがたいです。この場の全員が織斑先生の提案に頷き、ISを解除します。

「では、学年別トーナメントまで私闘の一切を禁止する。解散！」

織斑先生が強く手を叩き、この場を収めました。それにしてもA I Cは厄介でした。彼女の技量も併せて考えると近接戦闘はかなり大変です。出来る限り近距離での戦闘は避けた方が良さそうですね。

第十四話（後書き）

感想・意見・誤字脱字等がありましたらよろしくお願いします。

形態変化がようやく出せました。他の形態や、武器も出せるようにしたいです。

第十五話（前書き）

お待たせしました。

ようやく十五話が出せました。

第十五話

「……………」

「……………」

第三アリーナでの出来事から一時間。ここは保健室です。今私達の目の前で鈴とセシリアがベットに寝ています。二人は全身に包帯を巻かれ、不機嫌そうに在らぬ方を向いています。一体何故不機嫌なのでしょう？

「別に助けてくれなくてよかったのに。」

「あのまま続けていれば勝っていましたわ。」

いや、思い切り追い詰められていたではないですか。たとえばあの状況から勝てたとしてもあなた達とISに大きな負担がかかってしまうでしょう。そんな事を見過ごすわけにはいきません。

「お前らなあ……。はあ、でもまあ、怪我は大したことなくて安心したぜ。」

命の危険が無いという意味では大したことは無いでしょうが、十分大きな怪我だと思えますよ？ 二、三日安静にしていけないといけませんし。

「こんなの怪我のうちに入ら——いたたたっ！」

「そもそもこうやって横になっていること自体が無意味——つ
うつつ！」

二人が一夏に虚勢を張ろうとして失敗しました。怪我人なんですから甘えれば良いのに、と思ってしまいましたね。普段意地張っている分効果倍増だ、とく優亜>が言っていました。どういうことなのかはよく分かりませんが。

「お前らバカだろ……。」

同意見ですね。怪我人は怪我人らしく休んでいればいいんです。

「バカって何よバカって！ バカ！」

「一夏さんこそ大バカですわ！」

一夏の発言に対し、二人が怒鳴ります。怪我しているときくらい、おとなしくしていれば良いと思うのですが。傷に響くでしょうからね。

「好きな人に格好悪いところを見られたから恥ずかしいんだよ。」

「ん？」

飲み物を買って行っていたシャルルが戻ってきました。しかし、そういうものなのでしょうか？ やはり自分を少しでもよく見てもらいたい、ということでしょうかね。ちなみに、シャルルの言葉は一夏以外には聞こえていたみたいで横になっている二人が大慌てしています。

「ななな何を言ってるのか、全っ然わかんないわね！ こっこここれだから欧州人って困るのよねえっ！」

「べべっ、別にわたくしはっ！ そ、そういう邪推をされるといささか気分を害しますわねっ！」

それでは口に出していることと本心は逆ですよ、と言っている様な物ですよ。まあ、私みたいに嘘をつくの慣れてしまうより良いかもしれませんかね。

「はい、ウーロン茶と紅茶。とりあえず飲んで落ち着いて、ね？」

「ふ、ふんっ！」

「不本意ですがいただきますしゅっ！」

鈴とセシリアは渡された飲み物をひったるように受け取り、ペットボトルの口を開けて一気に飲み始めました。

「シャルル、私にもいただけますか？」

「うん、はい、缶コーヒー。」

「ありがとうございます。」

シャルルから飲み物を頂いた私はプルタブを開け、飲み始めます。……むっ、甘すぎますね。それにミルクを入れたものは嫌いなんですかね。どうも口に合いません。こういうものは飲んだことが無く、興味があったので頼んでみましたが、やはり自分で入れたほうが良いですね。

ドドドドドドッ！

外から地鳴りのような音が聞こえてきます。どうやら沢山の人間が走っているようです。しかも音が大きくなってきたので、こちらの方に向かってきているみたいです。

「な、なんだ？ 何の音だ？」

ドカーンッ！！

一夏の眩きの直後、大きな音と共にドアが吹き飛びました。比喻ではなく、吹き飛びました。蝶番が完全に壊れています。後で先生に言うておかないといけないでしょう。面倒なことです。そして数十人の生徒が雪崩れ込んで来ました。全員が一夏とシャルルに手を伸ばす様子は、余り見ていて気分のいいものではありませんね。

「織斑君！」

「デユノア君！」

皆が一夏とシャルルに声を掛けます。今にも襲い掛かりそうな勢いです。

「な、な、なんだなんだ！？」

「ど、どうしたの、みんな……ちょ、ちょっと落ち着いて。」

「」「」「これ！」「」「」

全員が一斉に紙を突きつけます。そんなにあっても困りますが……。

「な、なにになに……？」

そう言いながら渡されたプリントを読み上げる一夏。私も一夏の手にあるプリントを読みます。

「『今月開催する学年別トーナメントでは、より実践的な模擬戦闘を行うため、二人組みでの参加を必須とする。なお、ペアが出来なかった者は抽選により選ばれた生徒同士で組むものとする。締め切りは』――」

ふむ、二人組みで試合ですか。おそらく無人機襲来事件のようなことを警戒しているのでしょうね。

「ああ、そこまでいいから！ とにかくっ！」

「私と組もう、織斑君！」

「私と組んで、デユノア君！」

そう言って再び手を伸ばしてきます。こちらが押しつぶされそうです。

「え、えっと……。」

「皆さん、残念ですが一夏とシャルルが組みますので、今回は諦めて下さい。」

困っている二人に助け舟を出します。シャルルの男装がばれるのはあまり良くありませんからね。

「あ、ああ。そうなんだ。悪いな、皆。」

「う、うん。そういうことだから、ごめんね?」

少しわざとらしさは残りますが、私の言葉に二人は合わせてくれました。一夏もシャルルのことを考えていたみたいですね。こういう時に合わせるのは苦手でしょうか。

「まあ、そういうことなら……。」

「他の女子と組まれるよりはいいし……。」

「男同士っていうのも絵になるしね……ごほんごほん。」

そう言いながら皆さん出て行きました。さて、私はどうしましょう? 誰と組みましようかね。そう思っていると、鈴とセシリアが動き始めました。

「一夏っ!」

「一夏さんっ!」

「あ、あたしと組みなさいよ! 幼なじみでしょうが!」

「いえ、クラスメイトとしてここはわたくしと!」

怪我人二人が一夏に詰め寄ります。それを止めようかと思ったとき、山田先生が壊れたドアから入ってきました。

「ダメですよ。お二人のISの状態をさっき確認しましたが、ダメージレベルがCを超えています。当分は修復に専念しないと、後

々重大な欠陥を生じさせますよ。ISを休ませる意味でも、トーナメント参加は許可できません。」

まあ、あれだけやられていれば当然ですね。搭乗者達がこれだけ怪我しているんですから。

「うっ、ぐっ……！ わ、わかりました……。」

「不本意ですが……非常に、非常にっ！ 不本意ですが！ トーナメント参加は辞退します……。」

山田先生の説明を聞き、二人はようやく諦めました。……一夏が分かっていない顔をしていますね。

「一夏、IS基礎理論の蓄積経験についての注意事項第三です。」

「え、えーと……。」

「『ISは戦闘経験を含むすべての経験を蓄積することで、より進化した状態へと自らを移行させる。その蓄積経験には損傷時の稼動も含まれ、ISのダメージがレベルCを超えた状態で起動させると、その不完全な状態での特殊エネルギーバイパスを構築してしまうため、それらは逆に平常時での稼動に悪影響を及ぼすことがある』。」

「正解です。」

一夏が言う前にシャルルが答えを言いました。要するに無理をするな、ということです。それを聞いてようやく分かった顔をしました。

「しかし、なんだってラウラとバトルすることになったんだ？」

確かにそれは気になりますね。二人とボーデヴィツヒさんの接点は無いはずですが。

「え、いや、それは……。」

「ま、まあ、何と言いますか……女のプライドを侮辱されたから、ですわね。」

「ふうん？」

歯切れの悪い答えしか返ってきませんね。どういつことなのでしょう。

「ああ。もしかして一夏のことを――」

「あああつ！ デュノアは一言多いわねえ！」

「そ、そうですね！ まったくです！ おほほほほ！」

二人が慌てたように口を塞ぎます。何を言おうとしていたのでしょうか？

「こらこら、やめろつて。シャルルが困ってるだろうが。それにさつきからケガ人のくせに体動かしすだぞ。ホレ。」

そう言つて一夏が二人をつつきます。その瞬間二人はピシリと固まってしまいました。よほど痛いのでしょうかね。

「あ……すまん。そんなに痛いとは思わなかった。悪い。」

「い、い、いちかあ……あんたねえ……。」

「あ、あと、で……おぼえてらっしゃい……。」

二人が物凄い目で一夏を睨みつけます。一夏、二人がよくなったら大変でしょうが頑張つて下さい。

「……やはり、この部分はこちらの方が良いと思いますよ？」

「でも、それだとスラスターの出力が落ちるし……。」

学年別トーナメントの仕様変更を聞いた日の夕食、今日は簪と夕食を食べました。一夏達と食えるときは騒がしくなりやすいのですが、簪とだと落ち着いた食事となります。会話は余り多くありませんが決して嫌なものではないですね。簪と食えると、何とか癒されます。

「そこはバイパスをいくつか繋いだり、スラスタ―そのものの改良をすれば良いでしょう。簀は情報処理能力が高いですから、下手すると“打鉄式”の方があなたについていけなくなりますよ。」

すでに夕食を食べ終え、食後にコーヒーを飲みながら”打鉄式”の開発について話しています。開発者レベルの話を気兼ねなく出来るのは簗くらいしかいかなんですよね。ですから、非常に楽しいです。

「だったら、その形式にするだけじゃなくて、他の部分も一部見直して適合しやすくさせないと……。」

「そうですね。その辺りも手伝いますよ。」

「……うん。ありがとう」

「私が好きでやっているだけですから。」

簪は友達ですし、ISに触れるのは楽しいですからね。

「……ああ、そうだ。簪は学年別トーナメントには出場するんですか？」

まだ”打鉄式”は未完成ですが、実戦データは貴重ですからね。もしかしたら出るかもしれません。

「……うん。まだ高速での機動は、不安定だし、武装も『夢現』しか完成してなくて、『山嵐』と『春雷』は未完成だから……。」

とは言っていますが、ほとんど何も出来ていない状況から三ヶ月にも満たない期間で、私も手伝ったとはいえ半分以上独力で、普通に稼働させるだけなら問題ないレベルにまで達しています。こんなこと出来るのは束さん以外私は知りません。簪はお姉さんにコンプレックスを抱いているらしいですが、正直何故なのか分からないくらいすごいことです。あ、本来学年別トーナメントは強制参加ですが、簪のような状況なら特別に不参加でいいみたいです。

「そうですね……。あなたが参加するならペアを組みたかったので

すがね。」

「……私と？　なんで？」

何故かそこで簪が心底驚いたような顔をしました。何故そんな顔をするのでしょうか？

「何故と言われましても……、友達だからとしか言えませんよ。」

誰と組もうか、と考えていたら最初に簪が浮かんだんですね。

「……それなら、織斑一夏とかでも問題ない……。」

そういう簪の表情が少し曇ります。簪の”打鉄式”は”白式”のせいで未完成のまま簪に渡されましたからね。どうしてもいい感情は持てないでしょう。

「確かに一夏も友達ですが……、一夏はシャルルとペアですし、もしそうでなくとも一夏争奪戦に参加する気はありませんから簪と組もうと思いましたよ。」

簪は強いですしね。一回簪自身のデータを取るために訓練機で模擬戦をしたのですが、シャルルと互角以上の腕を持っていました。そういう意味でもペアを組みたかったのですがね……。出場しないのは残念です。

「……本当？」

私がそのことを話しても不安そうにしています。この子は本当に自分を過小評価しすぎです。もう少し自信を持つべきですね。

「勿論。嘘をつく理由もありませんしね。」

「……そう。……ごめんね。」

私の言葉を聞いた簪は、一度目を閉じ、それから謝ってきました。おそらくペアを組めないと言ったことでしょう。

「いえ、あなたの事情は知っていますから。……おや、もうこんな時間です。織斑先生に怒られないうちに部屋に戻りましょう。」

後五分で食事の時間は終わりです。周りの人もほとんど部屋に戻ってしまいました。

「うん、お休み、優。」

「ええ、お休みなさい、簪。」

私達は挨拶を交わしてそれぞれの部屋へと戻っていききました。しかし、簪とペアと組めないとなると、誰とペアを組みましょうか。私はあまり友達は多くありませんから大変です。どうしましょう？

第十五話（後書き）

感想・意見・誤字脱字等がありましたらよろしく願います。

優は簪とはだいぶ仲良くなっています。余裕がある時は出来るだけ簪を出していいこうと思います。

第十六話（前書き）

お待たせしました。

今回は優の過去話です。こつこつ話は閑話とかにしたほうがいいの
でしょうかね？

第十六話

私がボーデヴィツヒさんと戦い、織斑先生に止められてから数日、部屋でシャルルと共に一夏の勉強をしています。

「一夏、P I Cによる慣性制御は空間作用によって行われています。百パーセント空間作用だけで慣性を制御しているわけではありませんが、単なる推進翼では出来ないことを空間に作用することで行っているんです。」

本当はもっと色々話すべきことはありますが、最低限のことをまず話さないといけませんからね。こついうところから話していきます。

「そ、そうなのか……。」

「分かりにくいなら、水の入ったボールを想像して見て下さい。ボールを動かせば中の水も動くでしょう？ P I Cによって私達が動けるのはそういうわけです。」

この言い方は正確ではありませんが、イメージの助けにはなるでしょう。

「おお！ 成る程、反重力力翼だとか流動波干渉がどのとかはよく分からなかったけど、それなら分かりやすいな。」

忘れているわけではないようなので良いですが……。出来ればちゃんと理解してもらいたいですね。

「あとね、体がGで潰れないようにしてくれたりもしているんだよ。だから単なる推進装置ではなく操縦者保護機能としての側面もあるんだよ。」

左からシャルルの説明が入ります。やはりシャルルはちゃんとした説明をしてくれますね。私だと関係ない細かい部分にまで話が飛びかねないんですね。

「へえ、本当にP I Cってすごいんだな。」

今の説明を聞いてそれだけです……。自分の命を預けるものなんですから、もう少し興味を持つべきだと思いますよ？

「……今日はこれくらいにしておきますか。今日はそれなりに進みましたし。」

「おう。……そういえばさ、優。」

「はい、何でしょう？」

ようやく勉強が終わった、という顔をした後、思いつきのように一夏が質問してきました。一体なんでしょう？

「ふと思ったんだけど、優と東さんってどこで出会ったんだ？ 正直あの人知らない人に興味を持つのが想像出来ないんだが。」

私と東さんの出会い……ですか。

「あ、それは僕も知りたいかな。差し支えなければ教えて欲しいな。」

一夏の質問にシャルルが乗って来ました。シャルルは束さんの性格を知らないでしょうが、ISの生みの親と仲がいいというのは気になるでしょう。

「勿論それは構いませんが……大して面白い話ではありませんよ？」

特に劇的な出会いの仕方ではありませんからね。

「それでもいいさ。まだ寝るには早いし、教えてくれよ。」

確かにまだ十時にもなっていないですね。そこまで長く話すつもりもありませんし、良いかもしれませんね。

「分かりました。そこまで言うなら語りましょう。……あれは私がスラムにいた頃、今から大体五年くら――」

「ちょ、ちょっと待ってくれ。」

私が話し始めた途端、困惑したような顔で一夏が声を上げました。

「……何ですか？」

いきなり話の腰を折らないで欲しいですね。つい不機嫌そうに返してしまっただけではないですか。

「スラムに居たってどういうことだ？ もうちょっと前から話してくれ。じゃないと意味がわからん。」

あ……。確かに、一夏達は何も知らないんでしたね。

「……それもそうですね。ではそこも話すとなると、私の過去を大
体話したほうがよさそうですね。……まずは両親の話からですね。」

そこから話すのが一番分かりやすいでしょう。むしろそこから話さ
ないと話の流れが見えてこないかもしれません。

「私の父と母の出会いは大学です。そこで意気投合して仲良くなり、
次第に恋に落ちたそうです。」

ちなみに付き合うまではもっぱら父の方がアピールしていたそうで
す。一夏とは違って鈍感では無いようです。

「そして恋人となり、大学を卒業する頃には結婚をする約束をして
いたそうですが……母方の実家に猛反対を受けてしまったと聞いて
います。」

「どうしてだ？」

「母は、婚約者もいるのに見ず知らずの男と結婚させる訳にはいか
ない、と言われたそうです。母はその婚約者とは会ったことも無い
のに、です。」

婚約者とやらは、写真で見た限り四十近い太った男だったらしいで
す。不細工だと断言していましたね。因みに父は日本人とフランス
人のハーフです。つまり私はクォーターですね。とはいえ顔立ちも
日本人と大きく変わるとかでもありませんけどね。

「酷い親だな……。」

「確かにそうですね。そしてそれに反発した父と母は海外へと逃げる……つまりは駆け落ちを決断しました。」

「駆け落ちかあ……。」

駆け落ちと言う言葉を聞いて、シャルルが夢見るような表情をしました。これは女の子らしい反応かもしれませんが。そのようなことを束さんが言っていた気がします。私には何がいいのかわかりませんけどね。

「駆け落ち後は大変だったそうです。金もほとんど無く、実家からの追っ手から逃げるため逃げ回る生活。その頃にはすでに妊娠していたので激しく動くことも出来ず、辛い物だったそうですよ。」

父しか働けず、住処もぼろぼろで、ぎりぎりの生活だと言っていました。

「そして実家から逃げ出してから半年以上たったある日、どこかの病院で母は私達を出産しました。そういえば、私達が生まれたのはどこの病院か聞いていませんので、私の出身は不明なんですよね。」

まあ、ヨーロッパのどこかではあると思いますけど。始めはフランスに逃げてそこから他の国へ行ったと言っていましたから。ちゃんとした病院で産んでいたみたいですし。

「私達？ 私じゃなくて？」

シャルルが疑問の声を上げます。ああ、確かに話したことはありませんでしたね。ならばその疑問も当然ですか。

「ええ、私は双子ですから。因みに私の方が先に生まれたので姉になりますね。」

「優って妹が居たんだな……。あれ、じゃあ優の妹は今どこに居るんだ？」

ああ、確かにその疑問はもつともですね。

「それもこれから話しますよ。……私達を産んでからは母も弱っていて動けないのでしばらく同じところに居ることになりました。しばらくは今までより安定した生活が続きまして。ですが、私が二歳になる前に父が交通事故で亡くなってしまいましたね。お金が無くなって住んでいたところから追い出され、住処を探すうちにスラムへと流れ着くことになりました。」

スラムにいた、というのはそういうことです。私が父が死んだという話を話すと、二人がばつの悪そうな顔をしました。そういうつもりで話したのではないのですがね。

「……悪い。」

「気にしないでください。顔も分からない相手ですから。」

別に父に対して何か思っているわけでもありませんしね。言葉は悪いですが興味ありませんから。

「それで、スラムで暮らすこととなったのですが、比較的ましな生活だったと思います。何とか食べていけるくらいはお金がありましたからね。それにごみ山には壊れた機械が沢山ありましたから、遊び道具にも困りませんでしたしね。」

今思えば、私がISや機械をいじるのが好きなのはここから来ているのかもしれませんが。」

「母は生きるために働き、私は妹を連れ機械に触れて遊ぶ、そんな生活が続きました。しかし、それは私が五歳になる頃に終わりを迎えました。母と妹がある日突然いなくなってしまうました。」

「え？ 随分いきなりだけどなんで？」

「母の実家から送られてきた人間が私達を見つけましてね。たまたま私はごみ山にいたため見つからなかったのですが、母と妹は連れ去られてしまいました。」

シャルルの疑問に答えながらその日を思い返します。あの日はつかったですね。居るのが当たり前だと思っていた二人がどこを探しても見つかりませんでしたから。

「……二人は大丈夫なの？」

「大丈夫だと思いますよ。調べた限りでは二人とも実家で無事に過ごしているようですから。」

実家の方も連れ戻したかっただけみたいですからね。シャルルのようなことにはなっていないようでした。

「母と妹が居なくなつてからは辛かったですね。支えとなるものはおろか、その日の食事さえ無くなりましたから。泥水を啜り、食べ物奪い、盗み、騙しながら生き延びることに必死にでした。」

時には奪われ、嗤われ、殴られ、裏切られました。何度か捕まりかけたかもしれませんね。それらのことを話すと二人とも啞然とした顔をしました。二人には少し刺激が強かったでしょうか？ 私には懐かしいとは思えませんがね。

「地獄のような場所で、ただひたすらに生きていました。しかし、そんな生活は束さんと出会った事で終わりとなりました。」

ようやく始めに話そうとした所まで来ましたね。随分かった気がします。

「あれは十歳を過ぎた頃だったはずです。その頃はごみ山から機械を見つけ、使えるようにしてそれを売ること与生活費を稼いでいました。その日も同じように使えるものを探していると、いきなり後ろから束さんに声を掛けられました。前にそうと知らず束さんのパソコンにハッキングを仕掛けて逆探知された挙句、パソコンを破壊されたことがあったのですが、どうもそれが束さんの興味を惹いたようでしてね。『この私のパソコンにハッキングを仕掛けた変わり者の顔を見てみよう。』という具合にあんどこまで来たそうです。」

何とか直して電波が来るようにして、電力も供給できるようにしたパソコンがあつという間に駄目にされたのにはショックを受けましたね。

「いきなり声を掛けられて驚きつつも二言三言会話を交わしていたら好意を持たれましたね。その場でISを渡されましたよ。これが束さんとの初めての出会いですね。あの時の態度の豹変には面食らいましたね。」

正直そのとき渡されたISに夢中になっていたせいでちゃんと覚えていませんけど。東さんが聞いたら随分騒ぎそうですね。

「そこからはたまに東さんが来てISについて教えてくれたりした程度でしたけど、三年前にいきなり『一緒に逃避行だー！』などと言い出してスラムから連れ出されましたね。まあそこからは、東さんにISのことを教わり、東さんの手伝いをする毎日でした。それから今年の四月に東さんが私をIS学園に入学させ、あなた達と出会ったことになった、というわけです。」

一夏達と出会えたので少しだけ東さんには感謝しています。あの人が何もしなければ私が皆と会うことは無かったでしょうから。

「何と言うか……波瀾万丈な人生だなあ。」

「確かに、普通とは言えない人生だとは思いますよ。」

それに一夏には言われたくありませんね。まあ、決して悪いものでもありませんでしたけど。

「……そういえば篠ノ乃博士は何で優をIS学園ニに入学させたの？」

シャルルが思い出したように疑問の声を上げます。確かにそこは端折った部分ですね。

「ああ、それですか。一夏と箒を守ってくれ、だそうですよ。もっとも、言われたから友達になったというわけでもありませんし、そういうこととは関係なく困っているときには手を差し伸べるつもりですけどね。」

「一夏がもしちゃんと予習をしていたら今のように関わることは無かったかもしれませんね。」

「束さんがそんな事を……。」

「一夏が納得いったような、驚いたような不思議な表情をします。」

「ええ、あの人が何を考えているのかはよく分かりませんけどね。」

「……そろそろ終わりにしますか？ もう遅くなりましたし。」

「思ったより長く話しましたね。明日も早いですからそろそろ休むべきでしょう。そう思いながら私は立ち上がります。」

「おう、そうだな。あと、ありがとな優。話してくれて。」

「あまり面白い話でもなかったと思いますけどね。では私はこれでお休みなさい。」

「ああ、お休み。」

「うん、また明日ね。お休み。」

二人の挨拶を聞きながら部屋から出て行きます。あんなに長くしゃべったのは初めてでしたね。少し疲れました。でも、色々と思い出すこともありまし、なかなか楽しかったですね。とはいえ積極的に話すようなことでも無いので、こんなことをまた話すような機会は無いでしょうね。

第十六話（後書き）

感想・意見・誤字脱字等がありましたらよろしくお願いします。

突っ込み所は多いでしょうし、分かりにくい点も多いと思いますのでどんどん聞いてください。

第十七話（前書き）

お待たせしました。

学年別トーナメントが始まります。

第十七話

六月も最終週に入り、IS学園は月曜日から学年別トーナメント一色に変わります。非常に慌しく、全校生徒がこの行事のために動いています。とは言っても、一年生なのでそこまで仕事が多い訳ではありませんが。そしてそれらの雑事が終わり、私達は慌ただしく更衣室に向かいます。着替える必要のない私は、トーナメント表が発表されるのを待っています。自分の対戦相手とペアを確認するためです。……ええそうです。ペアが見つからなかったんです。筈に断られ、他の人も既にペアを組んでいて駄目でした。その為こうして抽選を待っている、という訳です。

「ようやく出ましたか。……！」

女子生徒で溢れ変える更衣室のモニターにトーナメント表が表示されました。

「……まさかこうなるとは思いませんでしたね。」

そこに表示されていたのは、一夏とシャルル対私とボーデヴィツヒさんでした。一回戦から一夏達と当たるのにも驚きましたが、それ以上にボーデヴィツヒさんとペアを組むことになるとも思いませんでした。……おや、ボーデヴィツヒさんが近づいてきました。何の用でしょう？

「……貴様とペアを組むことになるとはな、『黒き魔女』。」

こちらに近づいてきたボーデヴィツヒさんが苦々しく言ってきました

た。相変わらずその名前で私のことを呼ぶんですよ、この人は。

「ええ、私も考えていませんでしたよ、ボーデヴィツヒさん。それと、その名で呼ばないで欲しいものですね。私には有峰優という名前があるんです。」

ボーデヴィツヒさんが剣呑な空気を纏っているせいで、周囲の生徒が私達から離れていきます。周りに人がいるんですから無闇矢鱈に敵意をぶつけるのは止めて欲しいですね。軍人だったら少しは感情をコントロールして欲しいものです。

「興味ないな。それよりこの戦い、貴様は手を出すな。あれは私の獲物だ。」

憎悪の炎を目に宿らせながら、ボーデヴィツヒさんが言います。成る程、何故私のところに来たのかと思ったらそれが言いたかったんですね、納得です。

「……仕方ありませんね。あなたが倒されるまで私から手を出さないでいてあげますよ。」

「貴様……。私があんな下らん種馬に負けるとでも言うのか？」

私の言葉にボーデヴィツヒさんがこちらを睨み、辺りに殺気を振り撒きます。そして周りの生徒達がさらに距離を開けていきます。

「ええ、一夏達が勝利するでしょうね。」

ボーデヴィツヒさんは確かに高い技量を持っています。私以外の一年では最強と言って良いほどのものでしょう。しかし『強く』はあ

りません。力に振り回され、それでいながら力に依存しています。存在意義を求めています。そういう意味では一夏の方がよほど強いです。

「……ふん、まあいい。すぐに分かる。織斑一夏を倒したら次は貴様だ。この大会が終わったら叩き潰してやる。」

それだけ言っただヴィヒさんは歩いて行ってしまいました。ボーデヴィヒさんが去っていったことで周囲の喧騒が戻ってくるのを感じながら私は溜息を吐きました。一夏との戦いで少しは変わってくれることでも祈りましょうかね。でないとまた戦う羽目になりそうです。戦うこと自体は嫌いではありませんがああも敵意をぶつけられると面倒だという気持ちの方が強くなるんですね。それにあの様子だと私が負けるまで何度でも絡んできそうですね。本当に止めて欲しいものです。

「一戦目で当たるとはな。待つ手間が省けたというものだ。」

「そりゃあ何よりだ。こっちも同じ気持ちだぜ。」

試合直前、一夏とボーデヴィヒさんが敵意をぶつけ合っている隣で私は目を瞑り、腕を組んで試合開始を待っています。因みにどうでも良いことですが、私のIS“星空の剣”は普通のISより小さく細いので通常のISでは行い難い腕組みや足組みが簡単に行えます。本当にどうでもいいですね。そんなくだらないことを考えているとシャルルが声を掛けてきました。

「まさか優がボーデヴィツヒさんとのペアになるとは思わなかったな。」

「ええ。私もこうなるとは思っていませんでしたね。ですが、シャルル達も私相手でも負けるつもりは無いのでしょうか？」

「勿論。優も相手にすることになったけど、勝って見せるよ。」

いい気迫ですね。まあ、ボーデヴィツヒさんが負けるまでこちらから手を出すつもりはありませんが。そこまで私が考えた瞬間、試合開始のブザーが鳴り響きました。

「叩きのめす。」

一夏とボーデヴィツヒさん、二人の台詞は奇しくも同じ物でした。私が後ろに下がるのと同時に、一夏がボーデヴィツヒさんに突撃します。ですがそれを読んでいたボーデヴィツヒさんにAICで捕まっています。

「開幕直後の先制攻撃か。わかりやすいな。」

「……そりやどうも。以心伝心で何よりだ。」

「ならば私が次にどうするかもわかるだろう。」

そう言いながら大型レール砲を一夏に向け発射しようとしています。しかし、

「させないよ。」

シャルルが一夏の後ろから飛び出し、ボーデヴィツヒさんに六一口径アサルトカノン『ガラム』による射撃を浴びせます。

「ちつ……！」

その射撃によつて一夏を狙ったカノンは狙いを外します。ボーデヴィツヒさんは急後退して間合いを取ります。

「今度こそっ！」

そう叫びながら体勢を立て直す暇を与えぬように一夏が斬りかかります。流石にAICを発動する暇が無かったのかプラズマ手刀で一夏の攻撃を受け止めます。技量で言えばボーデヴィツヒさんの方が上ですが、一度体勢を崩した状態からでは流石に一夏に押されたままになっています。一夏が攻め続けていられるのはシャルルの的確なサポートがあるからでもあります。

「おっと。」

そんなふうに観戦していると、不意にシャルルがこちらを撃ってきました。まあ向こうも牽制のつもりでしかないでしょうが容易くかわします。そのまま牽制するだけでボーデヴィツヒさんとの戦いを続けるのかと思えば、こちらに向かってきて銃を撃ってきます。一夏を放っておいて私の方に向かってくるつもりみたいですね。

「おや、一夏の援護をしなくていいのですか？」

「うん。優をどうにかしないと僕らに勝ち目は無いからね。」

「……あなた一人で私をどうにか出来るとでも？　甘く見ないでもらいたいものですね。」

シャルルが放つ銃弾を全て紙一重でかわしながら言葉を交わします。以前も言いましたが、たかが代表候補生に負けるつもりはありません。シャルルも私に一人で向かってきても絶対に勝てないと分かっているはずですが。何度か模擬戦をして、全て私が勝っていますからね。

「そんなこと思っていないよ。このまま戦っても僕に勝ち目は無いだろうね。でも……。」

そこで言葉を切って近接ブレード『ブレット・スライサー』を呼び出し、私に斬りかかります。それを右手に呼び出した『星空の剣』で受け止めます。向こうは両手、こちらは片手ですが、機体そのもののパワーが違うので互角以上に鏖迫り合いをします。

「……でも、何ですか？」

片手の私に押されている状態に顔をしかめていたシャルルがそこで笑います。

「でも、この戦いは――」

「うおおおおおー！！！」

「――タッグマッチなんだよ？」

シャルルの言葉と共にボーデヴィツヒさんと戦っていたはずの一夏が零落白夜を発動させ、瞬時加速を使って私に向かってきました。

成る程、シャルルが気を惹き、その隙に一夏が一撃で私を落とそう、という作戦ですか。一夏はボーデヴィツヒさんと戦っていたはずですが、どうにかしたみたいですね。

「作戦は悪くありませんが……舐められたものですね。この程度で私を倒せるとでも？」

捨て身で特攻すれば私に届くと思っているのかもしれませんが、甘すぎます。空いている左手にハルバート『柄杓星』を呼び出し、シャルルを押し切りながら接近してきた一夏の『雪片式型』のエネルギー刃の出ていない根元を正確に叩き、受け流します。

「元々手を出すつもりはありませんでしたが……、そちらが手を出してきたんです。私も攻撃させてもらいましょう。」

ボーデヴィツヒさんにもこちらからは戦わないとしか言っていないまんからね。向こうがやる気ならこちらも応戦するだけです。という事で『星の欠片』をいくつか射出しながら体勢の崩れた一夏に『柄杓星』を振るい、吹き飛ばします。シャルルに『星の欠片』で牽制しながら一夏に追撃を掛けようとすると、一夏と私にワイヤーブレードが飛んできました。正確には私を巻き込むようなコースでワイヤーブレードが一夏に向けて射出された、ですね。勿論喰らうつもりはありませんので全て叩き落します。

「……何のつもりですか？ ボーデヴィツヒさん？」

「ふん。私の獲物に手を出すなど言っただろう。」

「だからと言って一応味方の私に攻撃するとは、あなたは馬鹿なんでしょうか？」

大体、一夏を逃がすあなたが悪いんです。そんなに一夏を叩きのめしたいのなら逃がさぬようにして欲しいものです。

「味方？ ハツ。馬鹿馬鹿しい。私と貴様は敵同士だ。そうだろう？ 『黒き魔女』。」

……この場でその名で呼びますか。観戦している政府関係者の一部が反応しているではありませんか。ああ面倒くさい。ただでさえ”星空の剣”について情報公開しろだとか言われるのを対処しなければいけないというのに、また余計な手間を掛けさせますね。ああ、ボーデヴィツヒさんのせいで他の苛立ちの種まで思い出してしまっただではないですか。箒、鈴、セシリアが勝手にライバル視してきたり（私は恋愛そのものに興味が無いと言っているんですけど）、見知らぬ生徒に告白されたり（私は同姓ですよ！？ 私にはそんな趣味ありません。勿論断りました）、整備科の人たちが技術指導をして欲しいと迫ってきますし（何度断っても繰り返してくるんです）、束さんに夜中の三時に日本の違法施設を潰すように頼まれたり（夜中に束さんのテンションはつらいです）とか、思い出して苛立ってきたではありませんか。

「……いいでしょう。私を敵だというなら、今ここで掛かってきなさい。完膚なきまでに打ちのめしてあげますよ。」

完全に八つ当たりですが、私だって聖人君子ではないんです。八つ当たりくらい許して下さい。それに原因の一端はボーデヴィツヒさんにあるんです。向こうも戦いたがっていますし、問題ないでしょう。本来ならば状況に応じて感情を抑えるべきでしょうが、たまにはこういうのもいいでしょう。

「いいだろう。この場で貴様を倒してやる『黒き魔女』！」

私の言葉ににやりと笑ってそう叫び、プラズマ手刀を構えて突進します。

「ああそうだ、一夏達も一緒に掛かってきなさい。私を倒すまでボーデヴィツヒさんとは戦わせませんよ。」

『柄杓星』でボーデヴィツヒさんの攻撃を受け流しながら一夏とシャルルに呼びかけます。この際ですから一夏達も巻き込んでしましましょう。第一、元々対戦相手なんです。問題はありません。

「へ？ 俺達もか？」

未だに一夏は呆けているみたいです。まあいきなり相手が仲間割れしたら驚くでしょうけど。

「ええ。三人がかりなら私に一太刀浴びせられるかもしれませんよ？」

あまり乗り気ではないようなので挑発します。今の私は戦いたい気分なんです。私がそう言くと、案の定一夏はむっとした顔をします。

「いくら優でも、それは言い過ぎじゃねえか？」

「そう思うのでしたら、試してみますか？」

そこでボーデヴィツヒさんと距離を取り、『星の欠片』で近付けないように牽制しながら一夏とシャルルに向き直ります。そして『かってこい』とジェスチャーをします。

「いいぜ、やってやるよ。後悔するなよ優！行くぞシャルル！」

「うん。僕だつて代表候補生なんだ。あそこまで舐められたら黙ってられないよ。」

ふむ、シャルルもやる気十分みたいですね。挑発した甲斐がありました。ボーデヴィツヒさん、一夏、シャルル、久し振りに自由に戦わせてもらいますから、楽しませて下さいよ？

第十七話（後書き）

感想・意見・誤字脱字等がありましたらよろしく願います。

第が優の誘いを断ったのは自分の力で優勝しなければ意味がないと思っただからです。

あと今回優がおかしくなってます。ですがストレス溜まっていたと言っ事で許してあげてください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7104v/>

IS ～ 星空の剣 ～

2011年11月16日08時58分発行